熊本県文化財調査報告第217集

船入遺跡

一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査

熊本県教育委員会

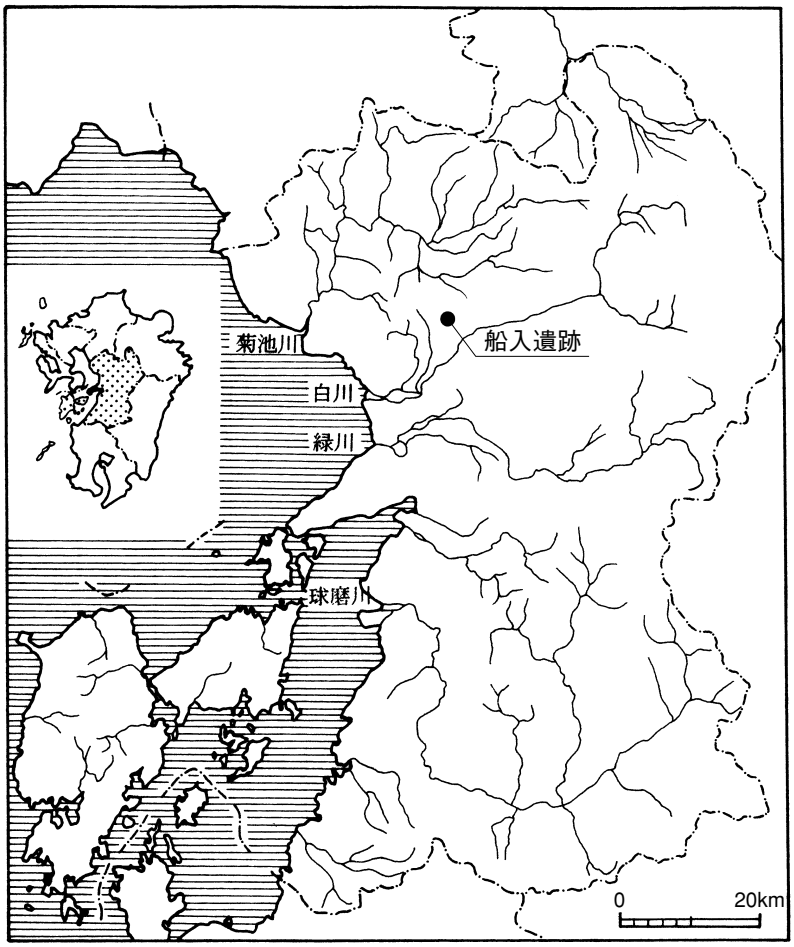
Copyright by Board of Education, Kumamoto Prefectural Office

（1）船入遺跡遠景

（２）船入遺跡全景

船入遺跡

一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査



熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財調査として、船入遺跡及び伝てっぽう塚の発掘調査を実施しました。

調査の結果、船入遺跡では室町時代の堀に囲まれた居館跡等の遺構を確認しました。また遺構からは中国から輸入された陶磁器の他、在地系の日用雑器等の遺物が出土しました。本遺跡は中世城である須屋城跡と指呼の間にあります。本遺跡周辺地域の中世の様相を考える貴重な資料になるものであります。

このたび、船入遺跡の報告書を刊行することになりましたが、本報告書が広く県民の皆様の文化財に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展に些かでも寄与できれば喜びに堪えません。

なお、発掘調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から御協力をいただいた国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、西合志町教育委員会及び地元の関係者の皆様、またご指導を戴きました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成16年３月31日

熊本県教育長

田　中　力　男

例　　言

1　本書は、一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成13年度に実施した熊本県菊池郡西合志町大字須屋字船入に所在する「船入遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。

2　調査は、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の委託を受けて、熊本県教育委員会が行った。

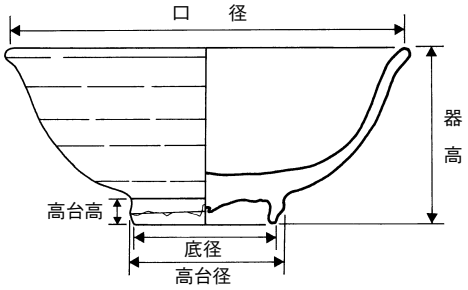
3　現地調査は、角田賢治・阿南麻衣が行った。出土人骨の実測は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに依頼した。地形測量の一部を㈱国際航業、空中写真は㈱九州航空熊本事業所に委託した。

4　本書におけるレベル高は、全て標高を表し、方位は真北を示す。

5　整理は、平成14年度に行った。遺物の整理は吉本清子、今村幸枝、山野孝子、森崎潔子、実測等は横山明代、井島秀子、井上裕美、宮崎典子、坂本貴美子、堤佑季、角田が行った。遺物の写真撮影は、村田百合子の協力を得て角田が行った。

6　本書収録の際には以下の縮尺で作成した。掘立柱建物80分の１、堀、溝、階段状遺構、道路状遺構60分の１（一部40分の１）、土坑40分の１、土壙墓20分の１で行った。

7　出土遺物は、土器類、石製品、金属製品、銅銭に大別し、各種別ごとに番号を附した。例えば、第23図の80番の遺物であれば23－80で表記した。なお、縮尺は、古銭１分の１、その他３分の１である。陶磁器類の法量については、右記の箇所を基準に計測している。



8　本書の執筆、編集は角田があたり、校正に際しては横山が補助した。なお、出土人骨の分析については、松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）に玉稿頂き、第Ⅳ章に掲載した。

9　遺物等の一切の資料は、熊本県文化財資料室（熊本市渡鹿３丁目15－12）で一括保管している。

目　　次

序　文
例　言

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯……3
　1　調査の契機……3
　2　予備調査の経過……4
　3　発掘調査の進捗……4
　4　調査の組織……4

第２節　調査の方法と経過……4
　1　調査の方法……4
　2　調査の経過……6

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境……11
　1　地理的環境……11
　2　歴史的環境……11

第２節　遺跡の概要……14

第３節　遺跡の層位……16

第Ⅲ章　調査とその成果

第１節　遺　　構……19
　1　はじめに……19
　2　掘立柱建物……19
　3　柱　　列……23
　4　　堀　……23
　5　階段状遺構……24
　6　道路状遺構……25
　7　　溝　……26
　8　土　　坑……32
　9　土　壙　墓……34

第２節　遺　　物……38
　1　はじめに……38
　2　土　器　類……38

3　石　製　品……73
4　金 属 製 品……73

第Ⅳ章　分　　析
船入遺跡出土人骨について……91

第Ⅴ章　ま　と　め ……101

付　編　伝てっぽう塚

参考文献
写真図版
あとがき

挿　図　目　次

第１図　熊本北バイパス関連埋蔵文化財分布図
第２図　遺構配置図
第３図　周辺遺跡地図
第４図　周辺地形図
第５図　基本土層図
第６図　掘立柱建物実測図１
第７図　掘立柱建物実測図２
第８図　柱列実測図
第９図　堀断面実測図１
第10図　堀断面実測図２
第11図　階段状遺構実測図
第12図　道路状遺構実測図
第13図　溝実測図１
第14図　溝実測図２
第15図　溝実測図３
第16図　土坑実測図１
第17図　土坑実測図２
第18図　土壙墓実測図
第19図　出土遺物実測図１
第20図　出土遺物実測図２
第21図　出土遺物実測図３
第22図　出土遺物実測図４
第23図　出土遺物実測図５
第24図　出土遺物実測図６
第25図　出土遺物実測図７
第26図　出土遺物実測図８
第27図　出土遺物実測図９
第28図　出土遺物実測図10
第29図　出土遺物実測図11
第30図　出土遺物実測図12
第31図　出土遺物実測図13
第32図　出土遺物実測図14
第33図　出土遺物実測図15
第34図　出土遺物実測図16
第35図　出土遺物実測図17
第36図　出土遺物実測図18
第37図　出土遺物実測図19
第38図　出土遺物実測図20
第39図　出土遺物実測図21
第40図　出土遺物実測図22
第41図　出土遺物（石製品）実測図23
第42図　出土遺物（石製品）実測図24
第43図　出土遺物（金属製品）実測図25
第44図　出土遺物（金属製品）実測図26
第45図　出土遺物（銅銭）拓本27
第46図　Ⅱ区全体断面図
第47図　堀推定図
第48図　周辺地籍図
付　図　船入遺跡遺構配置図

表　目　次

第１表　熊本北バイパス関連埋蔵文化財
第２表　船入遺跡周辺主要遺跡一覧表
第３表　銅銭観察表
第４表　土器類観察表
第５表　石製品観察表
第６表　金属製品観察表

図　版　目　次

（１）　船入遺跡遠景
（２）　船入遺跡全景
（３）　遺跡全景
（４）　１号掘立柱建物
（５）　２号掘立柱建物
（６）　１号堀全景
（７）　１号堀断面
（８）　１号堀
（９）　階段状遺構
（10）　道路状遺構　第１面
（11）　道路状遺構　第２・３面
（12）　２号溝
（13）　２号溝・６号土坑
（14）　４号土坑
（15）　８号土坑
（16）　１号土壙墓
（17）　２号・３号土壙墓
（18）　遺物①
（19）　遺物②
（20）　遺物③
（21）　遺物④
（22）　遺物⑤
（23）　遺物⑥
（24）　遺物⑦
（25）　遺物⑧
（26）　遺物⑨
（27）　遺物⑩
（28）　遺物⑪
（29）　遺物⑫
（30）　遺物⑬
（31）　遺物⑭
（32）　遺物⑮
（33）　遺物⑯
（34）　遺物⑰
（35）　遺物⑱
（36）　遺物⑲
（37）　遺物⑳
（38）　遺物㉑
（39）　遺物㉒
（40）　遺物㉓
（41）　遺物㉔
（42）　遺物㉕
（43）　遺物㉖
（44）　伝てっぽう塚

第　Ⅰ　章

第１節　調査に至る経緯

第２節　調査の方法と経過

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１　調査の契機

今回報告する船入遺跡は、一般国道３号熊本北バイパス（以下「北バイパス」という。）改築事業を契機とする事前の発掘調査として、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所（以下「河川国道事務所」という。）の委託を受けて熊本県教育委員会が行ったものである。

北バイパスは、熊本市とその周辺地域の交通渋滞の緩和及び一般国道３号線と57号線を結ぶ主要幹線道路として計画された。総延長距離は、一般国道３号線側の熊本市四方寄町から一般国道57号熊本東バイパスとの接続地点である同市新南部四丁目に至る約7.6㎞である。現在、一部区間の約4.6㎞が供用中である。

昭和47年度に、文化課は河川国道事務所より北バイパス路線内の埋蔵文化財分布調査依頼を受けている。その後、踏査、試掘・確認調査、協議等を行い、第１図及び第１表のとおり同事業に伴う発掘調査を随時行っている。平成13年度までに行われた事業名に「熊本北バイパス」を冠する発掘調査報告は、第１図及び第１表に示すとおり計６件を数える。ここでは、これまでの調査について過去の調査成果を簡単にまとめておく。

①西谷遺跡

昭和58・59年度調査。熊本市下南部町に所在の新南部遺跡群内に位置している。その中でも本遺跡は、一級河川である白川の左岸河岸段丘の第一段目上に位置している。

弥生時代から平安時代の住居跡などを検出している。特に弥生時代中期・後期の住居跡は残存状態も良く、弥生土器のほか磨製石鏃・石匙・石斧などが出土している。

②上西原遺跡

昭和60年度調査。西谷遺跡と同じく新南部遺跡群内に位置する遺跡で、小字名をとって「上西原遺跡」として報告している。

押型文土器や曽畑式土器などの縄文早期・前期の土器が出土している。また、奈良時代から平安時代にかけてのカマドつき竪穴住居跡とそれに伴う須恵器、土師器、磨製石器、刀子などが出土している。

③竜田陣内遺跡

昭和61年度調査。熊本市龍田町大字陣内字戸ノ上に所在する。白川の右岸河岸段丘上で、西谷遺跡とは対岸の位置関係にある。

本遺跡では旧石器時代の三稜尖頭器をはじめ、総点数約850点を数える曽畑式土器群が出土している。また、国指定史跡である西合志町の二子山石器製作遺跡からの搬入石器もあり、注目される。

④庵ノ前遺跡

平成４年から７年度調査。熊本市龍田町大字上立田、清水町大字楡木及び大字兎谷に所在する。

本遺跡は戦後間もなく、縄文時代早期・後期・晩期及び弥生時代の甕棺などの遺物が採集され、その存在を早くから知られていた遺跡である。

この調査では、遺構は確認されていないが、縄文時代の押型文土器を中心に大量の土器が出土している。その他、弥生時代の竪穴住居跡、甕棺墓、土壙墓も確認され、黒髪式と考えられる弥生土器などが出土している。

⑤迫ノ上遺跡

平成３年から６年度調査。熊本市龍田町大字上立田字迫ノ上に所在する。昭和35年、農作業中に人骨を伴う弥生時代中期の甕棺が発見されている遺跡である。

発掘調査では、縄文時代早期から晩期の土器・石器や古墳時代の住居跡が確認されている。

⑥古閑山遺跡

平成４・６・７年度調査。本遺跡は南側の丘陵上に迫ノ上遺跡、北側に庵ノ前遺跡という位置関係にある。

竪穴住居跡、円形周溝墓などの古墳時代を中心として、縄文時代から古代に至る遺構・遺物が確認されている。

２　予備調査の経過

平成13年度、本事業で調査予定であった「須屋城跡」（調査機関は西合志町教育委員会）付近の踏査の結果、事業予定地内に遺跡の可能性のある微高地が明らかになった。県文化課は、河川国道事務所の依頼を受け、平成13年５月７日に８ヶ所の試掘坑（以下「トレンチ」という。）を設定し、試掘調査を実施した。その結果、溝状遺構や柱穴、中世の土師質土器片や瓦質土器片、青磁器片等の遺物を検出した。試掘調査を行った場所は、周知の埋蔵文化財である須屋城跡に隣接する新たな遺跡であり、小字名をとり「船入遺跡」と命名した。

これを受けて県文化課は、河川国道事務所に「船入遺跡」で開発行為を実施する場合に事前の本調査が必要な旨を平成13年５月18日に通知し、併せて文化財保護法57条の３第１項に基づく手続きを速やかに実行するよう指示した。これらの試掘調査をもとに、県文化課は河川国道事務所と協議を行い、船入遺跡約3,600㎡の発掘調査を実施することにした。

３　発掘調査の進捗

調査は平成13年９月より着手。調査地は、中世の文化層１面であり、当初５ヶ月の予定であった。しかし大規模な堀が検出され、その完掘等に予想外の時間を要したため河川国道事務所と協議を行った。その結果、当初の調査完了予定を約１ヶ月延長し平成14年３月中旬には全ての調査を完了した。

４　調査の組織

【平成13（2001）年度　確認・本調査】

調査責任者　阪井大文（文化課長）
　　島津義昭（課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第１係長）
確認調査担当　坂田和弘（参事）
　　角田賢治（文化財保護主事）
本調査担当　角田賢治（文化財保護主事）
　　阿南麻衣（非常勤嘱託：10～３月）
　　和田敏郎（非常勤嘱託：９月）
調査事務局　小田信也（課長補佐）
　　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　　広瀬泰之（参事）
　　杉村輝彦（主事）
調査指導・助言及び協力者（敬称略・順不同）
　　浦田信智（西合志町教育委員会）
　　松下孝幸（土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム）
　　鋤柄俊夫（同志社大学歴史資料館）
　　山本信夫（山本考古研究所）
　　狭川真一（元興寺文化財研究所）
　　美濃口雅朗（熊本市教育委員会）
　　古森政次（熊本県文化企画課）

【平成14（2002）年度　報告書作成】

調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
　　島津義昭（教育審議員兼課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第１係長）
調査担当　角田賢治（文化財保護主事）
　　横山明代（非常勤嘱託）
調査事務局　小田信也（教育審議員兼課長補佐）
　　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　　天野寿久（主任主事）
　　杉村輝彦（主事）
助言及び協力者（敬称略・順不同）
　　山本信夫（山本考古研究所）

第２節　調査の方法と経過

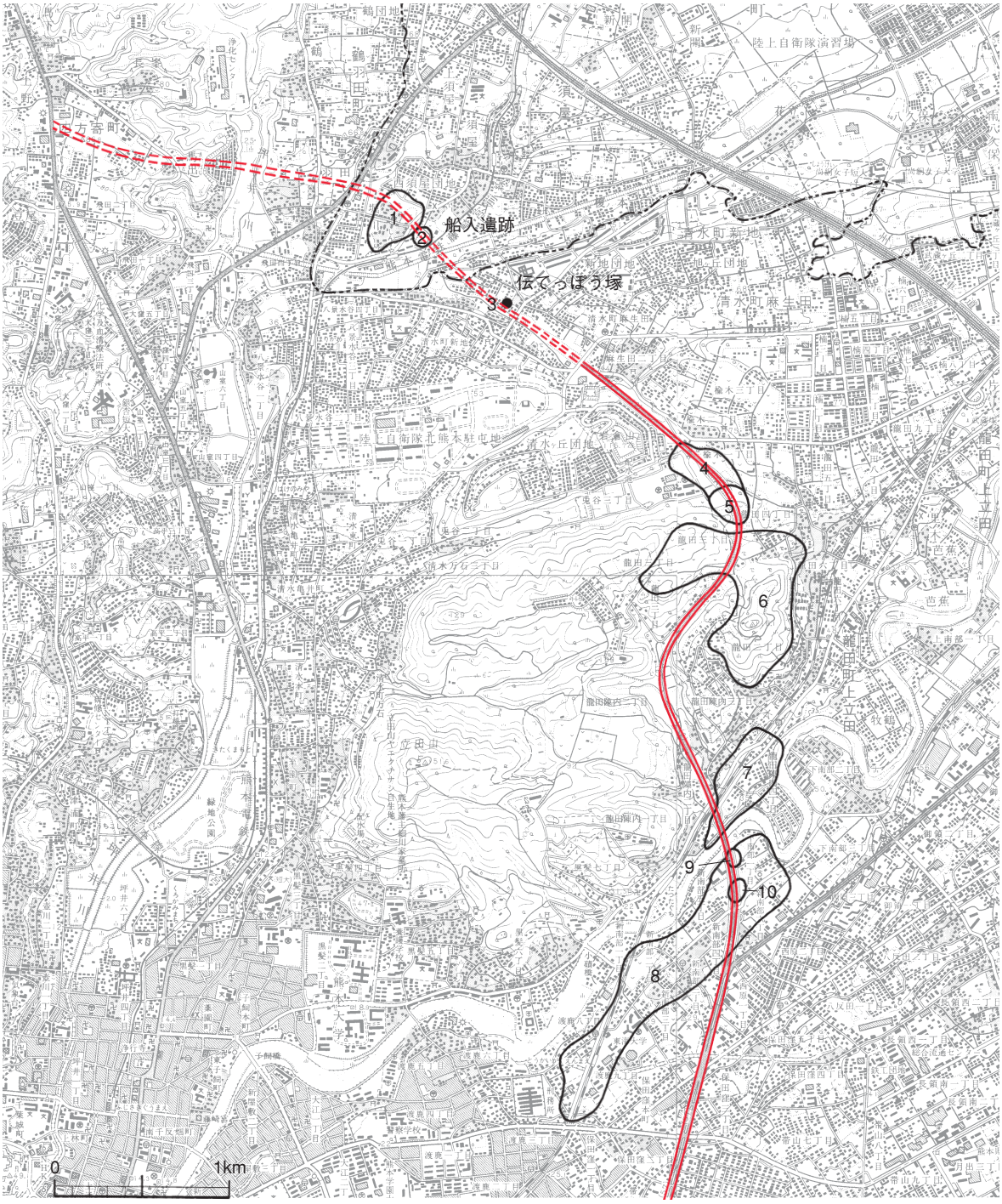
１　調査の方法

まず重機による表土剥ぎを行い、その後、手作業による清掃を行った。引き続き、実測図作成のために、第２図のとおり国土座標にあわせたグリッドを調査区内に設定した。設定したグリッドの一辺の長さは10mで、これを大グリッドと呼ぶ。それぞれの大グリッドには西から東へＡ～Ｊ、北から南へ１～９までの番号を振り分け遺構の場所を示す基準とした。さらに、それぞれの大グリッドを１m四方の小グリッドに分割し実測の際の基準とした。

調査地は削平を受けており、表土剥ぎは耕作土を取り除いた黒褐色土、いわゆるニガ土上面でとめている。

遺構には掘立柱建物、柱列、階段状遺構、堀、道

第１図　熊本北バイパス関連埋蔵文化財分布図



第１表　熊本北バイパス関連埋蔵文化財

遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	備　　考
1	須屋城跡	須屋下屋敷	平成13年度～発掘調査継続中　西合志町教育委員会
2	船入遺跡	須屋船入	平成13年度発掘調査
3	伝てっぽう塚	清水町砥崎	平成10年度発掘調査
4	迫ノ上遺跡	龍田町迫ノ上	熊本県文化財調査報告第170集
5	古閑山遺跡	龍田町古閑山	熊本県文化財調査報告第171集
6	庵ノ前遺跡	清水町楡木	熊本県文化財調査報告第160集
7	竜田陣内遺跡	龍田町陣内	熊本県文化財調査報告第 98集
8	新南部遺跡群	新南部町	
9	西谷遺跡	新南部西谷	熊本県文化財調査報告第 76集
10	上西原遺跡	新南部上西原	熊本県文化財調査報告第 84集

路状遺構、溝、土坑、土壙墓があった。以下、それぞれについて調査方法を示す。

掘立柱建物及び柱列は、調査区の清掃後に柱穴を確認し、柱穴の大きさ、埋土の状態、柱穴の配列・間隔などを考え併せて建物の単位を確定した。その後、柱痕跡を確認し、それぞれの柱穴について埋土を半裁し、堆積状況を観察した上で平面図及び断面図を完成させた。実測方法は、まず掘立柱建物の柱穴も含めグリッドに合わせて調査区全域の平面図を作成した。その後、個別の掘立柱建物の遺構平面図及び断面図を作成した。実測図の縮尺率は１／20である。

土坑は、遺構の平面形を確認の後、土層堆積状況を確認するためにベルトを残して発掘を行った。次に土層観察と土層断面図を作成し、写真撮影を行い、その後ベルトを取り除いて平面図及び断面図を完成させた。実測図の縮尺率は１／20である。

土壙墓の調査も、基本的には土坑と同様の方法で行った。しかし、２基については上層部が大きく削平されていたため、埋土状況や平面形が十分確認することができなかった。この２基の土壙墓については、推定可能な平面形で実測図を作成した。実測図の縮尺率は１／20である。出土人骨の実測は、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に依頼した。縮尺は１／10である。

堀・溝の調査は、遺構の平面形を確認の後、土層の堆積状況を確認するためのベルトを残して発掘を行った。土層の堆積状況を確認し、土層断面図と平面図を作成した。縮尺率は１／20である。

道路状遺構及び階段状遺構も基本的には、堀と同様の方法で行った。階段状遺構の平面図については１／５で作成し、それ以外は１／20で作成した。

写真はモノクロとリバーサルの２種類で撮影した。写真機の種類は35㎜の一眼レフと中型カメラを使用した。撮影は、それぞれの遺構について２方向からの２枚ずつを基本としている。また、調査の最終段階でラジコンヘリコプター及びセスナによる空中写真撮影を行った。

２　調査の経過

本調査は、平成13年の９月下旬より始まり、平成14年の３月中旬に終了している。以下その経過を月ごとに記しておく。

平成13（2001）年

【９月】

９月17日より調査を開始する。重機による表土剥ぎに１週間程かかる。耕作土、床土及び茶褐色土を取り除くと、黒褐色粘質土（ニガ土）上面で、瓦質火鉢片や青磁器片等の遺物が出土し始め、手掘りに切り替える。

調査区は、町道によって分断されているため便宜上、東側をⅠ区・西側をⅡ区と設定する。Ⅰ区は排土置場を確保するため、北側と南側に分けて調査を行う。そのため、Ⅰ区は北側部分の表土剥ぎを行う。Ⅰ区は大規模な削平を受けており、Ⅱ区の遺構検出面である黒褐色土（ニガ土）は、ほとんど削平されていた。

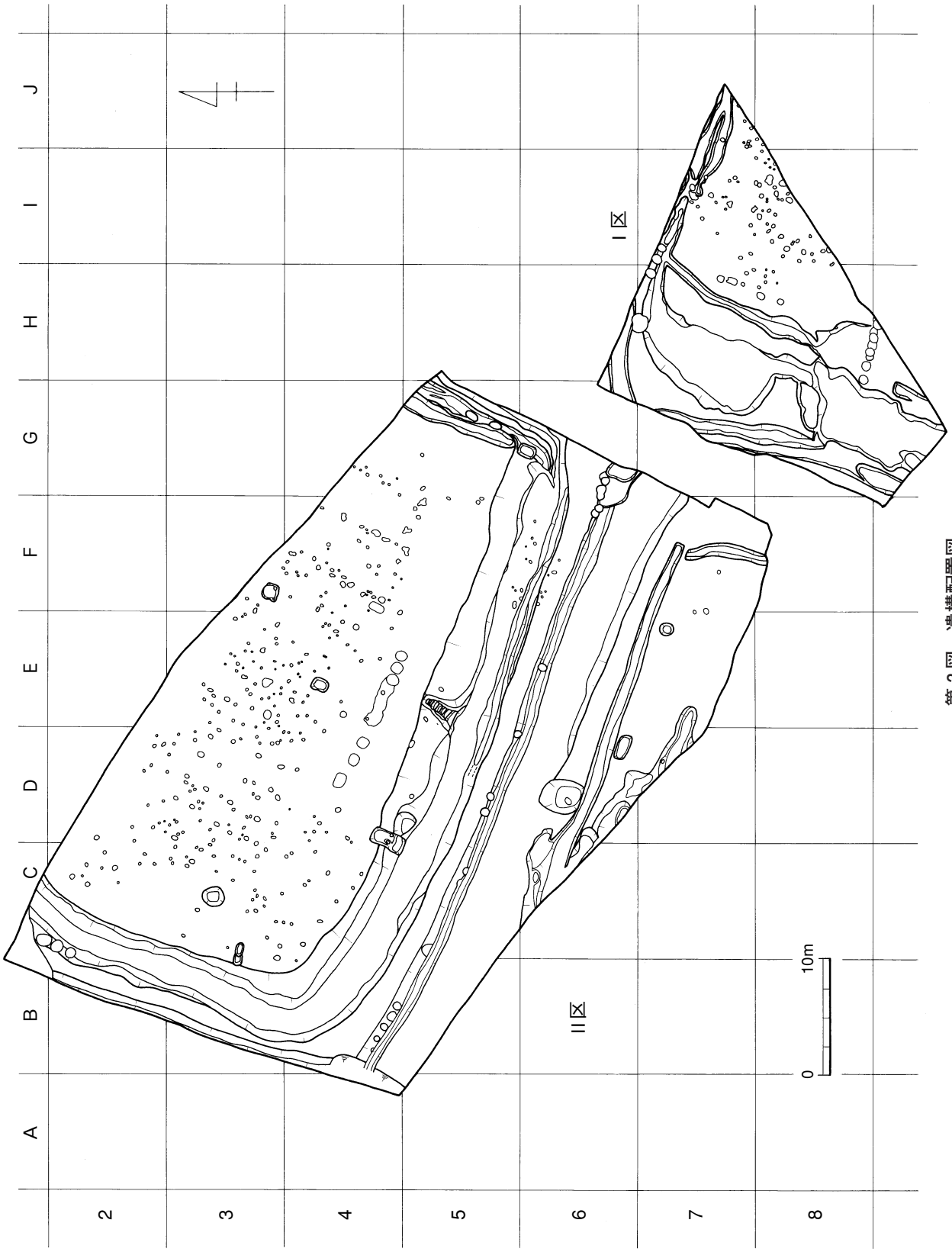
【10月】

Ⅱ区の全体清掃も終えた段階で、調査区内を取り囲むような堀跡を検出する。確認のため試掘調査の際のトレンチを拡張し、南北方向に２本のトレンチを入れる。トレンチの堀跡部分からは、人頭大の集石とともに青磁器片や瓦質土器片等が出土する。

調査区が道路に面していることもあり、地域住民の方々が本遺跡を訪れる機会も増える。地域住民の方々から本遺跡周辺の昔の環境等について聞くことができた。その中でも調査区北東側に隣接する竹林には、以前寺院が存在しており、今回その場所から五輪塔の一部も確認できた。さらに、調査区に隣接する北側畑脇の溝からは18世紀代の染付碗も表採できた。

今月より、本遺跡から西へ約70mはなれた地点にある同時期の中世平城である「須屋城跡」（同事業：一般国道３号熊本北バイパス改築事業）の発掘調査を西合志町教育委員会が着手する。

中旬より地域の方々向けへの「船入遺跡だより」を毎週発行し、調査状況等の広報活動を行う。日々、地域の方々の見学がある。



第２図　遺構配置図

【11月】

調査区東側の堀を切る形で３基の土墓壙を確認する。３基からそれぞれ人骨が出土するが保存状態はあまり良くない。一番大きい土壙墓は、約１ｍ四方の隅丸方形で燈明皿２枚を伴ったものであった。

堀の南側で見られた硬化面は、側溝を伴う道路である可能性が出てくる。

堀の上層部分の発掘がほぼ終わり、青磁器・白磁器片をはじめ瓦質土器片等が出土する。

【12月】

堀の発掘を重点的に行うが、かなりの排土量があり予想以上の時間がかかる。青磁器・白磁器片、瓦質土器片等が出土するが、上層部分から出土した遺物との時期差はあまり見られない。土層断面を確認後、完掘した部分から実測を行う。堀上層の南側中央付近で馬骨が１体出土する。上層部分であり、近世の墓壙である可能性も考えられる。

Ⅰ区北側調査区は、大規模な削平を受けているため、遺構の状態は良くない。Ⅱ区（西側）に伸びる溝も確認したが、Ⅱ区との関係を見出すことができない。

平成14（2002）年

【１月】

寒さもかなり厳しくなり、毎朝の霜柱により作業効率も落ち、作業工程の組立てに悩まされる。

Ⅰ区北側部分の調査が終了し、埋め戻しを行う。引き続きⅠ区南側の調査区の表土剥ぎを行う。南側も北側同様、大規模な削平を受けている。Ⅰ区南側は、南北に伸びる数条の溝を検出する。

堀をほぼ完掘でき、調査区内で堀が巡っていることが改めて確認でき、遺跡の全体像も見えてくる。柱穴も多数検出するが、単位が特定できた掘立柱建物は２棟のみであった。

【２月】

調査期間もあと２ヶ月を切り、調査も大詰めに入る。

堀で囲まれた屋敷跡の南側には、側溝を伴う道路状遺構が確認でき、道路の西側約70ｍの延長線上には須屋城跡が存在しているという本遺跡を含めた当時の地域全体像も見えてくる。

最後の空中撮影を控え、土層確認のためのベルト等を取り除く作業を行う。堀南側中央部のベルトを取り除いた場所から、階段状の遺構を新たに確認する。

２月24日には、隣接する須屋城跡（西合志町教育委員会調査）と共催で現地説明会を実施し、300名程の見学者があった。

【３月】

調査最後の月。道路状遺構の下層部分の発掘作業を行う。排土量も多く、全域を終えることができず、一部の発掘となる。後半は、日々遺構の実測にあたる。

作業の中、これまで本遺跡を訪れられた地域の方々が来跡され、失われていく遺跡を惜しむ声が多く聞かれた。

３月15日に全ての調査を終え、調査事務所を撤収し、本遺跡の調査を終了する。

第　Ⅱ　章

第１節　遺跡の環境

第２節　遺跡の概要

第３節　遺跡の層位

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

１　地理的環境

船入遺跡は、熊本県菊池郡（キクチグン）西合志町（ニシゴウシマチ）大字須屋（スヤ）字船入（フナイリ）に所在する。菊池郡は熊本県の北部に位置する。西合志町は菊池郡の南西部に位置し、南は熊本市、東は合志町、菊陽町、西は植木町、北は泗水町と接している。

菊池郡を概観すると、東側には阿蘇外輪山の一角をなすツームシ山（1,064m）、鞍岳（1,186m）、矢護山（940m）等が連なっている。これらの山々の西側には阿蘇の大規模な火山活動による多くの噴出物が広範囲に堆積し、合志台地を形成している。合志台地一帯は、火山灰堆積層であり、透水性が強く、雨水は地下に浸透し、地表の流水がほとんどみられないため起伏の少ない傾斜の緩やかな地形を形成している。そのためゴボウやニンジン、サツマイモなどを主とする畑作地帯が中心である。灌漑や開田の取り組みは、早くから行われ、本遺跡東側には、灌漑用水路としての瀬田上井手（通称「堀川」、以下「堀川」という。）がある。堀川は、菊池郡大津町瀬田で白川から取水され、菊陽町、合志町、西合志町を経て、熊本市鶴羽田で坪井川に注いでいる。流路延長は約18.8㎞である。

本遺跡は、この合志台地の南西部の裾野に位置している。そのため合志台地の地下水は、本遺跡周辺ではデミズや湧水として見ることができる。本遺跡北側にも豊富な湧水を保っていた芭蕉池がある。しかし、昭和30年代後半、農業改善事業による畑地の灌漑や工業用水等の地下水くみ上げにより、水位が著しく低下し、小規模な湧水はほとんど枯れてしまっているのが現状である。

熊本市との隣接する本遺跡周辺は、昭和40年頃から大型の住宅団地などが造成されている。また交通の利便性等から宅地開発が相次ぎ、急速な市街地化と伴に人口増加も進んでいる地域の一つである。今後、北バイパスの開通によって、市街地化は一層進み、周辺の環境も大きく変わっていくものと思われる。

２　歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては、本遺跡西側の金峰山系の台地（熊本市）には、万楽寺遺跡があり、剥片尖頭器、五丁中原遺跡の三稜尖頭器、ナイフ形石器、剥離尖頭器などが出土している。

また、本遺跡南側、立田山山系の一部にあたる天拝山周辺にも多く確認されている。天拝山Ａ遺跡からは安山岩製の尖頭器、楡ノ木遺跡からは黒曜石製の細石核、庵ノ前遺跡と竜田陣内遺跡からは三稜尖頭器、さらに清水町谷口遺跡からはナイフ形石器が出土している。

縄文時代

本遺跡周辺では、鶴羽田遺跡、太郎迫遺跡、四方寄遺跡、山海道遺跡、五丁中原遺跡などが知られている。

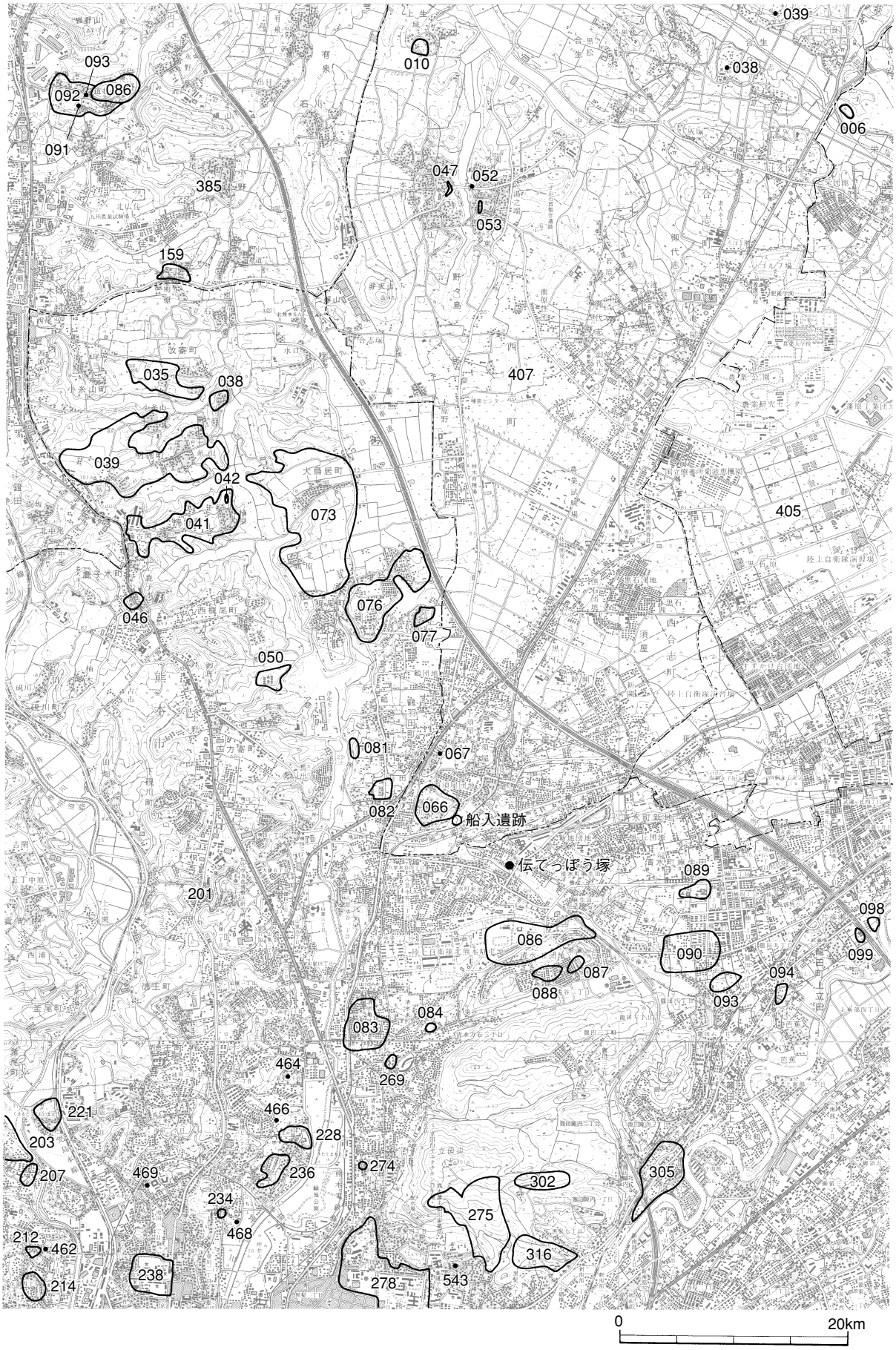
西合志町内では、国指定史跡となっている縄文後期から晩期の二子山石器製作遺跡がある。二子山と呼ばれる丘陵には金峰山系玄武岩質安山岩の露頭があり、露出した素材を剥ぎ取って多量の打製石器を製作している。ここで製作された石器や石器の素材が搬出された範囲は、半径約15㎞に及んでいることが分かっている。

弥生時代

西合志町内では、大規模な集落跡を形成していた八反原遺跡があり、数十軒の住居跡が検出されている。住居跡内からは多量の土器、石器類とともに小型の青銅製鏡も出土している。また、県内ではほかには例をみることのない唐草を描いたものと見られる彩文土器も出土している。このほか上生上ノ原遺跡、巡畑遺跡、永田遺跡など弥生時代後期を中心とした遺跡が町内にみられる。

古墳時代

菊池川支流である合志川流域には多くの古墳が存在している。西側を鹿本郡植木町、北側を菊池郡泗


039
010
038
093
092
086
091
006
047
052
385
053
159
407
035
038
039
042
041
073
405
046
076
077
050
081
067
082
066
船入遺跡
伝てっぽう塚
089
201
098
086
090
099
087
094
088
093
083
084
464
269
221
466
228
203
207
469
236
274
302
305
234
275
468
212
462
316
238
214
278
543
0
20km

第３図　周辺遺跡地図

第２表　船入遺跡周辺主要遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
405－006	千束城跡	栄　城山	中世	城		
407－010	積雪城跡	上生　城敷	中世	城		
407－047	野々島土塁跡	野々島　八通丸	中世	包蔵地		八通丸
407－052	愛楽寺跡	野々島　外園	中世	寺社		
407－053	花園土塁跡	野々島　花園	中世	包蔵地		
407－066	須屋城跡	須屋　城跡	中世	城		中世城跡
407－067	妙泉寺跡	須屋	中世	寺社		
407－038	玉蓮寺跡	合生　玉蓮寺	中世	寺社		
407－039	弘生城跡	合生	中世	城		
385－086	岩野城跡（道祖城）	岩野（城山）　馬場	中世	城		
385－091	次郎丸屋敷	岩野　馬場・一町畑	古代・中世	屋敷		
385－092	馬場	岩野　馬場・一町畑	縄文～中世	包蔵地		馬場小径、三重土塁
385－093	福乗寺	岩野　馬場	中世	寺社		
385－159	植木草場	広住　向原ほか	縄文～中世	包蔵地		
201－035	宝出原	改寄町	縄文～中世	包蔵地		
201－038	井上城跡	改寄町　井上	中世	城		
201－039	小糸山遺跡群	小糸山町　居屋敷	縄文～中世	包蔵地		小糸山遺跡・小糸山居館跡・小糸山追分石 縄文後期土器、縄目圧痕土器など
201－041	楠古閑	楠野町	中世	包蔵地		
201－042	楠原城・平井宮庚申塔	楠野町　城ヶ下	中世	包蔵地	市	楠原城は鹿子木貞教の築城、鹿子木氏の居城 庚申塔のみ市指定
201－046	伝鹿子木館跡	鹿子木町　花の木	中世	包蔵地		
201－050	城ヶ辻城跡	四方寄町　城ヶ辻	中世	城		貝塚あり、城主は西牟田常陸守
201－073	大鳥居遺跡群	大鳥居町	縄文～中世	包蔵地		
201－076	梶尾古閑原・古屋敷	梶尾町　古閑原など	縄文～中世	包蔵地		梶尾谷山お茶屋敷
201－077	梶尾立野	梶尾町　立野	縄文～中世	包蔵地		
201－081	山際畑	鶴羽田町	縄文～中世	包蔵地		
201－082	羽田	鶴羽田町	古代・中世	包蔵地		飛田眼鏡橋
201－083	亀井遺跡群	清水町　亀井	縄文～中世	包蔵地		亀井遺跡・亀井城跡・亀井松山墓地・亀井薬師寺堂 前板碑、城は現光照寺内、板碑天文２年銘
201－084	万石昭和団地前	清水町　万石	縄文～中世	包蔵地		
201－086	岩倉山中腹	清水町　兎谷	縄文～中世	包蔵地		
201－087	岩倉山中頂	清水町　兎谷	縄文～中世	包蔵地		
201－088	岩倉山	清水町　兎谷	旧石器～中世	包蔵地		
201－089	楠	龍田町	縄文～中世	包蔵地		
201－090	堂ノ前遺跡群	清水町　楡木・堂の前	旧石器～中世	包蔵地		堂の前遺跡・一丁霍遺跡
201－093	壱町鶴	清水町　楡木一町鶴	縄文～中世	包蔵地		
201－094	吉ノ平	龍田町　上立田	縄文～中世	包蔵地		
201－098	弓削平ノ下Ａ	龍田町　弓削平の下	縄文～中世	包蔵地		
201－099	弓削平ノ下Ｂ	龍田町　弓削平の下	縄文～中世	包蔵地		
201－203	柿原遺跡群	花園町　柿原字柿原	縄文～中世	包蔵地		柿原城跡・柿原甕棺群遺跡・柿原城の原六地蔵 柿原城鹿子木寂心居城
201－207	柿原宮ノ原廃寺	花園町　柿原	中世	寺院		柿原寺篭五輪塔群
201－212	井芹城跡	花園町　４丁目	中世	城		井芹氏の居城
201－214	中尾丸城跡	花園町　４丁目	中世	城		文政７年共養碑
201－221	北島遺跡群	池田町　４丁目	弥生～中世	包蔵地		北島城跡
201－228	永浦遺跡群	清水町　打越・永浦	古墳・中世	包蔵地		稲荷山古墳・白川学園石棺・永浦城跡・天福寺
201－234	舟場	清水町　津浦	縄文～中世	包蔵地		
201－236	打越遺跡群	清水町　打越	弥生・中世	包蔵地		打越城跡・打越甕棺遺跡
201－238	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	包蔵地		伝赤尾丸城跡・静麼庵跡
201－269	古閑前	清水町　亀井	縄文～中世	包蔵地		
201－274	室園	清水町　室園	縄文～中世	包蔵地		
201－275	黒髪町下立田遺跡群	黒髪町	古墳～江戸	包蔵地		白石古墳・白石遺跡・立田南中腹遺跡・城床古墳群 豊国廊跡
201－278	黒髪町遺跡群	黒髪町　坪井	縄文～中世	包蔵地		黒髪町遺跡（済々黌高校敷地）・九州女学院遺跡 坪井古屋敷出土の甕棺、一帯に甕棺墓群
201－302	立田山東中腹	黒髪町	古代・中世	包蔵地		
201－316	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪町　６・８丁目	古墳・中世	包蔵地		宇留毛神社境内古墳群・立田山南古墳（上・下） 宇留毛浦山葬墓・立田山城跡・立田山南麓古墳円
201－462	井芹城跡推定地	花園町	中世	城		
201－464	永福寺跡	清水町　高平	中世	寺社		臨済宗天文21年
201－466	天福寺跡	清水町　打越	中世	寺社		天台、布目瓦出土
201－468	宗厳寺跡	清水町　津浦	中世	寺社		寛文12年
201－469	池田城跡	池田町　岩立	中世	城		
201－543	常楽寺	黒髪町　下立田・小峰	中世	寺社		
201－305	竜田陣内遺跡群	龍田町　陣内	旧石器～中世	包蔵地		竜田陣内遺跡・陣内宮の前遺跡　曾畑式土器

※周辺主要遺跡分布図及び周辺遺跡地名表については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会）と同様の番号を付した。
市町村コードにあたる３桁の数字に対応する市町村は以下の通りである。
201…熊本市、385…植木町、405…合志町、407…西合志町

水町に接しているが、主なものを下流域から挙げてみると植木町山東地区には著名な前方後円墳の高隈古墳があり、その近くには庇付兜が出土したといわれるマロ塚がある。また、泗水町田島には長塚、宮の迫古墳、岡山古墳が連座しており、円形周溝墓などの古墳群を形成する神塚遺跡も知られ、さらに東方向すなわち上流にあたる高江出分古墳や方格規矩文鏡を出土した久米若宮古墳へと続いている。

このような古墳群に対して西合志町には黒松古墳群、塚山古墳、笹塚、二子山古墳などが所在している。これらの古墳が一帯となって合志川流域の一大古墳群を形成している。

古　　代

現菊池郡の大半は、古代では「合志郡」と呼ばれていた地域にあたる。「合志郡」の名は「日本書紀」持統天皇10年（696年）の壬生諸石の記事にも「肥後国皮石郡」と記載されている。また、平城宮出土木簡に「肥後国恰志郡調綿」とある。

郡家は初め泗水町住吉に置かれていたと推定されており、同町域内には条里の遺構も想定される。なお七城町水次に十蓮寺廃寺、泗水町田島に田島廃寺があり、いずれも法起寺式伽藍配置をとる。「三代実録」貞観元年五月四日条に「分肥後国合志郡、始置山本郡」とある。これは、平安初期の人口増加によって、その西半を割いて山本郡（現鹿本郡植木町一帯）を独立させたのではないかと考えられている。

また菊池市と隣接する鹿本郡菊鹿町には鞠智城がある。この城については「続日本紀」「文徳実録」「三代実録」にも記載がみられ、県内で確認されている最古の山城である。

中　　世

11世紀初めには、肥後国最大の豪族である菊池氏の名が文献上も登場してくる。

菊池氏は、平安末期に一時平家方に属したが、鎌倉時代には御家人として幕府に仕えることとなる。その後、南北朝期には九州南朝の中心的存在として活躍している。この菊池氏が居城としたのが、現在の菊池市隈府の菊池城である。のちの伝承によると、この菊池城を守るために十八の外城（支城）を築いたと「菊池風土記」にある。

南北朝時代には、菊池氏の主流は南朝方につき、九州南朝の中心的存在となる。一方、竹迫城（菊池郡合志町大字竹迫）を拠点とする菊池氏系の豪族である合志氏は、北朝方につき菊池氏と対立している。

この当時、菊池氏が設けた菊池一族の庶家の代表による寄合衆がある。その一人として「須屋刑部殿」の名が、興国３（1342）年の「武士起請文」に登場する。この須屋氏が、西合志町の「須屋城」の主であると考えられる。本遺跡は、まさしくこの須屋氏の居城である須屋城に隣接している遺跡である。

さらに、町内に目を向けると、同町内の野々島には、戦国期に形成されたと考えられる土塁がある。この地は、合志郡と山本郡の境界に位置し、植木・玉名に向かう重要なルートである。また、町内の石造物を概観すると、延寿寺跡や本村公民館などの五輪塔、丸内の板碑などは、すべて室町末・戦国期の様式のものである。

近　　世

秀吉の命を受け、肥後の城北地域を支配した加藤清正のもっとも大きな治績は土木工事である。清正の子忠広に始まり、細川忠利の寛永14（1637）年に竣工したと伝えられる白川から水路開削による灌漑用水路は、合志台地の水田化を進めることになる。特に本遺跡脇を貫流する瀬田上井手は、通称「堀川」とも言われる。

熊本城下から菊池にいたる菊池往還は、本遺跡付近を通り、菊池氏の居城があった菊池市隈府に至る。菊池往還は、「肥後国誌」によると、府新一町目札ノ辻（熊本市新町１丁目）から隈府町御高札場（菊池市隈府）まで６里と記され、日田往還の一部である。また、この菊池往還は本遺跡の所在する須屋において熊本と鹿本郡鹿北町椎持を結ぶ椎持往還と分岐している。

第２節　遺跡の概要

船入遺跡は、熊本県菊池郡西合志町大字須屋字船入に所在している。遺跡名は小字名よりとっている。

本遺跡の西側約70ｍの場所には、南北朝期の平城

芭蕉池
須屋城跡
調査区
新須屋駅
58.8
58.8
46.0
53.2
40.2
46.4
40.8
40.3
56.2
42.8
45.8
38.2
38.1
38.2
37.4
37.1
37.5
36.5
36.0
36.5
36.0
35.2
35.8
36.3
35.3
34.4
34.6
35.3
33.8
36.2
34.3
34.8
33.0
34.5
34.9
34.4
33.3
34.2
33.8
33.7
32.0
33.3
33.0
34.7
38.8
33.0
33.8
34.0
33.8

第 4 図　周辺地形図

と言われている「須屋城跡」がある。須屋城跡からは、農作業中に中世の小刀等が出土しており、一部宅地化されてはいるが、空堀、土塁等が現存している。今回、北バイパス事業の一環として西合志町教育委員会が須屋城跡の発掘調査を実施している。（第４図参照）

この須屋城跡と時期を同じく隣接しているのが、今回調査を行った本遺跡である。今回の大きな成果の一つが、幅約4.0～6.0m、深さ約0.7～1.4mの堀が確認されたことである。この堀は調査区内で２つのコーナーが確認でき、調査区外に延びることも確認できた。この堀を中心に14世紀中葉～15世紀の輸入陶磁器や在地系の擂鉢、火鉢、釜等の遺物が出土している。また、茶釜等の茶道具の一部も出土している。堀の他、掘立柱建物、柱列、道路状遺構、階段状遺構、溝、土坑、土壙墓などが確認できた。つまり、本遺跡は堀に区画された屋敷（居館）跡としてとらえることができ、隣接する同時期の須屋城との関連をもった性格のものであると推測できる。

須屋城跡の発掘調査は継続中であるが、須屋城を含めた本遺跡の調査成果は、中世の本地域の様相を知る貴重な手がかりの一つになると思われる。

第３節　遺跡の層位

本遺跡は、調査前は水田として利用されていた。しかし、開田は昭和48年と新しく、それ以前は保水性が悪く、長く畑地であったことが明治期の地籍図及び地元の方の話からも確認できる。本遺跡が立地する場所は標高約34mの微高地にある。本遺跡を境に西側は本遺跡よりさらに1.0m程大規模な削平を受けている。この大規模な削平の時期については、不明であるが、本遺跡の調査区との関係から考えると、中世以降の削平と考えられる。

調査区内は、上層部分は削平を受けているが、中世の文化層は比較的良好に残存していた。

以下、本遺跡の基本土層を示しておく。

【基本土層】

第Ⅰ層　　表土及び床土

耕作土で約10～15㎝。（Ⅰａ層）

耕作土下には、粘質で鉄分を多く含む硬くしまった床土層（Ⅰｂ層）。この層は、昭和48年開田の際の層でⅠ・Ⅱ区ともに約3.0～5.0㎝で調査区全体に見られる層。

第Ⅱ層　　茶褐色土

黄色土の微粒を若干含む層で、旧耕作土。中世・近世の遺物を含む。Ⅰ・Ⅱ区ともに見られる。

第Ⅲ層　　黒褐色土

いわゆる「ニガ土」で、拳大のブロック状に硬化した塊を含む層。やや粘質を帯びている。遺構検出面で、14～15世紀の遺物を包含する。Ⅰ区では、東側のごく一部分のみかろうじて残っていたが、Ⅰ区全体では削平され消失している。

第Ⅳ層　　黄色土

ソフトローム層で、やや砂質でやわらかい。地山。Ⅰ区の大部分は、第Ⅱ層の茶褐色土層下がこの層である。

第Ⅴ層　　黄色砂礫層

ローム層に2.0～5.0㎝大の礫を含む層。地山。

第５図　基本土層図

第　Ⅲ　章

第１節　遺　　構

第２節　遺　　物

第Ⅲ章　調査とその成果

第１節　遺　　構

１　はじめに

前述のとおり、Ⅰ区は大規模な削平を受けており、遺構検出面である第Ⅲ層が消失していた。そのため、Ⅰ区では、各遺構ともわずかに下層部が確認されたのみで、切り合い関係等、不明な部分が多かった。

Ⅱ区は、上層部分が削平されているものの、遺構は良好に残っていた。

Ⅰ区とⅡ区の関係については、出土遺物からも同時期の遺構であることは確認できた。しかし、幅約5.0mの道路によって両調査区は分断され、さらにⅠ区の大規模な削平もあり、その詳細な関係について確定できるまでには至らなかった。

本遺跡で確認した遺構は以下の通りである。掘立柱建物２棟、柱列２基、堀３条、階段状遺構、道路状遺構、溝14条、土坑11基、土壙墓３基である。

以下、遺構ごとに詳細を記す。なお、各遺構の出土遺物については、次節にゆずる。

２　掘立柱建物

柱穴は多数確認できたが、建物として単位を確定できたのは２棟のみであった。２棟とも建物の軸は同じであった。１号堀・２号堀・３号堀の軸ともほぼ同じ位置関係にある。（第46図参照）

以下、確認できた２棟の掘立柱建物について詳細を記しておく。

１号掘立柱建物（第６図）

遺跡北西側（Ｄ－３区）に位置する遺構。桁行10.1m（約33.6尺）、梁行6.4m（約21.3尺）の４間×３間の東西変則総柱建物で、桁行方向はN27°Ｅである。

柱間寸法は、以下のとおりである。

〈桁行１～17〉2.6m（約8.6尺）＋2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）＋3.1m（約10.3尺）。

〈桁行２～18〉2.5m（約8.3尺）＋2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）＋2.9m（約9.6尺）。

〈桁行３～19〉2.5m（約8.3尺）＋2.4m（８尺）＋2.1m（７尺）＋2.9m（約9.6尺）。

〈桁行４～16〉2.2m（約7.3尺）＋2.7m（９尺）＋2.1m（７尺）。

〈梁行１～４〉1.6m（約5.3尺）＋2.6m（約8.6尺）＋2.3m（約7.7尺）。

〈梁行５～８〉1.8m（６尺）＋2.6m（約8.6尺）＋2.4m（８尺）。

〈梁行９～12〉1.8m（６尺）＋2.6m（約8.6尺）＋2.5m（8.3尺）。

〈梁行13～16〉1.8m（６尺）＋2.6m（約8.6尺）＋2.6m（8.6尺）。

〈梁行17～19〉1.9m（約6.3尺）＋2.6m（約8.6尺）。

柱穴は直径36～60㎝、深さ24～44㎝である。柱穴の下端のレベルは、一定ではない。

Ｃ－Ｃ´では南隅の柱穴が欠けている。柱穴は、桁行４～16がやや開きぎみである。その他はほぼ直線上に位置する。全て、柱痕跡は確認できない。

２号掘立柱建物（第７図）

遺跡北東側（Ｆ－４区）に位置する遺構。桁行は6.3m（21尺）、梁行4.9m（約16.3尺）の２間×２間の側柱建物である。桁行方向はN27°Ｅで１号掘立柱建物と同じ軸となる。

柱間寸法は、以下のとおりである。

〈桁行３～５〉3.1m（約10.3尺）＋3.2m（約10.6尺）。

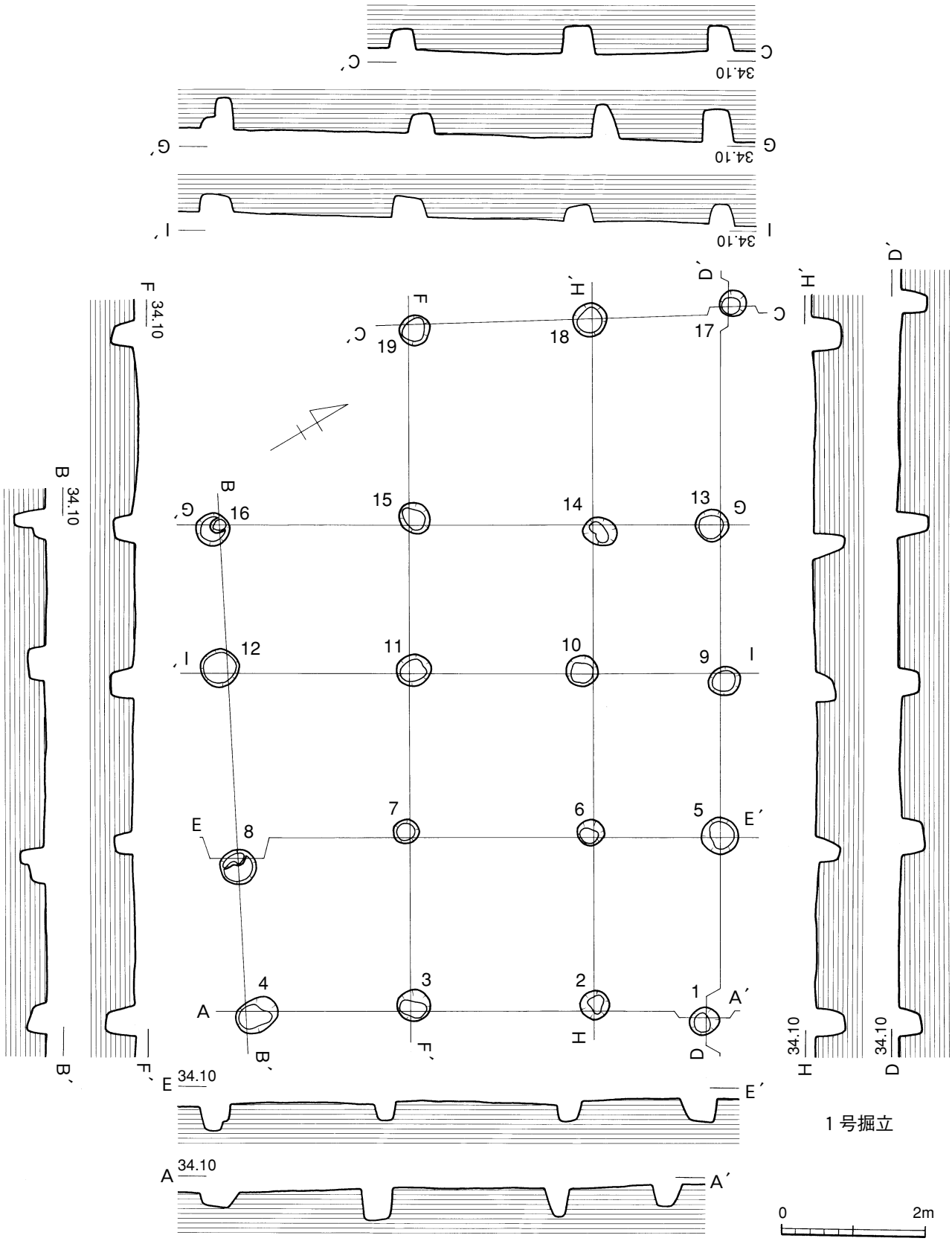
〈桁行１～７〉3.1m（約10.3尺）＋3.0m（10尺）。

〈梁行３～１〉2.5m（約8.3尺）＋2.4m（８尺）。

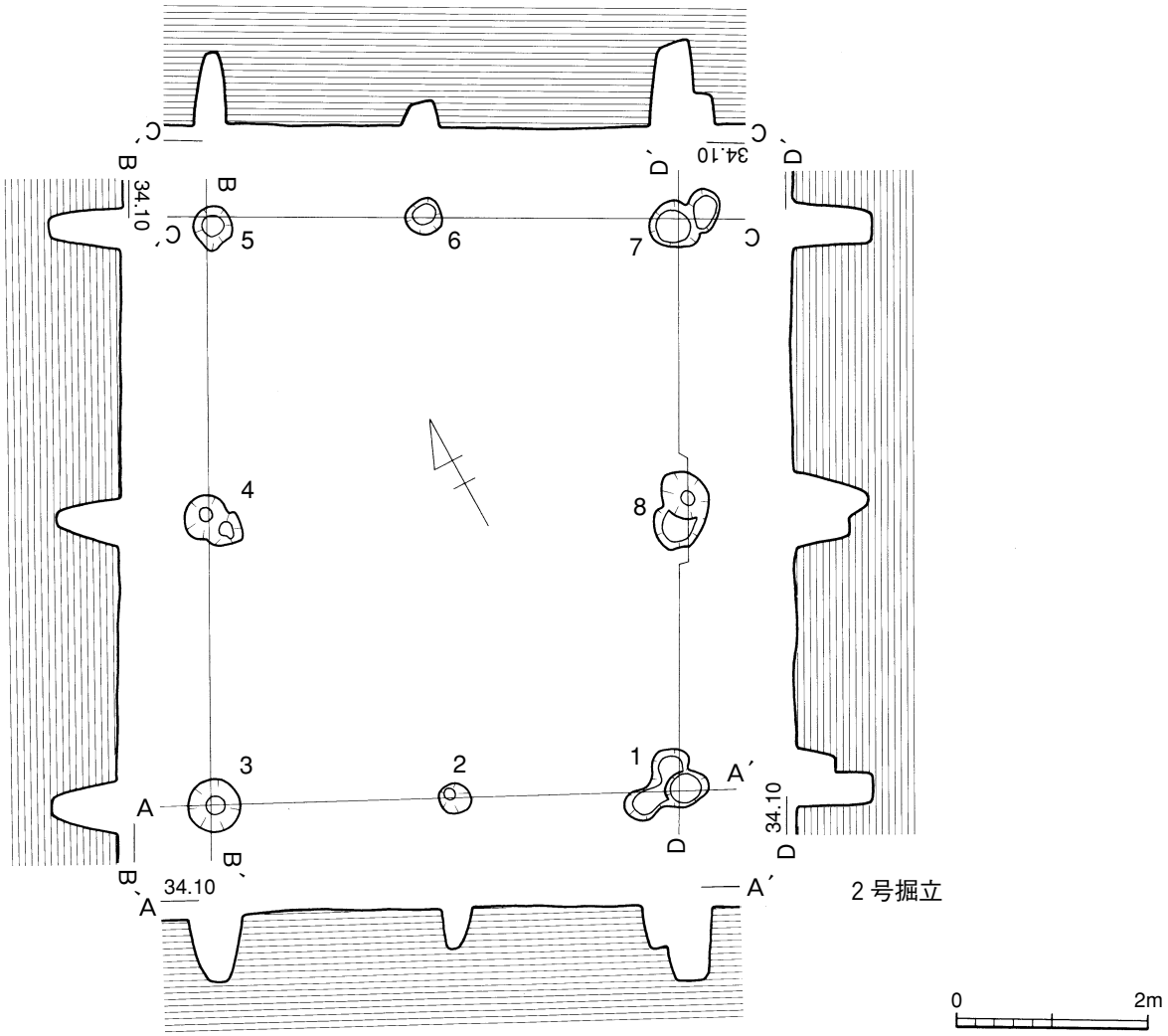
〈梁行５～７〉2.3m（約7.6尺）＋2.7m（９尺）。

柱穴は直径33～55㎝、深さ44～89㎝である。柱穴の下端のレベルは、柱穴２及び６を除けば、ほぼ一定である。柱穴はほぼ直線に整列する。柱痕跡は、確認できない。

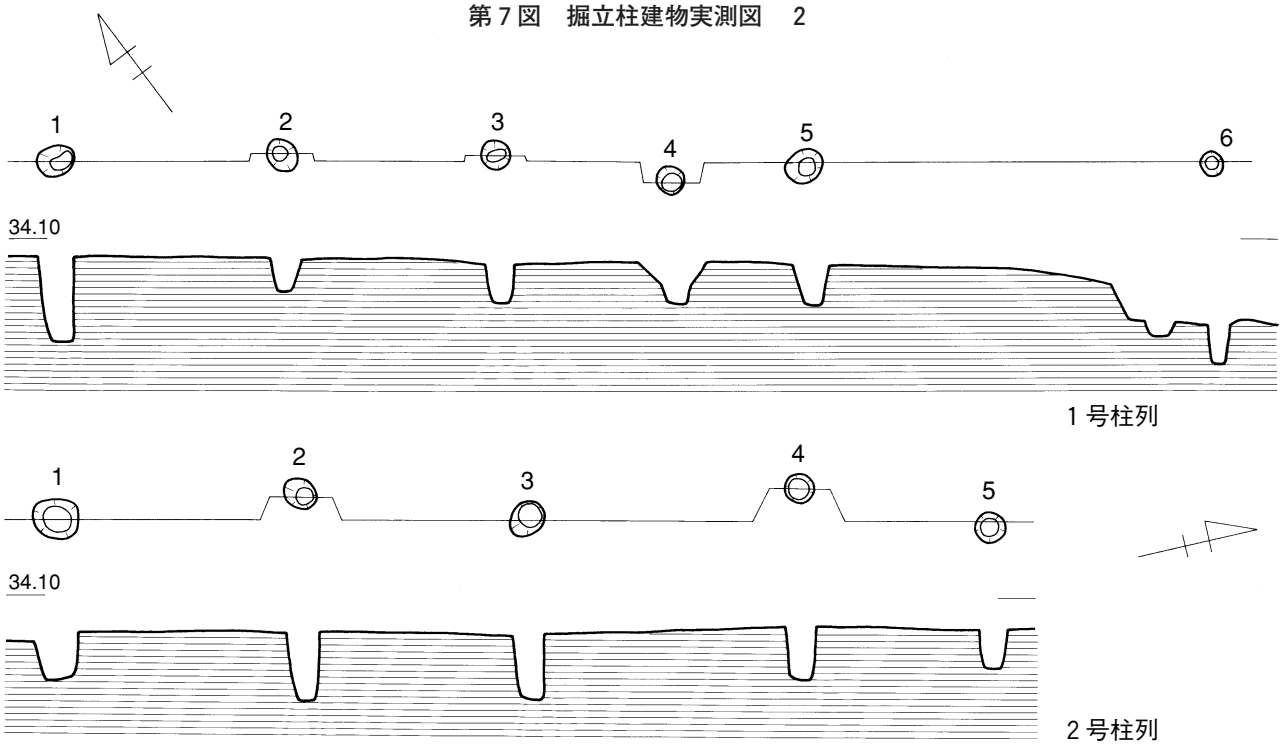
２号掘立柱建物の北側は、調査区外と面しており、北側部分はさらに伸びる可能性もある。



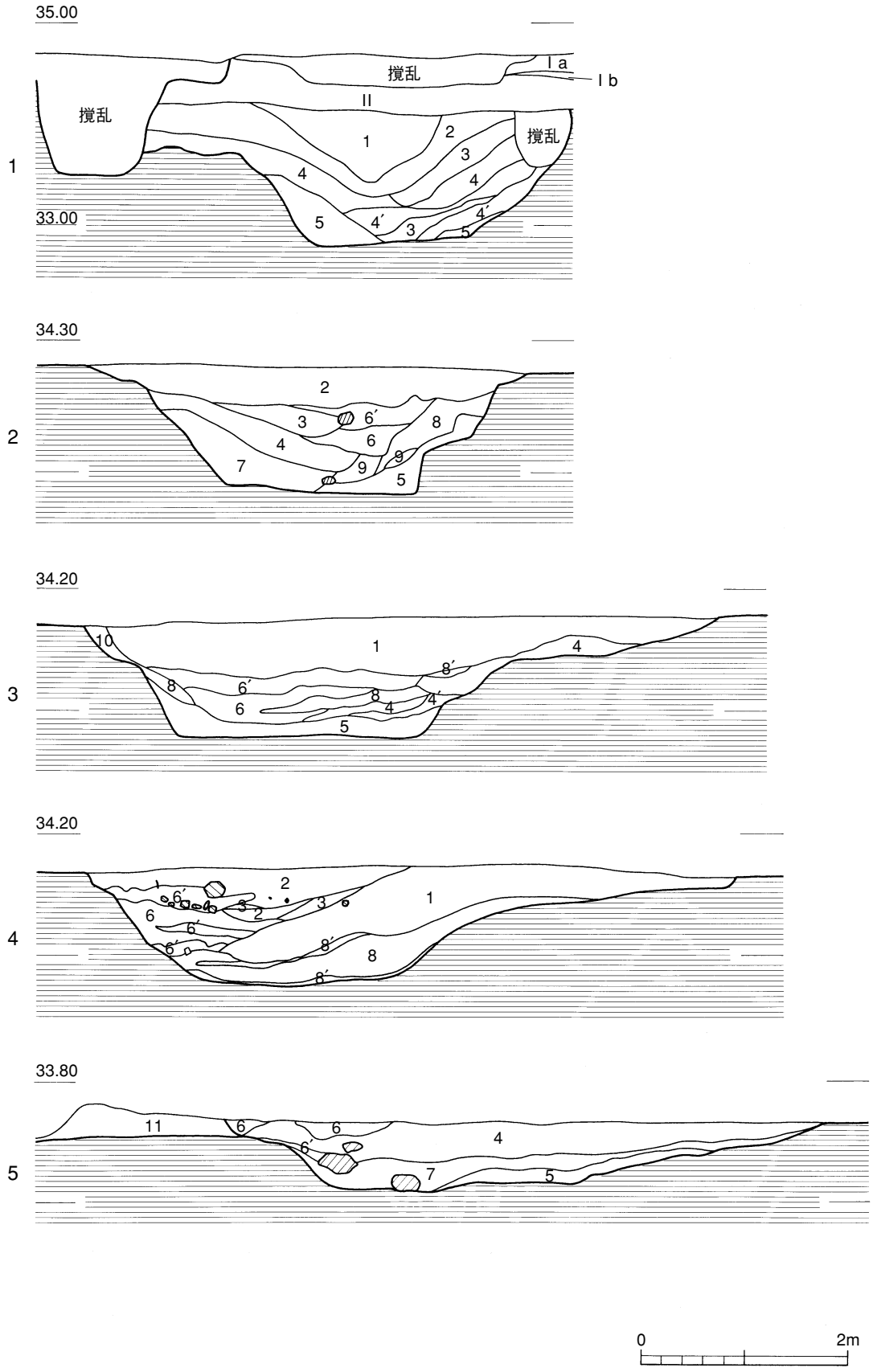
第6図　掘立柱建物実測図　1



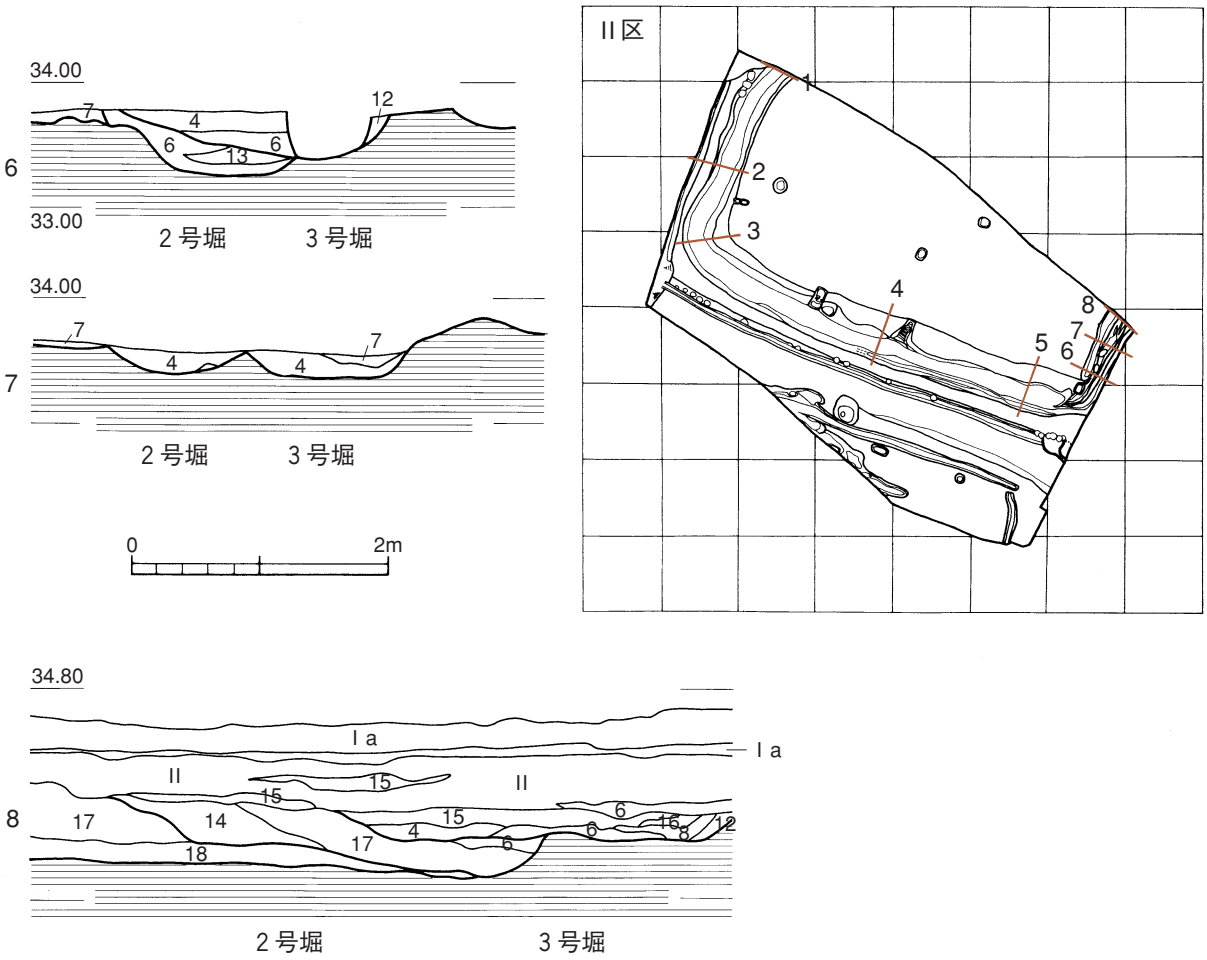
第７図　掘立柱建物実測図　２



第８図　柱列実測図


35.00
撹乱
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱ
撹乱
撹乱
1
2
3
4
4
5
4′
3
4′
5
33.00
34.30
2
3
6′
8
4
6
9
7
9
5
34.20
10
1
4
8′
8
6′
6
8
4
4′
5
34.20
2
6′
3
1
6
6′
8′
8
8′
33.80
11
6
6
6′
4
7
5
0
2m

第9図　堀断面実測図　1



第10図　堀断面実測図　2

3　柱　　列

1号堀北側及び2号堀西側に並ぶ柱列。1号堀西側のコーナー部分と2号堀脇のみで確認できた。1号堀・2号堀との位置関係から柵列としての可能性も考えられるが、ここでは「柱列」として以下に記しておく。

1号柱列（第8図）

遺跡西側（C－4区）に位置し、1号堀北側立ち上りとほぼ平行する形で並ぶ。

柱列の全長は11.9m（約39.6尺）。柱間隔は、2.2m（約7.3尺）＋2.2m（約7.3尺）＋1.8m（6尺）＋1.4m（約4.7尺）＋4.2m（14尺）。

柱列の軸はN38°Eである。柱穴の直径は28～40㎝。深さは36～90㎝で下端のレベルは一定ではない。

2号柱列（第8図）

遺跡東側（G－4・5区）に位置し、2号堀とほぼ平行し、2号堀から西へ約5.0mの場所に位置する。第10図8に示すとおり、2号柱列と2号堀の間は、一度、削平を受けている。その後、新たに整地され、2号堀が掘削されている。

柱列の全長は、9.7m（約32.3尺）。柱間隔は、2.6m（約8.7尺）＋2.3m（約7.6尺）＋2.8m（約9.3尺）＋2.0m（約6.7尺）。

柱列の軸はN16°Eである。柱穴の直径は32～48㎝。深さは44～72㎝で下端のレベルは一定ではない。

4　堀

ここで取上げている堀は、2棟の掘立柱建物が確認された敷地を取り囲むように位置している堀である。「7　溝」の項で取り上げる溝とは、その規模、

性格も明らかに異なるため、確認できた３条の堀をここでは取り上げる。

調査区Ⅱ区では、この３条の堀が「コ」の字形を形成し区画している。３条の堀とも、Ｃ－１区及びＧ－５区で、さらに調査区外の北西方向へ延びることが確認できた。

上記のことは、今回確認できた堀が、屋敷を囲むもので、いわゆる方形居館である可能性を示していると考える。つまり、今回の調査区で確認できた３条の堀は、この方形居館の南側一部であると考えられる。その全体像については、第Ⅴ章の項で述べる。

１号堀（第９図）

１号堀は、堀の主要な部分を占め、Ⅱ区のほぼ全域にわたって確認できた。調査区西側では、北東に軸をとり、Ｂ－４区ではほぼ直角に軸をかえ、Ｇ－６区で終わっている。調査区内では「Ｌ」字形となる。

堀の幅は約4.2～6.3m、深さは約0.7～1.4mである。西側部分は幅が狭く深いが、東側にいくにつれ幅が広く浅くなっている。堀の形は基本的には、第９図１及び２のように逆台形を呈する。しかし第９図４及び５のように、Ｃ－４区以東では、その形が崩れている。それは、北側部分で特に顕著となり、立ち上がりがなだらかとなる。第９図３～５の北側下層部分に、本来の立ち上がりがわずかに残存していることから、全域にわたり逆台形を呈していたと考えられる。このことから、Ｃ－４区以東は、１号堀造成後、一部拡張されたと考えられる。

なお、Ｄ－５区以東の下層部分からは、人頭大の礫群が散在していたが、その性格については、不明である。また、１号堀埋没後、一部新たな溝が掘られている。

堀は、Ｃ－１区で北西方向に調査区外へ延びる。延長線には、現在道路が１号堀とほぼ同軸をとり、走っている。この道路部分が堀の延長部分と想定できる。堀の推定範囲は、第47図に示すが、詳細については第Ⅴ章にゆずる。

今回の調査で出土した遺物の大半が、この堀からのものである。輸入陶磁器等の供膳具類、在地系擂鉢等の調理具、在地系火鉢や羽釜等の煮沸具などが出土している。12世紀後半から15世紀頃の遺物が出土している。中でも15世紀代のものが中心となっていることから、１号堀の廃絶時期は15世紀中葉であると考えられる。

２号堀（第10図）

Ｇ－５区内に位置し、北東に軸をとる堀である。１号堀と共存していた堀と考えられる。Ｇ－５北側で調査区外へと延びている。幅は約1.1～3.5m、深さ約0.2～0.6mである。しかし、上層部は大きく削平を受け、さらに東側は、３号堀によって切られているため、本来はもっと広く深かったと思われる。

１号堀と２号堀ともにＧ－６区で、１号土壙墓によって切られている。そのため、１号堀と２号堀の直接の接点については不明である。

なお、第10図８に示すように、２号堀掘削以前に北西部分の２号柱列との間は、削平された後に整地された痕跡がある。この削平及び整地の意味合いについては、不明である。

３号堀（第10図）

１号堀の一部及び２号堀を全域で切っている堀である。幅約1.3～3.4m、深さ約0.25～0.4mである。堀の上層部分は、削平を受けており、本来はもっと深かったと思われる。

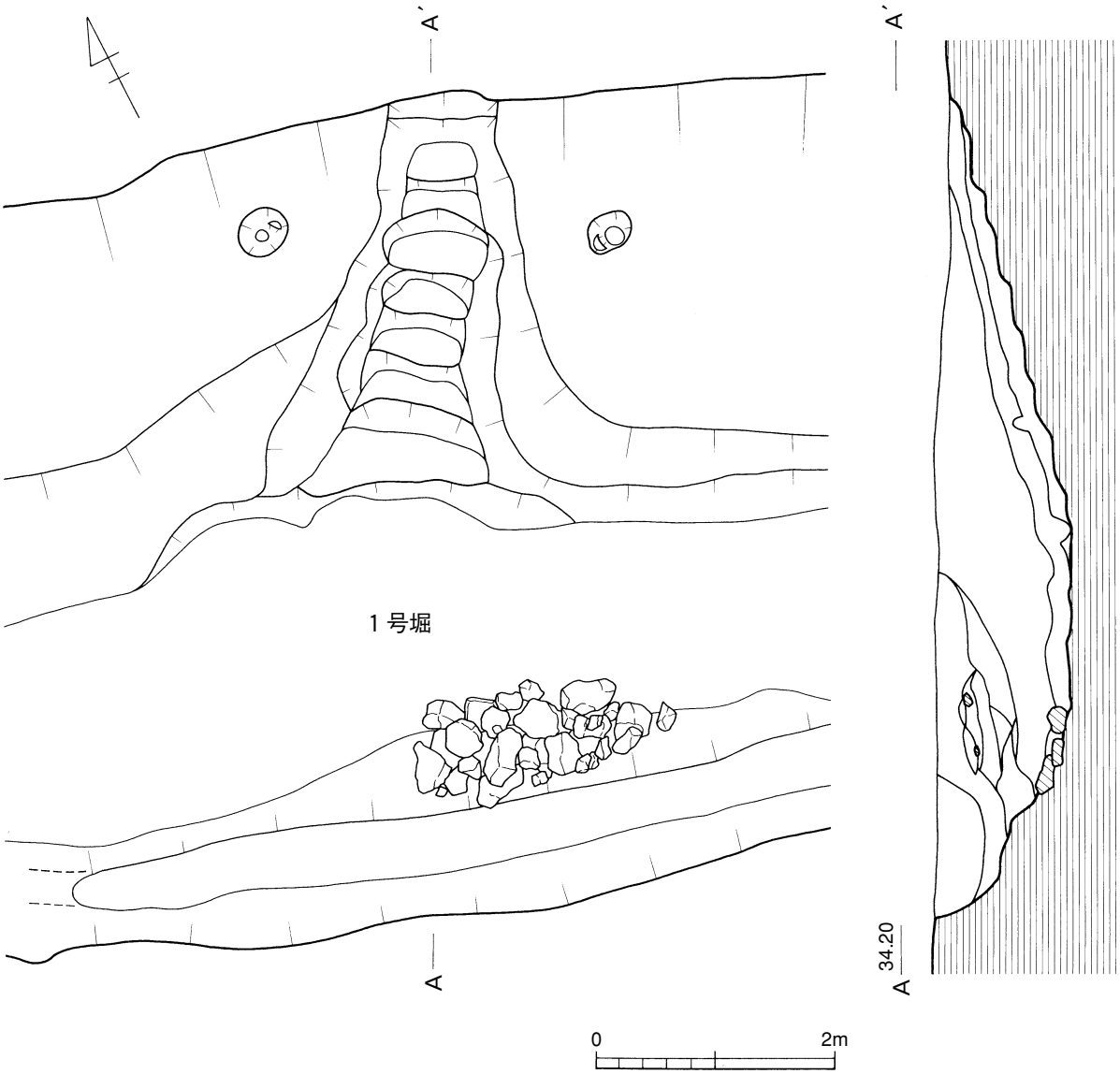
２号堀同様、軸を北東にとり、Ｇ－５区で調査区外の北東方向へと延びている。また、２号堀と３号堀の出土遺物からは、それほどの時期差は認められない。このことから３号堀は、２号堀の掘り替えであると考えられる。

３号堀埋没後に、堀に沿う形で３基の土壙墓が作られ、３号堀を切っている。

5　階段状遺構（第11図）

１号堀の南辺ほぼ中央Ｅ－５区に位置する遺構である。堀の北側、堀で区画された区画内と１号堀底の高低差約1.2mを結ぶ階段状の構造となっている。

第Ⅳ層の黄褐色土を削りだして階段を作っている。７段ある階段の全てに硬化面が確認できた。階段の



第11図　階段状遺構実測図

幅は0.6～1.6m、奥行きは25～40㎝で、堀底にいくにつれ広くなっている。それぞれの段差は、最下段を除けば５～７㎝とほぼ同じである。

なお、階段状遺構３段目の両脇約1.0m離れた位置に柱穴が存在する。西側の柱穴が直径約40㎝、深さ38㎝、東側が直径35㎝、深さ55㎝を測る。階段状遺構に関連する柱穴である可能性も考えられる。

さらに階段を下りた対面の堀床面には、人頭大の集石が存在する。１号堀の項で前述のとおり、１号堀の床面には、このような礫が見られたが、ここでの集石は積み重なっており、他とは様相を異にする。階段状遺構との関連性については不明であるが、その位置関係からここに記しておく。

この階段状遺構と堀との関係については、第Ⅴ章にゆずる。

6　道路状遺構（第12図）

調査区南側Ｂ－５区からＧ－７区で南東に軸をとる遺構である。第12図の断面図に示すように、少なくとも３時期が確認できた。便宜上、新しい遺構から第１面、第２面、第３面として、以下に詳細を記す。なお、第２面、第３面については、調査終盤での検出であったため、現地での十分な検証が得られていない。

最上層にある硬化面（あみかけ部分）が整地層でこの路面が第１面である。幅3.75～4.65m、調査区

内での全長が約60ｍである。なお、硬化面上には、幅約10㎝、深さ約３㎝の溝状のくぼみが確認できた。このくぼみの埋土は、硬化面に対して、柔らかくしまりがない。

この第１面と共存しているのが、１号溝である。この１号溝はその関係から、道路状遺構第１面の側溝的役割をもった溝であると思われる。この第１面の上層から、近世の染付等の磁器片が多く出土している。また、路面上からも30－166の菊皿が出土していることから、16世紀から近世にかけて使用されていた道路であると考えられる。

第２面は、第１面の下層部分を取り除いた最下層部分である。幅約2.0ｍの溝状になっている。この面の全域にわたって、２～３㎝大の礫がみられる。１号堀及び１号溝の遺物と接合するものも埋土から出土している。この第２面も１号堀及び１号溝と共存関係にあると思われる。このことから推測すれば、第２面が中世の路面であったと考えられる。

第３面は、１号溝と第２面の間の残存する高まりである。調査区の東側にいくにつれ、段差がなくなり、上記の第２面と重なっている。このことから、第３面は、本来の幅をとどめておらず、第２面造成時に、一部掘削され、消失したと考えられる。第３面上には、２～３㎝大の礫が敷き詰められ、その上層部分が２～３㎝の粘土層となっている。第２面と第３面の時期差については、不明であるが、東側では、路面を共有していることから、第２面は、第３面の付け替えである可能性もある。

１号溝は、前述のとおり、第１面と共存関係にあり、側溝的な役割を持つと考えられる。さらに、出土遺物から、第２面との共存の可能性もある。この共存関係と１号堀、１号溝及び道路状遺構がほぼ軸を同じにしていることから、そこには計画性がみられる。これについては、第Ⅴ章にゆずる。なお、道路状遺構の西側は、大規模な削平を受けており、調査区外で消滅している。東側の延長線のＧ－７以東については、不明である。

7　溝

Ⅰ区とⅡ区あわせて、溝と認定できた遺構が14条ある。溝同士もしくは他遺構との切り合い関係にあるものについては、それぞれの項で述べる。

Ⅰ区は、大規模な削平を受けていたため、その全体像については不明な部分が残った。さらに現道路による両調査区の分断も重なり、遺構同士の直接の関係については、断定することはできなかった。しかし、現地にて推測できた点については、可能性の一つとして示すが、結論は今後の調査に委ねることとする。

以下各溝について、詳細を記す。１号溝から４号溝が調査区Ⅱ区、５号溝から14号溝が調査区Ⅰ区に位置する遺構である。

１号溝（第13図）

Ⅱ区南側で東西に軸をとり、道路状遺構と平行する溝である。道路状遺構との位置関係及び出土遺物から道路状遺構第１面及び第２面との共存関係が認められ、側溝的役割を持った溝と考えられる。幅96～105㎝、深さ45～50㎝で、蒲鉾状の掘形を持つ溝である。東から西に行くにつれ徐々に低くなっており、東から西に流路をとっていたと思われる。

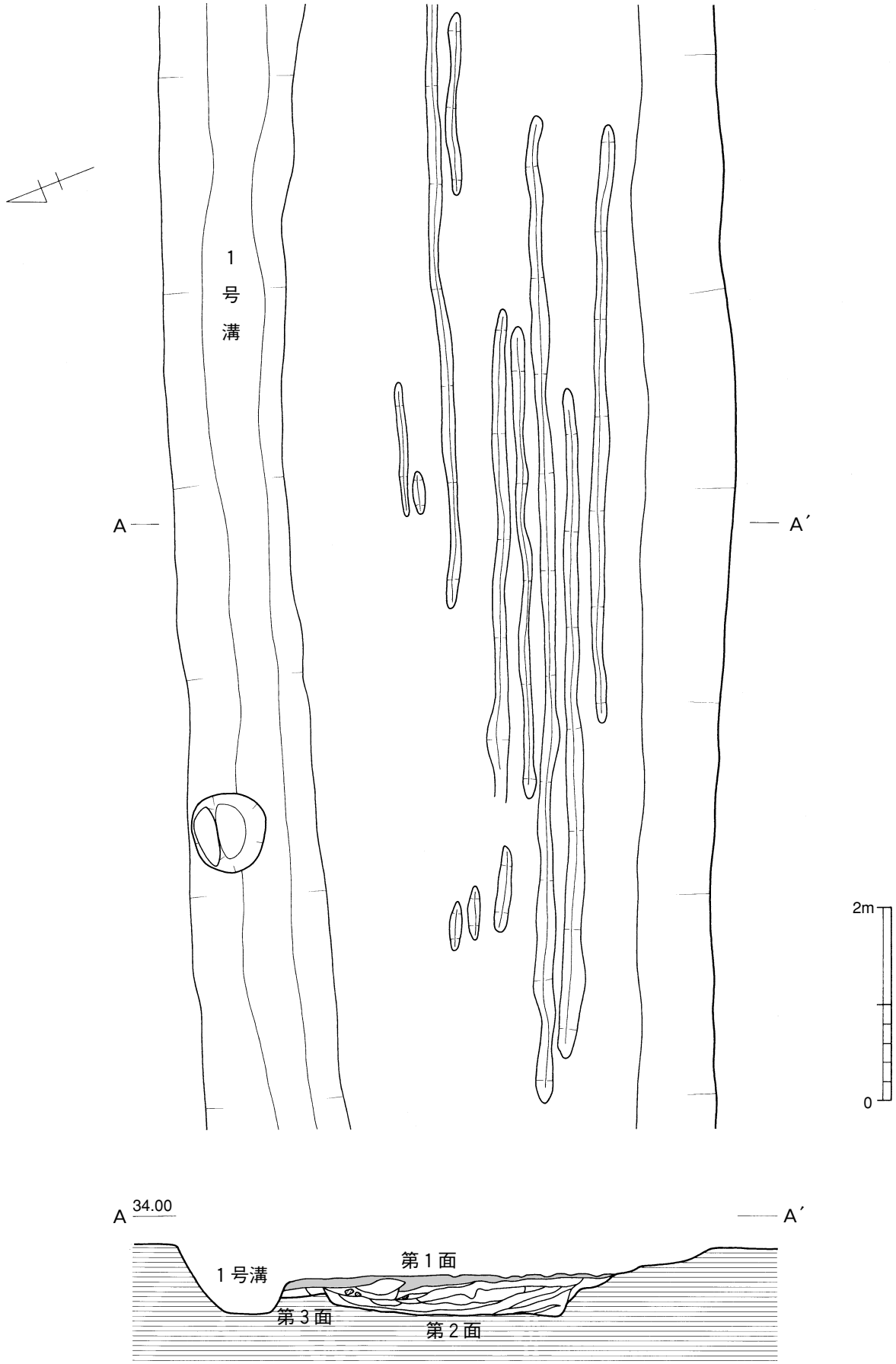
西側のＢ－４区以西は、大規模な削平により消滅しており不明。東側はＦ－６区で10号土坑によって切られ不明である。しかし、道路状遺構との関係からもさらに調査区外へと延びると思われる。

１号堀、道路状遺構、１号溝とほぼ平行して軸をとっている。また、出土遺物から、１号堀と同時期に存在した溝と考えられる。

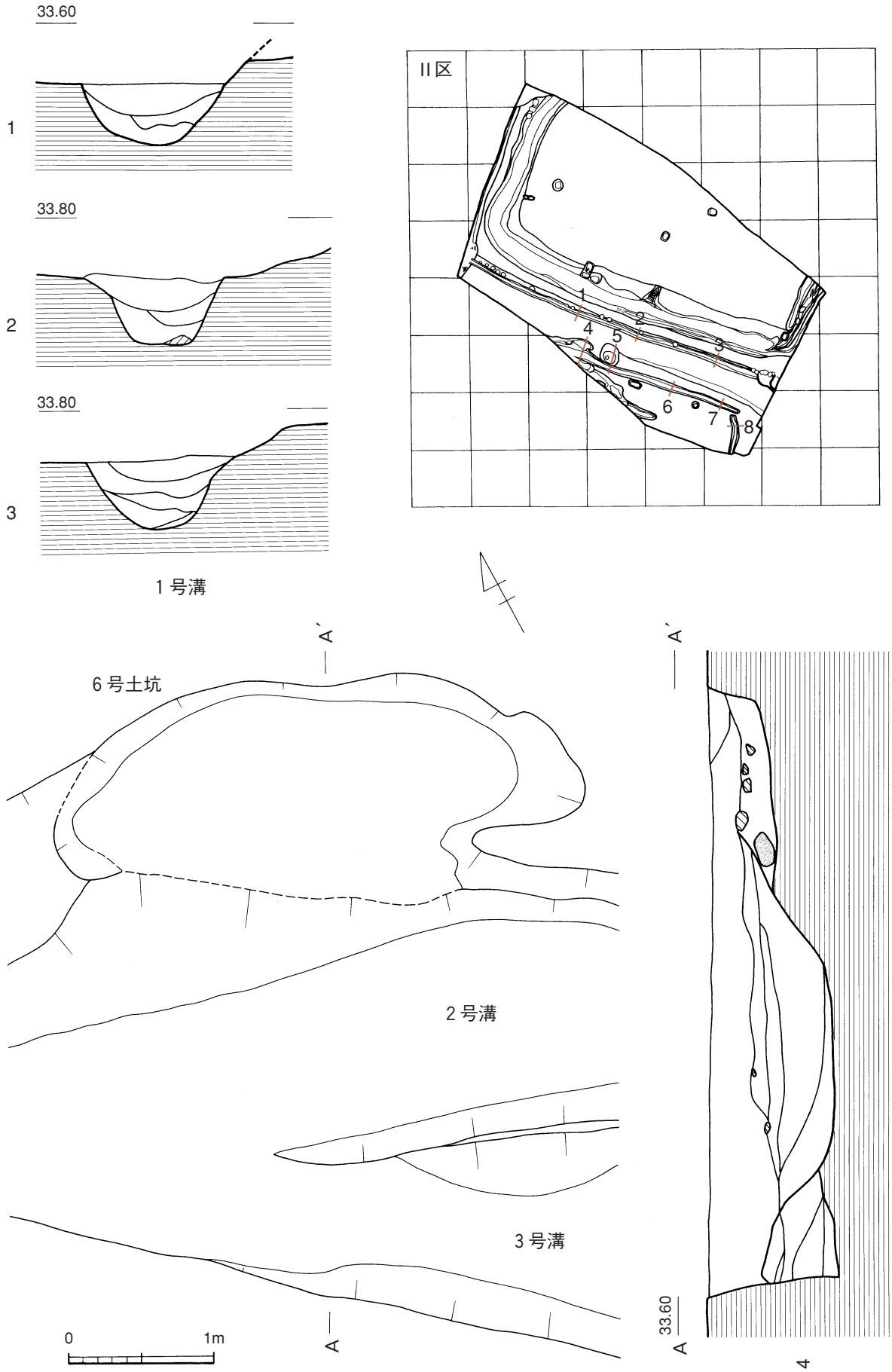
２号溝（第13・14図）

Ⅱ区南側を東西に軸をとる溝である。幅70～96㎝、深さ38～56㎝で蒲鉾状の掘形を持つ溝である。Ｆ－７区より始まり、東から西に流路をとる。西側は、調査区外へと延びている。Ｄ－６区で７号土坑に切られ、Ｃ－６区で６号土坑及び３号溝を切っている。なお、Ｄ－６、Ｃ－６区では、中層から下層床面にかけて拳大の礫が多数見られた。

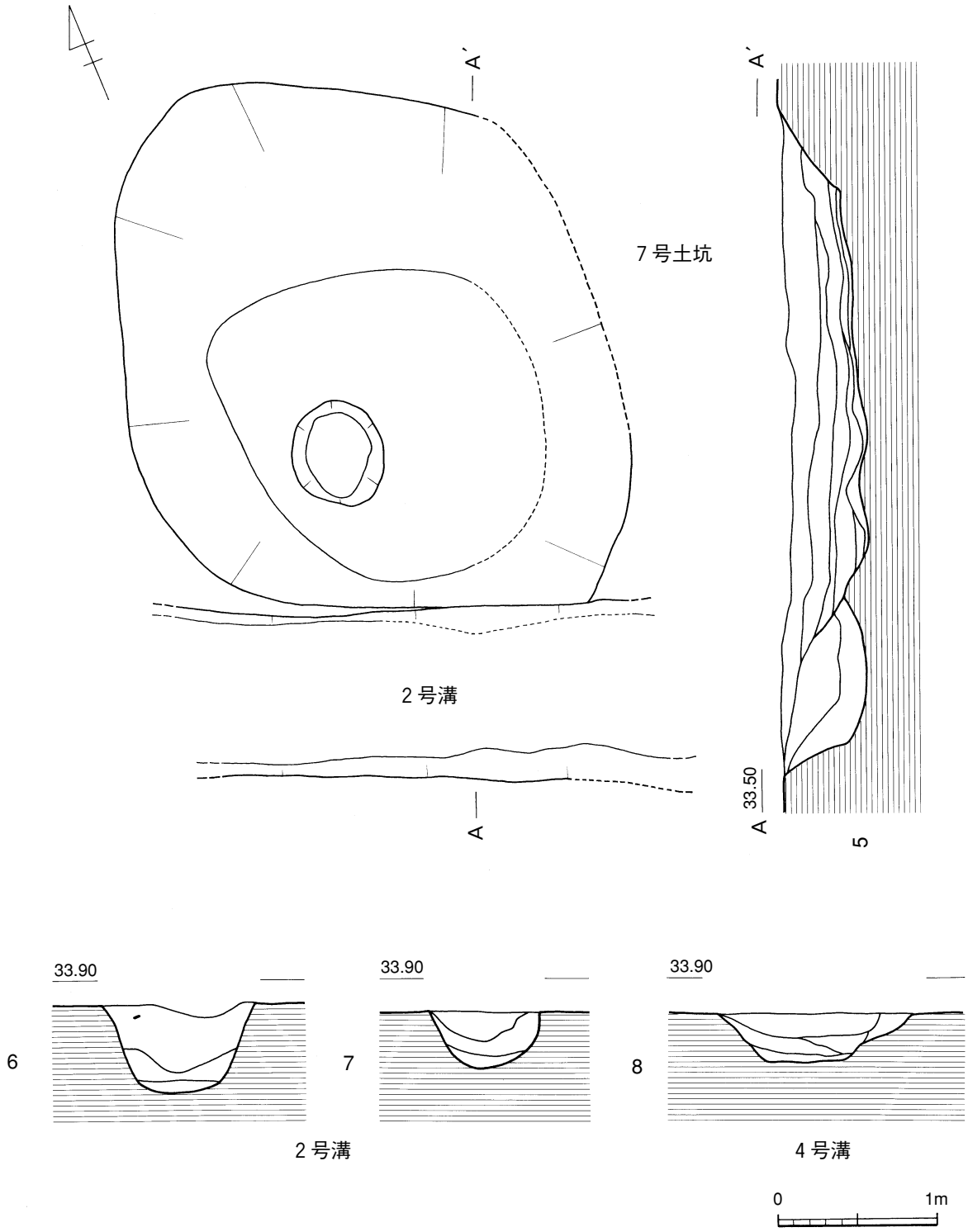
１号堀、１号溝と平行しており、出土遺物からも同時期の遺構である可能性が考えられる。



第12図　道路状遺構実測図



第13図　溝実測図　1



第14図　溝実測図　2

３号溝（第13図）

Ⅱ区南側を東西に軸をとる溝である。Ｅ－７区より始まり、北西に軸をとりＣ－６区で調査区外へと延びる。Ｃ－６区で２号溝に切られている。また、途中でやや不定形な掘形となるため、他遺構と切り合いの可能性も考えられるが不明である。

Ｃ－６区では２号溝同様、中層から下層にかけて拳大の礫が多数見られた。

４号溝（第14図）

Ｆ－７区内で南北に軸をとる溝である。幅約120㎝、深さ約32㎝。出土遺物はなく、時期についても不明である。しまりのない埋土、他の溝との位置関係から推測すれば、近世の溝である可能性が高い。

５号溝（第15図）

Ｇ－６、Ｈ－６区に位置し、東西に軸をとる溝である。削平により上層部分は消滅しており、最下層及び若干の立ち上がりのみ確認できた。幅164㎝、深さ10㎝の逆台形の掘形を持つ溝と思われる。東西方向それぞれに調査区外へと延びる。

東西方向の軸とレベル及び１号溝がＧ－７区以東へ延びており、その位置関係から推測すれば、道路状遺構の側溝である１号溝と同一遺構である可能性も考えられる。しかし、これについて確証を得られるものはなく、今後の調査に委ねたい。

６号溝・７号溝（第15図）

Ｉ－７、Ｊ－７区に位置し、東西に軸をとる溝である。７号溝が６号溝を切っている。６号溝は、幅約100㎝、深さ約25㎝の蒲鉾状の掘形を持つ溝である。７号溝は幅約0.75ｍ、深さ約20㎝で同じく蒲鉾状の掘形を持つ溝である。６号溝・７号溝共に東側は、Ｊ－７区以東は調査区外へと延び、またＩ－７区以西は削平により消滅しており詳細については不明。出土遺物はほとんどないが、最下層より須恵質甕の一部が出土している。

８号溝（第15図）

Ｉ－７、Ｈ－８区に位置し、南西に軸をとる溝である。幅約90㎝、深さ約20㎝の蒲鉾状の掘形を持つ溝である。上層部分は削平を受けている。

Ｈ－８区以南については不明である。

９号溝（第15図）

Ｇ－７・８区に位置し、南北に軸をとる溝である。北側はＧ－７区で調査区外へと延び、南側はＧ－８区で13号溝と合流しているが、その切り合い関係については不明である。幅約120㎝、深さ約35㎝の蒲鉾形の掘形を持つ溝である。削平により上層部が消滅している。前述のとおり北側は、調査区外へと延び、延長線上はⅡ区方向であるが、Ⅱ区との関係については不明である。

10号溝（第15図）

Ｇ－７・８区に位置し南北に軸をとる溝である。前述の９号溝と同じ軸をとり、９号溝を切っている。北側は、９号溝同様Ｇ－７区で調査区外へと延び、Ｇ－８区以南は14号溝との切り合い関係により消滅する。14号溝との新旧関係については不明である。幅約100㎝、深さ約20㎝の逆台形の掘形を持つ溝である。削平により上層部が消滅しており、９号溝同様Ⅱ区との関係については不明である。

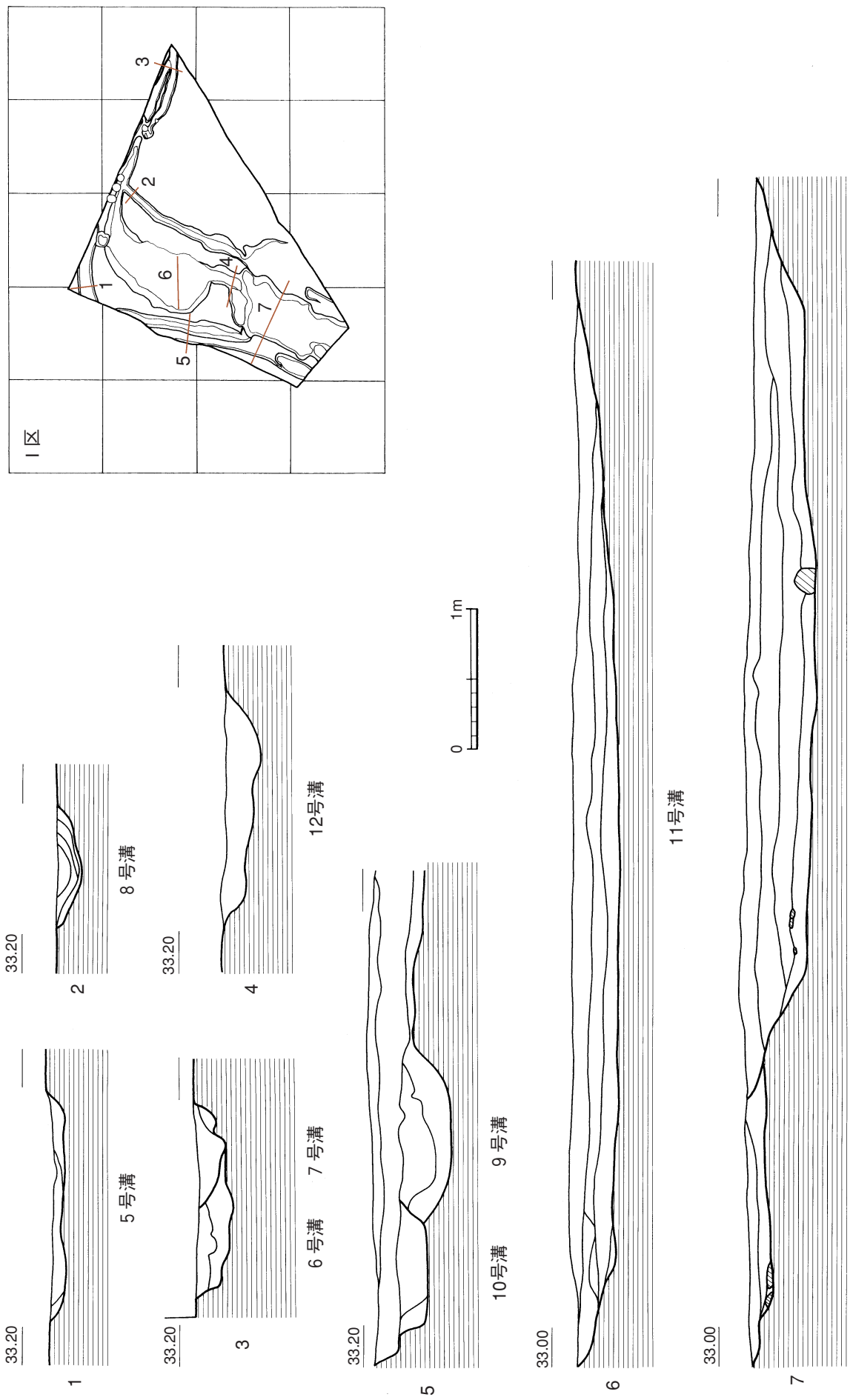
11号溝（第15図）

Ｈ－７・８、Ｇ－７区に位置し南北に軸をとる溝である。幅約7.7ｍ、深さ約34㎝の不定形な掘形を持つ溝である。溝というより不定形な大型土坑の感もあるが、ここでは溝として取り上げる。

溝上層部は削平により消滅している。削平によりＨ－７区以北については徐々に消滅しており、不明である。南側は、Ｈ－８区で消滅している可能性が高い。また、切り合い関係は不明だが、Ｈ－８区で12号溝により13号溝とつながっている。11号・12号・13号溝の切り合い関係は認められず、出土遺物から判断すれば、３条の溝とも同一時期のものであると考えられる。

12号溝（第15図）

Ｈ－８区に位置し南北に軸をとる溝である。北側


Ⅰ区
1
2
3
4
5
6
7
33.20
33.00
5号溝
8号溝
6号溝
7号溝
12号溝
10号溝
9号溝
11号溝
14号溝
13号溝
0
1m

第15図　溝実測図　3

に11号溝、南側に13号溝が、それぞれ南北に延びており、11号溝と13号溝を結ぶような形で12号溝が存在している。11号溝と12号溝は、ほぼ同レベルであるが、12号溝は、それより浅くなっている。12号溝を基点として、11号溝は約11㎝、13号溝は約30㎝深くなっている。

幅約170㎝、深さ約30㎝の不定形な掘形を持つ溝である。削平により上層部が消滅しているが、本来はもっと深かったと考えられる。

13号溝（第15図）

Ｈ－８、Ｇ－８・９区に位置し南北に軸をとる溝である。幅約6.7ｍ、深さ約50㎝の逆台形の掘形を持つ溝で、北側及び南側が狭くなっている。上層部は削平され消滅しているが、本来はもっと深かったと考えられる。溝の西側Ｇ－８区では９号溝及び14号溝を切っている。北側は、Ｈ－８区で12号溝を介して11号溝と結ばれている。南側は、Ｇ－９区でさらに調査区外へと延びている。

11号溝の出土遺物と接合できる遺物もあり、11号溝と同一時期に存在した溝と考えられる。

14号溝（第15図）

Ｇ－８・９に位置する南北に軸をとる溝である。北側Ｇ－８以北については不明。南側Ｇ－９区以南は調査区外へと延びる。Ｇ－８区で10号溝との切り合い関係にあるが、新旧関係については不明である。東側部分は13号溝によって切られている。幅約220㎝以上、深さ約20㎝の逆台形の掘形を持つ溝である。

８　土　　坑

土坑は全部で11基確認できた。その全てが調査区Ⅱ区内に位置している。他の遺構との切り合い関係によりある程度の時期が推測できたものもあった。しかし出土遺物がなく、時期については不明のものが多かった。以下、各土坑について詳細を記す。

１号土坑・２号土坑（第16図）

遺跡西側Ｂ－３、Ｃ－３区に位置する。１号土坑が２号土坑を切っている。２号土坑西側は、１号堀立ち上がりの境界線上に位置する。

１号土坑は、長軸約2.0ｍ、短軸約1.2ｍ、深さ約37㎝の隅丸長方形を呈し、軸はＮ37°Ｅである。

２号土坑は、長軸約1.5ｍ以上、短軸約1.35ｍ、深さ約15㎝の隅丸長方形を呈し、軸はＮ37°Ｅである。１号・２号土坑ともに遺物を伴わない。

３号土坑（第16図）

遺跡西側Ｃ－３区に位置する。平面形は隅丸方形を呈するが、土坑内部で袋状の空間をもつ掘形となっている。

平面形は、長軸径約1.05ｍ、短軸径0.85ｍの隅丸方形。土坑内は、深さ約40㎝下から約1.0ｍ間が袋状の空間となる。土坑内下端は最大径で長軸約1.95ｍ、短軸約1.65ｍで南北に軸をとり、ほぼ円形を呈する。

埋土は上層部が黄色土を含む暗褐色土でしまりがなく、床面から約15㎝は暗褐色土（ニガ土）を含む黄色土であった。上端から約30㎝以下はローム層であることから、最下層のローム層は、袋状の壁もしくは天井部分の一部が落下したものであると考えられる。このことから、袋状の土坑ではあるが、本来の内部の形は違っていたと考えられる。

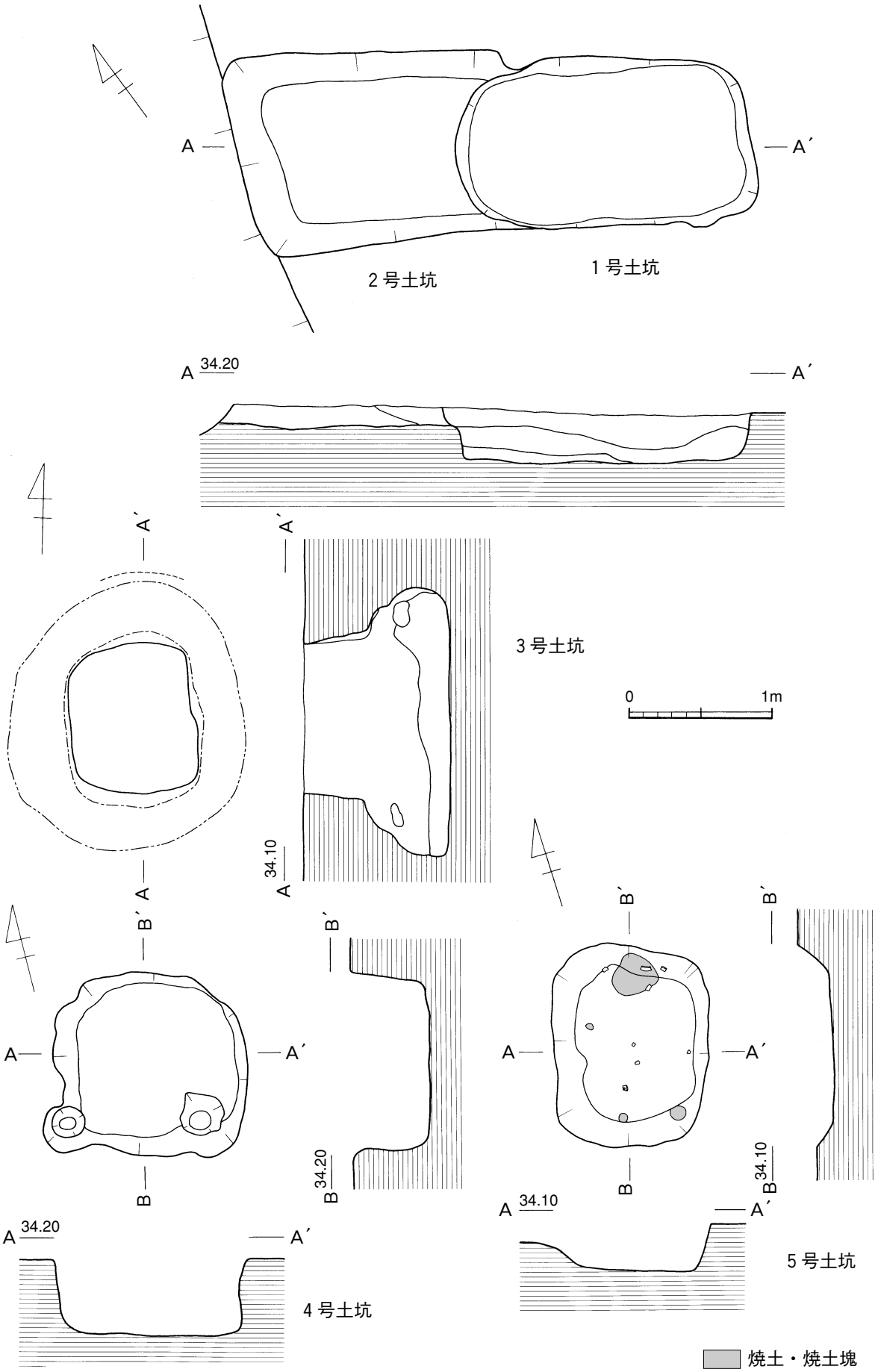
遺構埋土中にも遺物を伴わず、遺構の性格については不明である。

４号土坑（第16図）

遺跡北側Ｆ－３区に位置する。長軸約1.35ｍ、短軸約1.3ｍ、深さ約55㎝のほぼ隅丸正方形を呈し、軸はＮ76°Ｗである。土坑南側両端に２つの柱穴が土坑を切っているが、土坑と柱穴の直接的な関係は認められない。土坑内よりわずかではあるが、石鍋の破片数点が出土している。このことから推測すれば、居館跡と同時期である可能性も考えられる。

５号土坑（第16図）

遺跡中央Ｅ－４区に位置する。長軸約1.4ｍ、短軸約1.07ｍ、深さ約35㎝の隅丸長方形を呈し、軸はＮ73°Ｗである。上層部は削平を受けており、本来はもっと深かったと思われる。埋土中に、灰と思わ


A
A´
2 号土坑
1 号土坑
A 34.20
A´
A´
A´
3 号土坑
0
1m
A 34.10
B´ A
B´
A
A´
B
B´
B 34.20
B´
B´
A
A´
B
B´
B 34.10
A 34.20
A´
4 号土坑
A 34.10
A´
5 号土坑
焼土・焼土塊

第16図　土坑実測図　1

れるものを多量に含み、床面には一部焼土も見られた。土師質皿の口縁部が出土している。

６号土坑（第13図）

遺跡南側Ｃ－６、Ｄ－６区に位置する。２号溝に切られている。長軸約3.7m、短軸約2.5m以上あり、深さ約45㎝の不定形な楕円形を呈し、軸はN29°Ｅである。土坑の中層付近からは拳大程の礫が多数見られ、一部焦土魂も確認された。

７号土坑（第14図）

遺跡南側Ｄ－６区に位置する。２号溝を切っている。一部、確認調査時のトレンチで消滅しているが、長軸約3.4m、短軸約3.15m、深さ約50㎝の不定形な円形を呈し、軸はN68°Ｗである。内部は、擂鉢状となる。最下層には、キメの細かい粘質土が見られ、水を有していた痕跡が確認された。

８号土坑（第17図）

遺跡南側Ｄ－６区に位置し、２号溝脇に位置している。長軸約1.9m、短軸約0.9m、深さ約15㎝の西側がやや細くなるやや不定形な隅丸方形を呈し、軸はN68°Ｗである。遺物は全く伴わないが、埋土及び床面からは大量の炭が検出された。

９号土坑（第17図）

遺跡南東（Ｅ－７区）に位置する。長軸約1.1m、短軸約1.0m、深さが約35㎝のほぼ円形で軸はN15°Ｅである。遺物は伴っていない。

10号土坑・11号土坑（第17図）

遺跡東側Ｆ－６・Ｇ－６区に位置する。10号土坑は、１号溝を切っている。さらに10号土坑は11号土坑に切られ、11号・10号土坑ともに北側部分は、近世の撹乱（イモ穴等）よって切られている。そのため、北側の立ち上がりは不明である。また、10号・11号土坑ともにＧ－６区で調査区外まで続いている。

10号土坑は長軸約2.5m以上、短軸が1.9m以上、深さ約35㎝の不定形である。遺構埋土からは、青磁碗の底部などが出土している。

11号土坑は、長軸約2.5m以上、短軸約1.0m以上、深さ14㎝であり不定形である。ともに軸はN22°Ｅ。

9　土 壙 墓

土壙墓は、Ⅱ区内で３基確認した。全ての土壙墓から人骨が検出された。出土人骨の保存状態は、よいものではなかったが、現地にて山口県土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸氏に鑑定いただいた。その詳細報告については、第Ⅳ章にゆずる。

３基のうち、平面形を確認できたのは、１号土壙墓のみである。２号土壙墓については、調査時のトレンチによって一部分が不明である。また、３号土壙墓は、人骨の一部を検出するまで遺構を確認できなかった。２号・３号土壙墓は、２号堀を切っているため、それぞれの埋土の区別をつけることが困難であった。そのため、２号・３号土壙墓については、本来の平面形を十分確定することができなかった。以下に示す、２号・３号土壙墓の実測図（第18図）については、現地にて想定できた推定のラインである。

検出できた３基の土壙墓はＧ－５・６区内で北東を軸にほぼ一直線上に並んでいる。関係については不明であるが、その延長線上である調査区外には、現在、墓地がある。

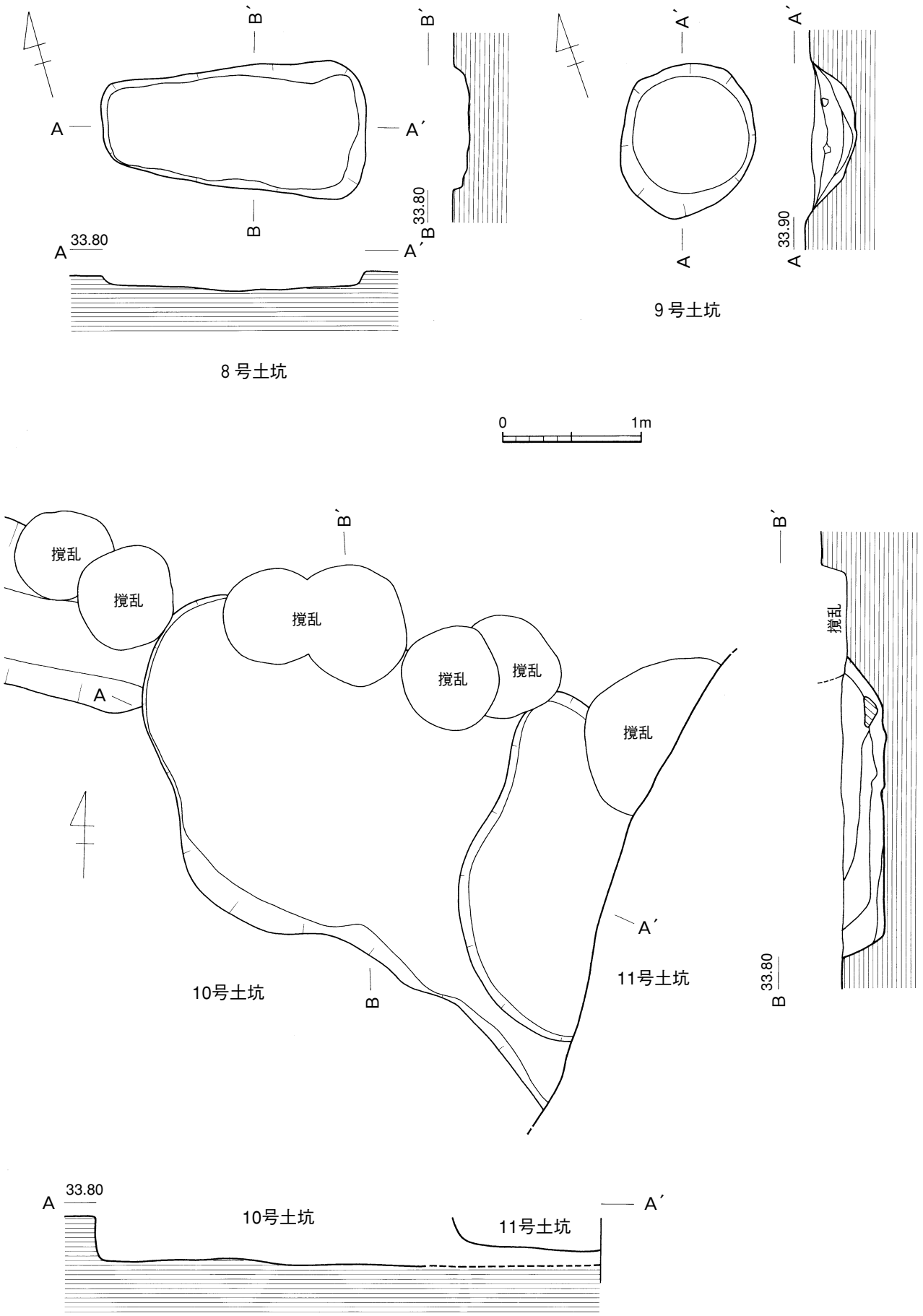
１号土壙墓（第18図）

遺跡東側Ｇ－６区に位置する。１号堀と３号堀間に位置し、２号堀の西側部分の一部を切っている。

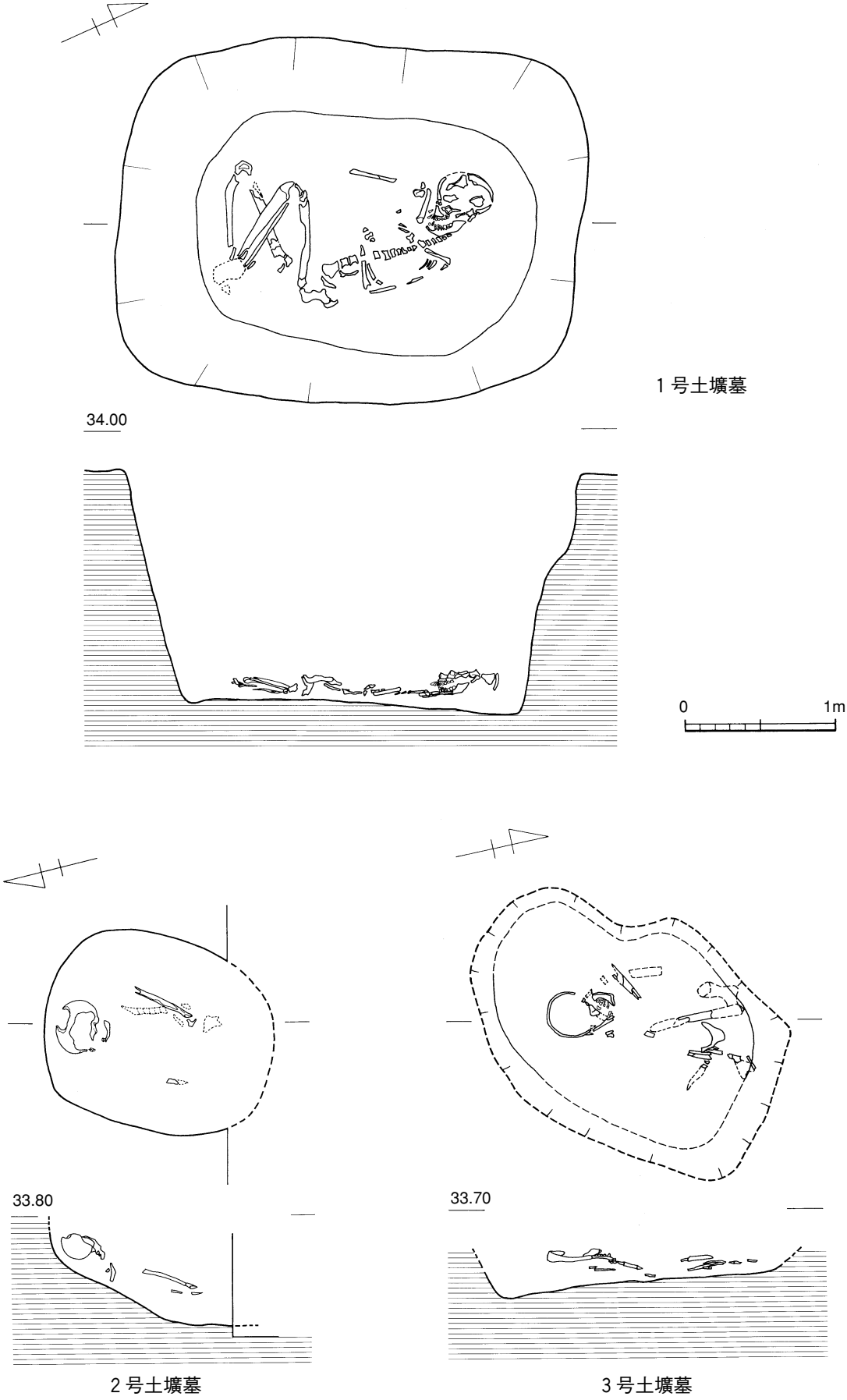
長軸約1.5m、短軸約1.2mの隅丸長方形となる。深さも検出面から約80㎝とかなり深い土壙墓である。

人骨は北に頭部を置き、右側を下にした状態の側臥屈葬の状態で検出された。松下氏の所見によると検出時の人骨の姿勢状態は不自然であり、死後硬直が解けたあとに埋葬した可能性を示されている。木棺及びその痕跡は認められなかった。副葬品は土師質の燈明皿（40－297・298）２枚であった。

土壙墓の埋土は、上層部約60㎝が黄色土（ローム）混じりの明茶褐色土で、人骨の直接の埋土は暗茶褐色土であった。出土人骨は中世人の特徴を持っており、推定身長153～154㎝の成人男性（壮年）で



第17図　土坑実測図　2



第18図　土壙墓実測図

あった。

２号土壙墓（第18図）

遺跡東側Ｇ－５区に位置し、３号堀を切っていることから居館の廃絶後に作られた土壙墓であることが明らかである。

土壙墓の一部に、調査の際のトレンチがあり、土壙墓の全体像については不明である。しかし、確認できた部分から推定すれば、やや楕円形となると思われる。なお、断面形は、北から南にかけて傾斜しており、人骨も頭部が高く骨盤が低い位置で検出された。副葬品は伴わない。

３号土壙墓（第18図）

遺跡東側Ｇ－５区に位置する。２号土壙墓同様、３号堀を切っていることから、居館廃絶後の土壙墓である。３号土壙墓は、人骨の一部が検出されるまで確認できなかったため、土壙墓の平面形については不明である。第18図に示した実測図は、現地で推測できた平面形である。

出土した人骨の向きは他の２体とは異なり、逆の南向きであった。副葬品は伴わない。

第２節　遺　　物

１　はじめに

出土遺物の大半は、１号堀からのものである。以下、前節で取上げた遺構順に沿って、本節では土器類・石製品・金属製品の順に取り上げる。

以下、個々の遺物について記すが、第３・４表の出土遺物観察表一覧を合わせて参照されたい。観察表備考欄に示した編年は次のものをもとにしている。青磁類は、山本信夫氏による太宰府編年及び一部を上田秀夫氏による編年、白磁類は森田勉氏による型式分類、染付類は小野正敏氏の分類を用いた。

２　土器類

【１号堀】

19-1　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は直口する。外面は回転ヘラ削りで無文。内面は、ヘラの片彫りと二又工具で施文する。

19-2　青磁碗で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りで無文。内面は二又工具で施文する。

19-3　青磁碗で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りを行う。内面は、口縁部付近に四又工具または櫛状工具による施文を行い、内面体部にはヘラの片彫りで雲文状の施文を行う。貫入を伴う。

19-4　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は直口する。外面は回転ヘラ削りを行い、櫛状工具による片彫りで施文する。内面は片彫りの櫛状工具による施文。

19-5　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は直口する。外面は回転ヘラ削りの後、ヘラの片彫りで蓮弁文を象る。細かい貫入を伴う。19-6と同一個体と思われる。

19-6　青磁碗で胴部の一部。外面は回転ヘラ削りの後、ヘラの片彫りによる蓮弁文を象る。内面は無文。細かい貫入を伴う。19-5と同一個体と思われる。

19-7　青磁碗で底部の一部。復元底径5.8㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。体部下位付近より直立する。見込みにはスタンプを押し、周辺には沈線を施す。外面体部下位の高台周辺には、ヘラの片彫りにより施文する。高台内は釉を環状に掻きとる。

19-8　青磁碗で底部の一部。底径4.4㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。外面下位に鎬の一部が見られる。高台畳付けから高台内面にかけて無釉。貫入を伴う。

19-9　青磁碗で口縁部の一部。胎土の器厚は薄く、口縁部は直口する。外面は回転ヘラ削りを行い、やや幅の広い片彫りの鎬蓮弁文を象る。内面は無文。

19-10　青磁坏で口縁部から胴部の一部。復元口径12.1㎝。体部は丸みを持ち、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部は鋭く外反する。口縁部の上端は平坦面をなす。外面にはヘラの片彫りによる鎬蓮弁を象る。内面は無文。

19-11　青磁碗で底部の一部。復元底径5.7㎝。高台は竹節高台で、施釉後、削り出す。高台畳付けは釉が残る。見込みには、草花文のスタンプを押す。

19-12　青磁碗で底部の一部。底径4.9㎝。外面は、回転ヘラ削りを行う。見込みにヘラによる施文を行う。高台は竹節高台で、高台内面は粗く刳られ、中央部が凸状となる。内底部を残して故意に打ち砕いた痕跡が認められる。いわゆる「瓦玉」として二次利用されていたと思われる。

19-13　青磁盤で底部の一部。底径5.8㎝。高台は角高台。高台内面から高台畳付け部分は無釉。高台外面も一部無釉。

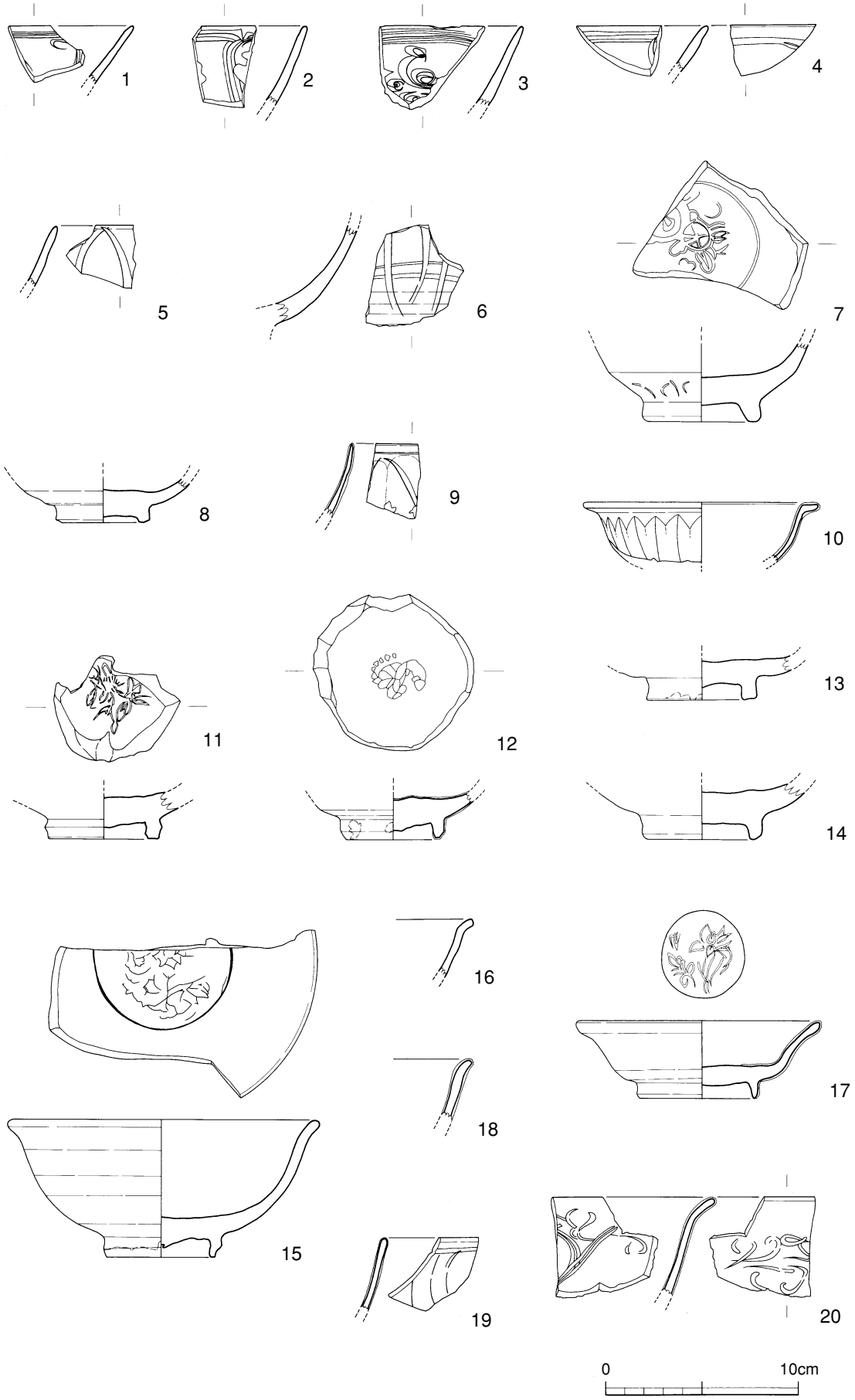
19-14　青磁碗で底部の一部。復元底径5.7㎝。畳付けから高台内面の一部まで施釉。高台内面は、釉を掻きとる。

19-15　青磁碗。復元口径15.8㎝、復元底径5.7㎝。外面は回転ヘラ削りを行い、口縁端部はやや肥厚し、外反する。内外面体部ともに無文であるが、見込みに花文のスタンプを押し、周辺に沈線を施す。高台は竹節高台で高台内面の刳りは粗く、中央部が凸状となる。

19-16　青磁碗で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りを行い、口縁部は外反する。内外面ともに無文。貫入を伴う。

19-17　青磁坏。１号堀及び道路状遺構第２面上層より出土。復元口径12.7㎝。底径6.1㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。体部下部より屈曲し、外反しながら立ち上がり、口縁部は外反する。見込み中央部分の釉を掻きとり、草花文のスタンプを押す。スタンプ部分には、部分的に釉がかかる。高台内面は釉

【１号堀】



第19図　出土遺物実測図　1

を掻きとる。貫入を伴う。

19-18　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は、やや肥厚し外反する。釉は緑黄色の不透明でやや厚く施釉。推定口径は17.0㎝で大型の碗となる。

19-19　青磁碗で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りを行う。外面はヘラの片彫りによる蓮弁文を象る。

19-20　青磁碗で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りを行い、口縁部は強く外反する。体部内外面ともに、ヘラの片彫りによる施文を行う。推定口径から大型の碗と思われる。

20-21　青磁坏で口縁部の一部。皿形に近く、体部は丸みを帯び、口縁部はやや外反する。外面は丁寧なナデを行う。内外面ともに無文。厚く釉がかかり貫入を伴う。

20-22　青磁坏で口縁部の一部。体部は、丸みを帯びる。外面は回転ナデの後、ヘラの片彫りによる蓮弁文を象る。内面は、縦にヘラの片彫りで施文する。

20-23　青磁で香炉の胴部から底部の一部と思われる。内面は回転ヘラ削りを行う。外面は薄く施釉。底部付近に退化した本来は脚部と思われる突起が見られる。

20-24　青磁碗で底部の一部。復元底径6.8㎝。外面は回転ヘラ削りを行い、ヘラの片彫りによる蓮弁文を象る。見込みにはスタンプを押し、周辺には沈線を施す。高台は外面を大きく斜めに面取りする。釉は、畳付けを越えて高台内面途中までかかる。

20-25　青磁碗で底部の一部。底径5.4㎝。外面は、回転ヘラ削りを行う。見込みに幾何学文様のスタンプを押す。高台は角高台で、畳付けから高台内面は無釉。19-12同様、内底部を残して、故意に打ち砕いた痕跡が認められる。

20-26　青磁碗で口縁部の一部。外面は、回転ヘラ削りを行う。外面口縁部付近には雷文を施す。内面は、無文。

20-27　青磁碗で口縁部から胴部の一部。復元口径15.0㎝。口唇端部は丸みを持ち、口縁部は外反する。器厚、釉ともに厚い。内外面ともに無文。

20-28　青磁碗で底部の一部。底径4.8㎝。高台は竹節高台で、畳付けから高台内面は無釉。高台外面の一部に釉だれが見られる。

20-29　青磁碗。復元口径14.0㎝、底径5.4㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。外面は、口縁部周辺にヘラの片彫りで雷文帯を施文し、外面中位付近には、縦にヘラの片彫りで施文を行う。見込みには、花文のスタンプを押し、周辺には沈線を施す。畳付けの一部に釉がかかるが、高台内面は釉を掻きとる。貫入を伴う。

20-30　青磁碗。１号堀及び道路状遺構第２面下より出土。復元口径13.6㎝。底径5.5㎝。外面は回転ヘラ削りを行い、口縁部には雷文のスタンプを施す。内面体部は、ヘラの片彫りで施文を割り付ける。見込みにはスタンプを押すが、不明瞭である。釉は高台内面までかけ、環状に一部を掻きとる。貫入を伴う。

20-31　青磁碗で底部の一部。見込みには草花文のスタンプを押す。高台内面まで施釉後、環状に掻きとる。焼きが悪く、粗雑なつくりである。

20-32　白磁皿で口縁部の一部。口唇部は、口禿げで口縁部はやや外反する。釉はやや厚めにかかる。

20-33　白磁碗で口縁部から胴部の一部。復元口径17.0㎝。外面は回転ヘラ削りを行い、口縁部はやや外反する。外面体部下位は一部、無釉。見込み周辺に沈線を施す。

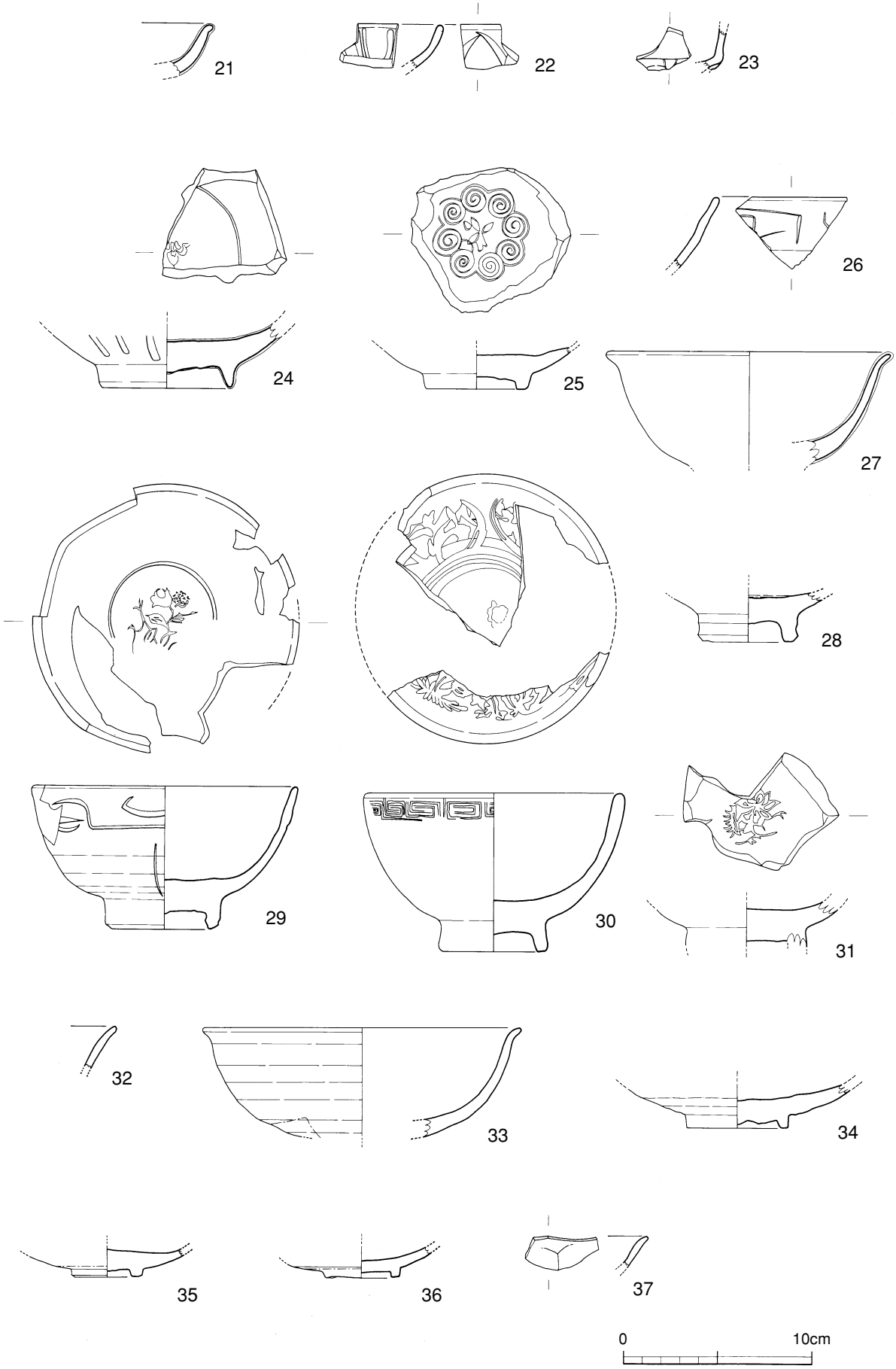
20-34　白磁皿で底部の一部。底径5.5㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。体部下位から高台にかけて、無釉。細かい貫入を伴う。高台内面は、粗い削り出しで中央部分が凸状になる。

20-35　白磁皿で底部の一部。復元底径3.4㎝。外面は体部下位から高台にかけては、無釉。内面には目跡が残る。

20-36　白磁皿で底部の一部。底径4.0㎝。外面は回転ヘラ削りを行い、釉は薄くかけられ、貫入を伴う。体部下位から高台内面にかけては無釉。高台は４ヵ所を抉る。４ヵ所の畳付け部分には、重ね焼きの際の釉が付着する。

20-37　白磁の多角坏で口縁部の一部。体部外面をヘラで削り面を形成する。

21-38　白磁皿。復元口径8.5㎝。復元底径3.2㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。内面見込みには、目跡が残る。高台は抉られる。釉は畳付け、抉り部分、



第20図　出土遺物実測図　2

高台内面までかかる。貫入を伴う。

21-39　白磁皿。復元口径8.8㎝。底径4.4㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。内面見込みには、目跡が４ヵ所残る。高台は４ヵ所を抉り、畳付けには釉が付着する。一部に貫入を伴う。

21-40　白磁皿で口縁部の一部。１号堀及び10号土坑より出土。復元口径9.6㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。薄く釉がかけられ、貫入を伴う。

21-41　白磁皿で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りを行う。外面下位から内湾し、口縁部は、ほぼ直立に立ち上がる。釉は薄くかけられ、細かい貫入を伴う。体部外面下位は一部無釉。

21-42　白磁皿で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りを行う。外面下位にかけ一部、無釉。透明感のある釉が薄くかけられ、細かい貫入を伴う。

21-43　白磁皿で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削りを行う。外面下位部分は一部、無釉。透明感のある釉が薄くかけられ、細かい貫入を伴う。

21-44　白磁皿で口縁部の一部。内外面ともに丁寧なナデ調整を行う。透明感のある釉が薄くかけられ、細かい貫入を伴う。

21-45　白磁皿で口縁部の一部。体部は丸みを帯びて緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。

21-46　白磁皿で口縁部から底部の一部。復元口径12.8㎝。復元底径7.0㎝。体部は、緩やかにやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。高台は細く直立する。釉は高台内面までかかり、畳付け先端部分のみ無釉。

21-47　白磁皿で底部の一部。復元底径7.6㎝。高台は、やや内傾ぎみに細く立つ。高台内部まで施釉。畳付け部分のみ無釉で、一部砂が付着する。

21-48　白磁皿で底部の一部。底径3.8㎝。外面は回転ヘラ削りを行い、全面施釉。高台内面は擂鉢状に削り出す。畳付け部分に４ヵ所の目跡が残り、砂が付着する。見込み部分にも目跡が残る。

21-49　青白磁碗で底部の一部。復元底径3.6㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。釉は薄くかけられ、貫入を伴う。高台は削り出しで、1.2㎝と高く、高台内面は無釉。

21-50　景徳鎮窯系の染付碗で口縁部の一部。口縁部は直口し、内外面には界線が描かれる。外面体部は唐草文の略化から独立したと思われる丸を三つ結合したような文様を主として、丸や渦巻き文様を描く。

21-51　景徳鎮窯系の染付碗で口縁部の一部。内外面の口縁部付近には界線が描かれ、口縁部は外反する。外面には、文様が描かれる。推定口径から大型の碗と思われる。

21-52　景徳鎮窯系の染付碗で口縁部の一部。口縁部は細く直口する。内外面の口縁部付近には界線が描かれ、外面体部には文様が描かれる。

21-53　景徳鎮窯系の染付陶磁器片で、小型の瓶型の胴部の一部と思われる。内面は横方向にヘラ削りによる調整を行う。外面のみ文様を描く。

21-54　天目茶碗の胴部の一部。外面は、回転ヘラ削りを行う。錆釉と黒釉を体部下位付近まで施釉する。

21-55　備前窯系の壺で口縁部の一部。内外面は、回転ナデ調整を行う。口縁部は、折り返し玉縁状に肥厚する。

21-56　常滑窯系の壺の胴部。外面はハケ目後横ナデ調整を行う。

21-57　備前窯系の壺の胴部。一部に釉だれが見られる。

21-58　壺又は甕の一部と思われる。接点はないが、この他に同一個体の破片が６点出土している。内面はハケ目及びナデ調整を行う。外面はナデ調整の後、黄褐色の釉を施す。

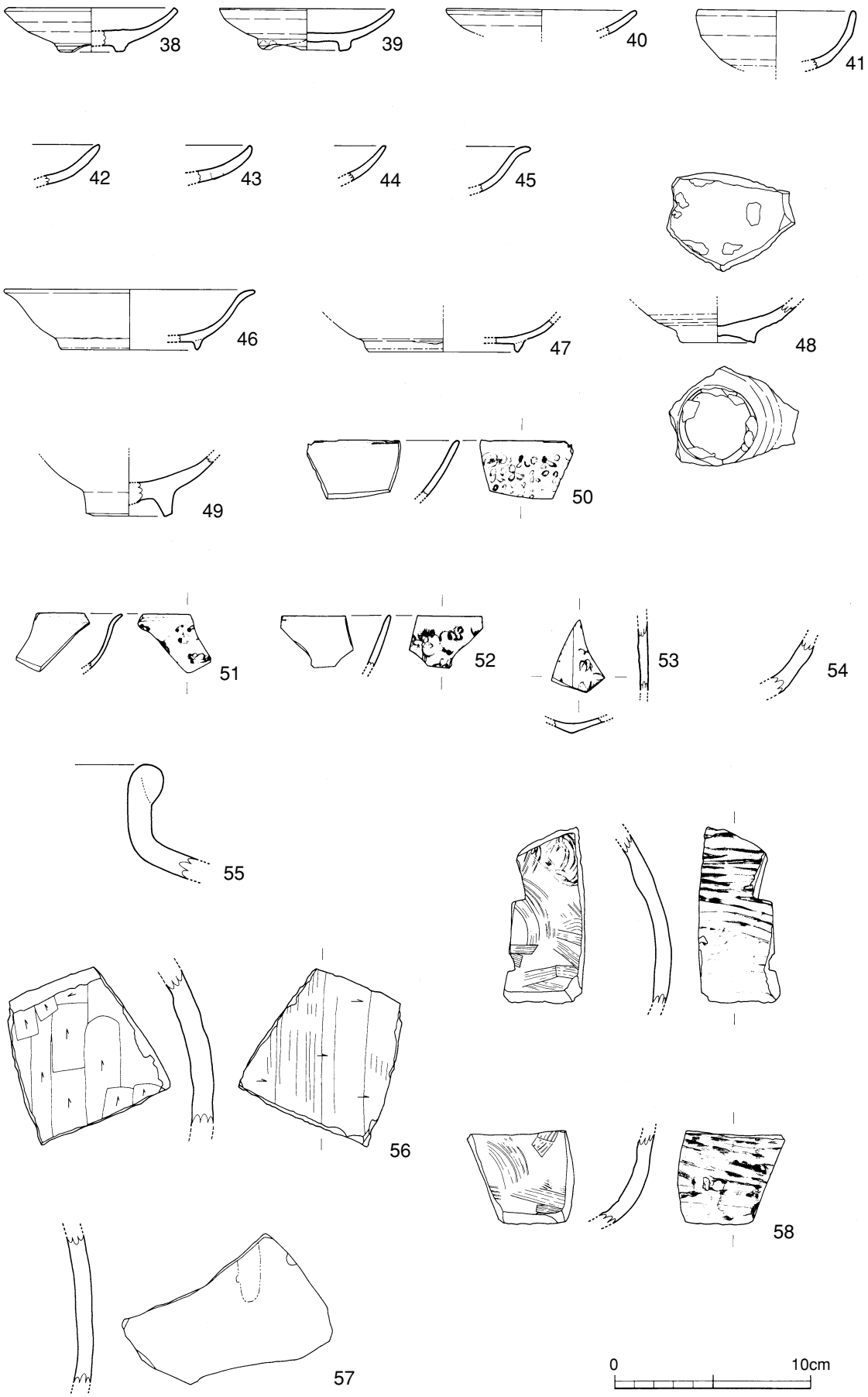
22-59　土師質土器で坏。口径7.1㎝、底径5.1㎝。器高1.5㎝。底部は回転糸きり。口縁部の一部にカーボンが付着する。燈明皿。

22-60　土師質土器で坏。復元口径7.0㎝、復元底径6.2㎝。器高1.4㎝。底部は回転糸きり。内面にはカーボンが付着する。燈明皿。

22-61　土師質土器で坏。復元口径8.9㎝、復元底径7.6㎝。器高1.3㎝。底部は回転糸きり。

22-62　土師質土器で坏。復元口径9.7㎝、復元底径8.2㎝。器高1.7㎝。外面は回転ナデ、内面は横ナデ。底部は回転糸きりで板目圧痕が残る。燈明皿。

22-63　土師質土器で坏。復元口径9.8㎝、復元底径



第21図　出土遺物実測図　3

6.8㎝。器高2.4㎝。底部は回転糸きり。

22-64　土師質土器で坏。復元口径10.2㎝、復元底径7.4㎝。器高2.2㎝。底部は回転糸きり。燈明皿。

22-65　土師質土器で坏。復元口径10.8㎝、復元底径8.3㎝。器高2.3㎝。底部は回転糸きり。燈明皿。

22-66　土師質土器で坏。復元口径11.1㎝、復元底径6.5㎝。器高2.7㎝。底部は回転糸きり。内面にカーボンが付着する。燈明皿。

22-67　土師質土器で坏。器高3.5㎝。底部は回転糸きりで、板目圧痕が残る。

22-68　土師質土器で坏。底部は回転糸きり。

22-69　土師質土器で坏。復元口径7.0㎝、復元底径4.8㎝。器高2.0㎝。底部は回転糸きりで板目圧痕が残る。口縁部にカーボンが付着する。燈明皿。

22-70　土師質土器で坏。復元口径5.8㎝。器高1.8㎝。底部は回転糸きり。

22-71　土師質土器で坏。底部は回転糸きり。

22-72　黒色土器で坏。復元底径8.0㎝。内黒。底部は回転糸きり。

22-73　土師質土器で碗。復元底径7.5㎝。高台は貼り付け高台。

22-74　瓦器碗。体部内外面ともナデ調整を行い、底部は回転糸きり。高台は貼り付け高台。内面の一部に黒斑が見られる。

22-75　瓦質碗。内外面とも回転ヘラ削りの後、丁寧な磨き調整を行う。貼り付け高台で、外側に大きくはり出す。内外面共に赤色顔料が塗られている。

22-76　土師質土器で坏。底部は回転糸きり。

22-77　土師質土器で坏。底径7.9㎝。底部は回転糸きり。

22-78　土師質土器で坏。底部は回転糸きり。

22-79　土師質土器で坏。復元口径6.2㎝。器高1.4㎝。器壁は薄く、精緻。底部は回転糸きり。

23-80　瓦質土器で火鉢。復元口径44.8㎝。内外面ともにナデ調整を行う。口唇部は肥厚し、口唇部下には二条の凸帯を巡らす。一段目が菊花文、凸帯間に連子状文のスタンプを押す。

23-81　瓦質土器で火鉢。復元口径43.8㎝。内外面ともにハケ目調整の後、一部をナデ消す。口縁部下に三条の凸帯を巡らす。凸帯間には一段目が菊花文、二段目が連子状文のスタンプを連続して押す。

23-82　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、口縁部下に二条の凸帯を巡らす。凸帯間には、一段目が花菱文、二段目が連子状文のスタンプを押す。内外面はハケ目調整を行う。

23-83　瓦質土器で火鉢。口縁部はやや肥厚し、口縁部下に二条の凸帯を巡らす。一段目上に菊花文、凸帯間に連子状文のスタンプを押す。内外面はハケ目調整を行う。

23-84　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、ナデ調整を行う。口縁部下に二条の凸帯を巡らす。一段目上に菊花文、凸帯間に連子状文を押す。内面は斜め方向のハケ目調整と櫛状工具による調整が見られる。

23-85　瓦質土器で火鉢。口縁部下に二条の凸帯を巡らす。一段目上に菊花文、凸帯間に連子状文のスタンプを押す。内外面は丁寧なナデ調整を行う。

23-86　瓦質土器で火鉢。口縁部下に一条の凸帯を巡らし、菊花文のスタンプを押す。内外面ともに丁寧なナデ調整を行う。破損後に火を受けた痕跡が見られる。

23-87　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、外面の口縁部下に一条の凸帯を巡らし、菊花文のスタンプを押す。内外面ともにナデ調整を行う。

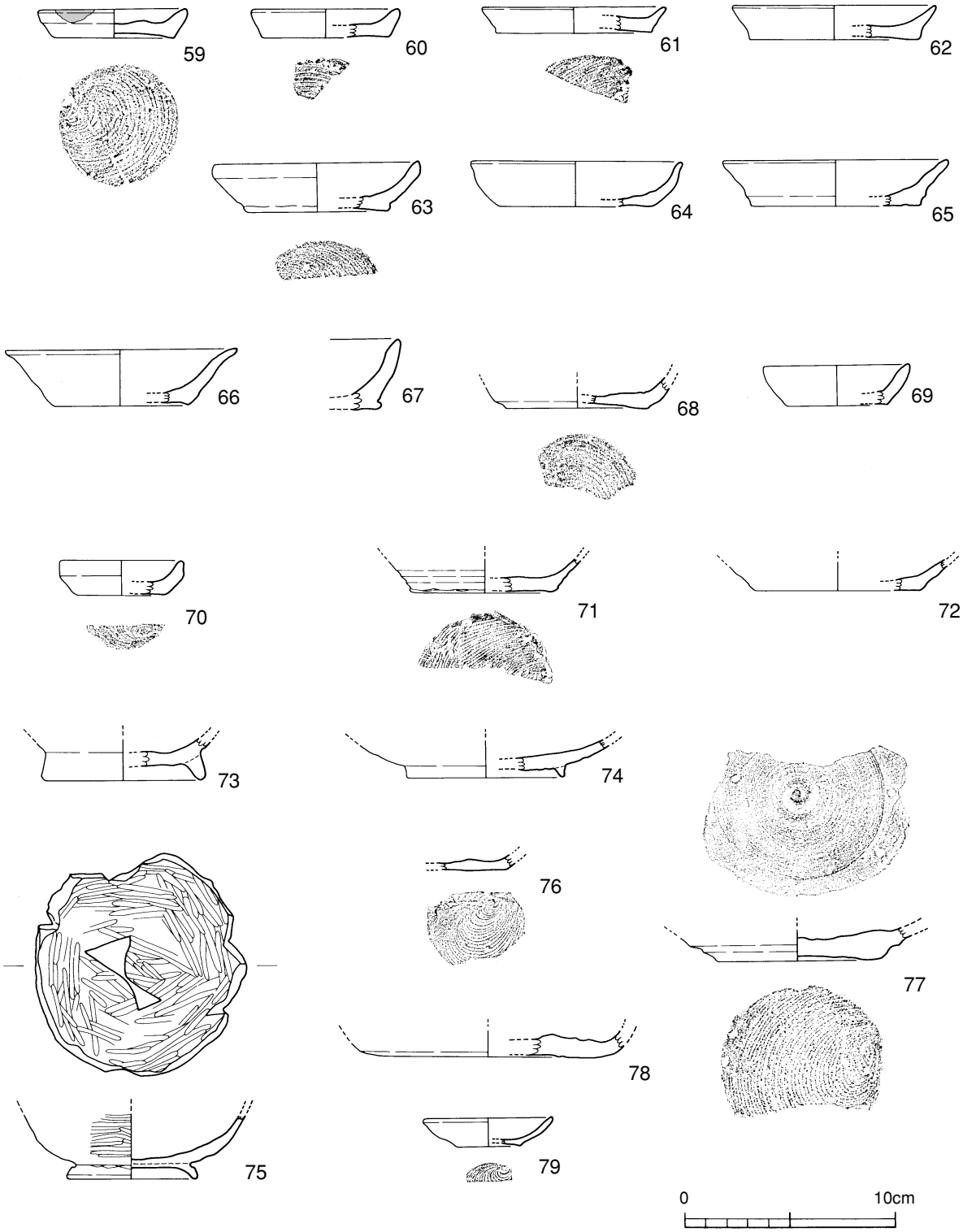
23-88　瓦質土器で火鉢。内外面ともにナデ調整を行う。口唇部下には三条の凸帯を巡らす。凸帯間には一段目が菊花文、二段目が連子状文のスタンプを押す。

23-89　瓦質土器で火鉢。内外面はナデ調整を行う。口縁部下には一条の凸帯を巡らし、菊花文のスタンプを連続して押す。外面の一部に赤色顔料が付着する。

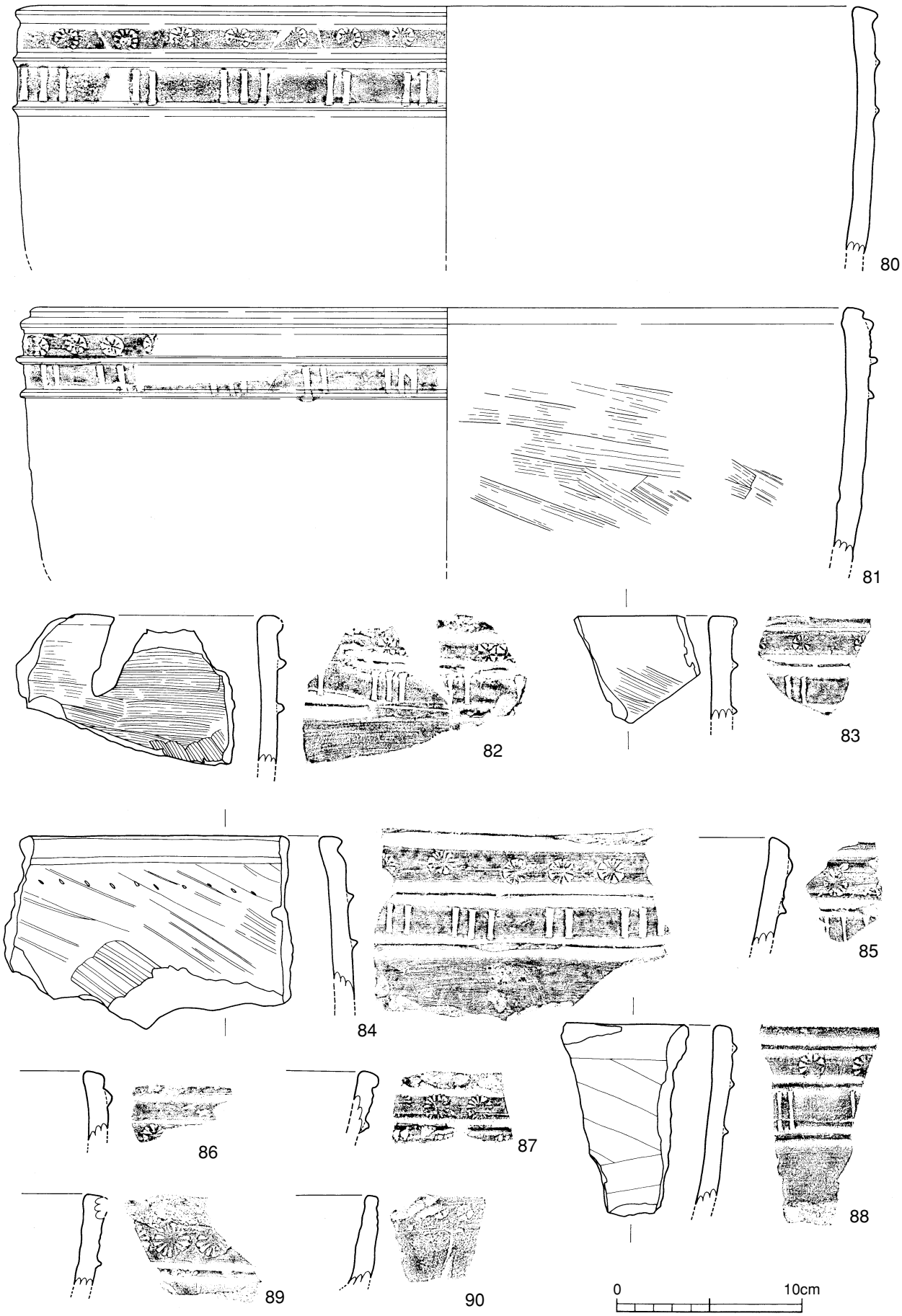
23-90　瓦質土器で器高4.9㎝程の火鉢。胴部上位に一条の沈線を巡らす。口唇部と沈線間に菊花文のスタンプを押す。内外面ともにナデ調整を行う。

24-91　瓦質土器で火鉢。外面はナデ調整で、内面はハケ目調整を行う。指頭圧痕が残る。口縁部は肥厚し、口縁部下に二条の凸帯を巡らす。口唇部下と凸帯間には斜格子文を連続して押す。

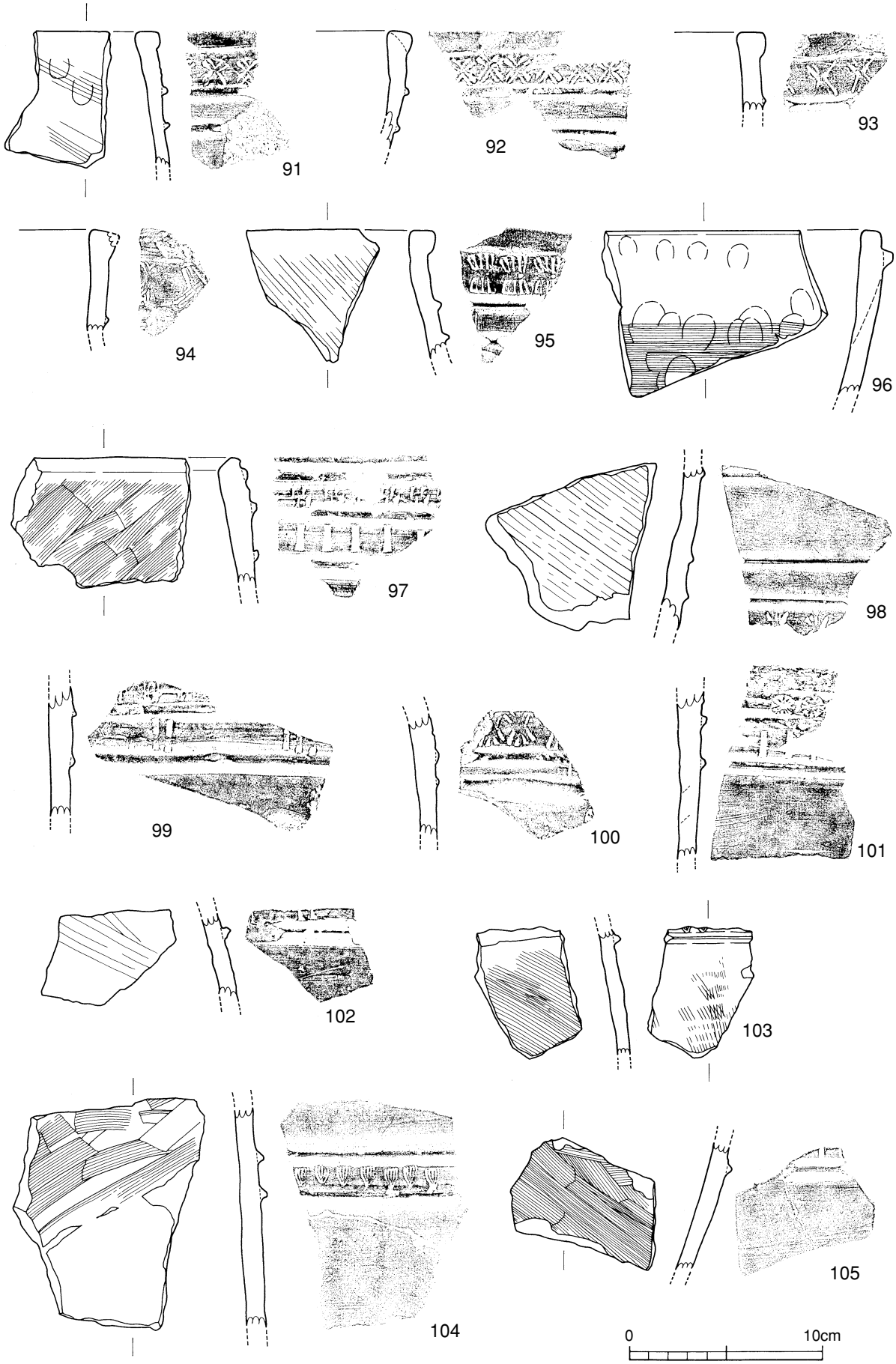
24-92　瓦質土器で火鉢。内外面ともにナデ調整を行い、口縁部は肥厚する。口縁部下には二条の凸帯



第22図　出土遺物実測図　4



第23図　出土遺物実測図　5



第24図　出土遺物実測図　6

を巡らす。凸帯には斜格子文のスタンプを連続して押す。

24-93　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚する。口唇部下に一条の凸帯を巡らし、斜格子文のスタンプを連続して押す。内外面ともにナデ調整を行う。

24-94　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚する。口唇部下に一条の凸帯を巡らし、斜格子文のスタンプを連続して押す。内外面は丁寧なナデ調整を行う。

24-95　瓦質土器で火鉢。外面はナデ調整を行い、内面は斜め方向のハケ目調整を行う。口縁部は肥厚し、口縁部下には二条の凸帯を巡らす。凸帯間には、スタンプを連続して押す。

24-96　瓦質土器で火鉢。口縁部下に一条の凸帯を巡らす。外面は丁寧な横方向へのナデ調整を行う。内面はハケ目調整を行う。指頭圧痕が残る。

24-97　瓦質土器で火鉢。内面はハケ目調整を行う。口縁部下には三条の凸帯を巡らす。凸帯間には一段目が楔状文、二段目が連子状文のスタンプを連続して押す。

24-98　瓦質土器で火鉢の胴部。外面に三条の凸帯を巡らす。三段目下には楔状文のスタンプを押す。外面は丁寧なナデ調整を行う。内面は櫛状工具による斜め方向のハケ目調整を行う。

24-99　瓦質土器で火鉢の胴部。二条の凸帯を巡らす。一段目上と凸帯間にそれぞれ連子状文のスタンプを押す。内外面共に丁寧なナデ調整を行う。

24-100　瓦質土器で火鉢の胴部。外面に二条の凸帯を巡らす。一段目上に斜格子状文を連続して押し、凸帯間には連子状文のスタンプを押す。内外面ともナデ調整を行う。

24-101　瓦質土器で火鉢の胴部。二条の凸帯を施し、一段目上には菊花文、凸帯間には連子状文を連続して押す。内外面ともに丁寧なナデ調整を行う。

24-102　瓦質土器で火鉢の胴部。一条の凸帯を巡らし、凸帯上位には連子状文のスタンプを押す。外面は丁寧なナデ調整を行う。内面はハケ目調整の後、一部をナデ消す。

24-103　瓦質土器で火鉢の胴部。一条の凸帯を施し、その上位にスタンプを押す。外面はハケ目調整の後、ナデ消す。内面はハケ目調整を行う。

24-104　瓦質土器で火鉢の胴部。二条の凸帯を巡らし、凸帯間にはスタンプを連続して押す。外面は丁寧なナデ調整、内面はハケ目調整を行う。

24-105　瓦質土器で火鉢の胴部。一条の凸帯を巡らし、その上位に連子状文のスタンプを押す。外面は丁寧なナデ調整を行う。内面はハケ目調整を行う。

25-106　瓦質土器で火鉢の胴部。二条の凸帯を巡らし、凸帯間には草花文のスタンプを連続して押す。外面は縦方向のハケ目調整の後ナデ消す。内面はハケ目調整を行う。

25-107　瓦質土器で火鉢の胴部。外面に二条の凸帯を巡らす。内外面共にハケ目調整を行う。

25-108　瓦質土器で火鉢又は鉢の胴部。胴部上位は大きく内湾し、櫛状工具による二条の凹線を施す。凹線間には斜格子状文を連続して押す。外面は丁寧なナデ調整を行い、内面はハケ目調整を行う。内面の一部に指頭圧痕が残る。

25-109　瓦質土器で火鉢の底部。胴部下位に一条の凸帯を施す。内外面共にナデ調整を行い、内面には一部、指頭圧痕が残る。脚部は欠損しているが、剥離痕が残る。

25-110　瓦質土器で火鉢の底部。内外面の胴部はハケ目調整を行い、底部内面はナデ調整を行う。脚部は欠損しているが、剥離痕が残る。

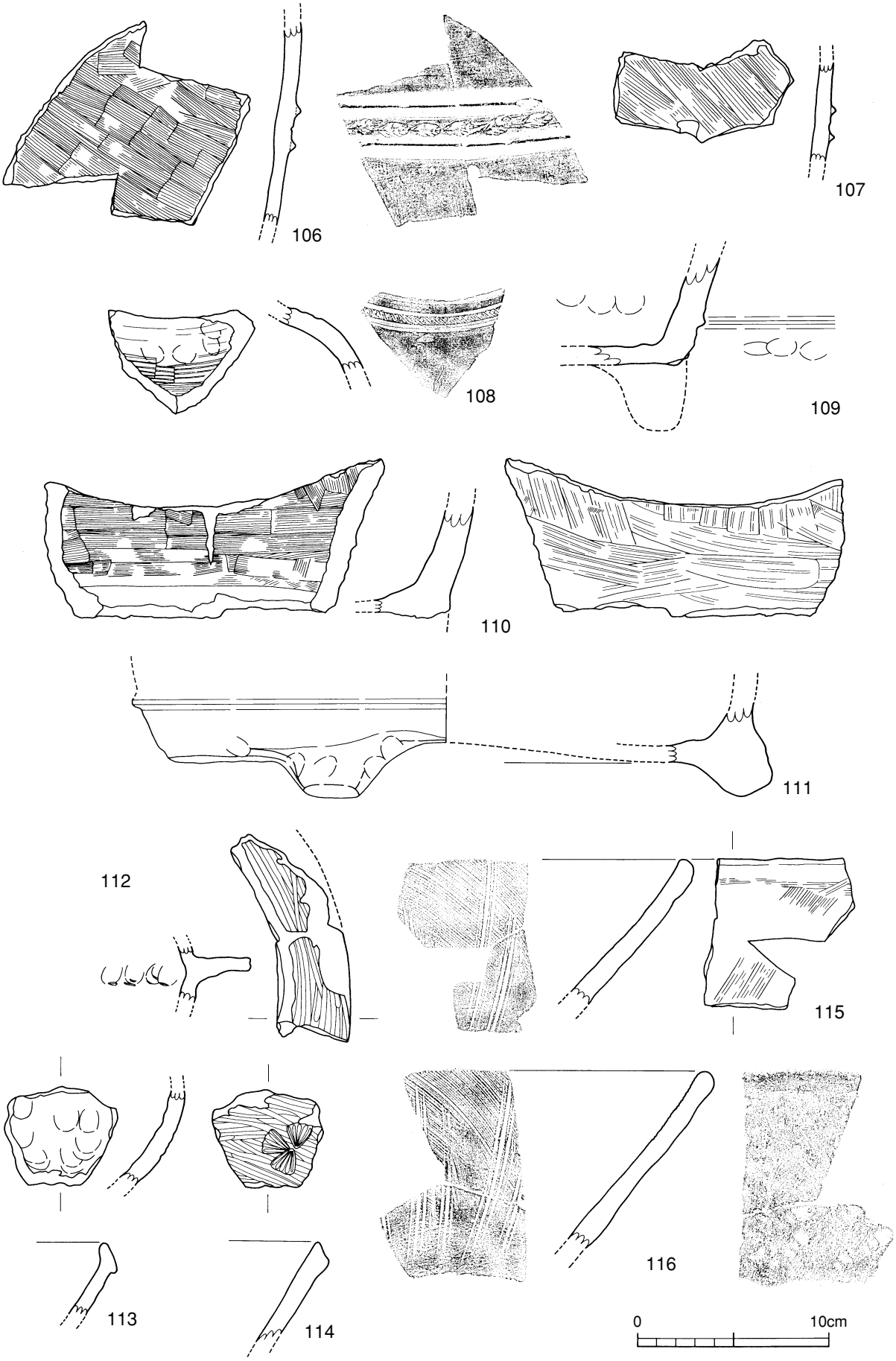
25-111　瓦質土器で火鉢の底部。復元底径34.4㎝。外面に一条の凸帯を施す。外面は粗い削りの後、ナデ調整を行う。脚部は外に張り出し、脚部周辺には指頭圧痕が残る。内部はナデ調整を行う。

25-112　瓦質土器で茶釜の胴部。体部外面の鍔より上位はナデ調整後、丁寧なヘラ磨きを行う。体部外面には、花文状のスタンプを押す。内面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。外面の鍔より下位には、カーボンが付着する。

25-113　須恵質土器で東播系の捏鉢。体部内外面共に回転ナデ調整を行う。口縁部は肥厚する。

25-114　瓦質土器で捏鉢。外面はナデ調整を行う。内面は使用による磨耗が著しく調整は不明。

25-115　須恵質土器で在地系の擂鉢。外面はハケ目調整後、ナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は回転ナデ調整を行う。内面はハケ目調



第25図　出土遺物実測図　7

整後、櫛状工具による８本単位のすり目を施す。

25-116　須恵質土器で在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。内面はハケ目調整後、櫛状工具による７本単位のすり目を施す。すり目の一部は使用により磨耗している。

26-117　須恵質土器で在地系の擂鉢。外面は粗いナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部は回転ナデ調整を行う。口縁部はやや肥厚し、「Ｔ」字型を呈する。内面は、回転ナデ調整後、櫛状工具による８本単位のすり目を施す。

26-118　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面は粗いナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は回転ナデ調整を行い、口唇部は「Ｕ」字型を呈する。口縁部の一部には、片口状に押し出したと思われる指頭圧痕が残る。内面は回転ナデ調整後、櫛状工具による８本単位のすり目を施す。

26-119　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は回転ナデ調整を行う。口唇部上は「Ｕ」字型を呈する。内面は回転ナデ調整後、櫛状工具による７本単位のすり目を施す。

26-120　瓦質土器で在地系の擂鉢。内外面全体的に粗いナデ調整を行い、口縁部付近は、回転ナデによる調整を行う。内面には櫛状工具による８本単位のすり目を施す。口縁部の一部に指頭圧痕が残る。胎土に砂粒がやや多い。

26-121　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は回転ナデ調整を行う。内面は回転ナデ調整後、櫛状工具による６本単位以上のすり目を施す。

26-122　須恵質土器で在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は回転ナデ調整を行う。内面はハケ目調整後、櫛状工具による７本単位のすり目を施す。

26-123　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面は粗いナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は回転ナデ調整を行う。内面は回転ナデ調整後、櫛状工具による５～６本単位のすり目を施す。

26-124　瓦質土器で在地系の擂鉢。体部はやや丸みを帯び、口縁部も丸みを帯びる。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は回転ナデ調整を行う。内面は、回転ナデ調整後、櫛状工具による６本単位のすり目を施す。

26-125　瓦質土器で在地系擂鉢。外面はナデ調整を行い、口縁部付近は横ナデを行う。内面はハケ目調整後、櫛状工具による７本単位のすり目を２方向から施す。

26-126　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部は横ナデ調整。口縁部の一部に片口と思われる箇所が見られる。内面はハケ目調整後、櫛状工具による６本単位のすり目を２方向から施す。

26-127　瓦質土器で在地系擂鉢の底部。外面はハケ目調整をした後、ナデ調整を行う。内面はハケ目調整後、櫛状工具による９本単位のすり目を２方向から施す。

26-128　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行い、内面はハケ目調整後、櫛状工具による７本単位のすり目を施す。

26-129　瓦質土器で在地系の擂鉢。内外面ともハケ目調整をした後、ナデ調整を行う。内面には櫛状工具による６本単位のすり目を施す。

27-130　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。内面は回転ナデ調整を行い、櫛状工具による７本単位のすり目を施す。

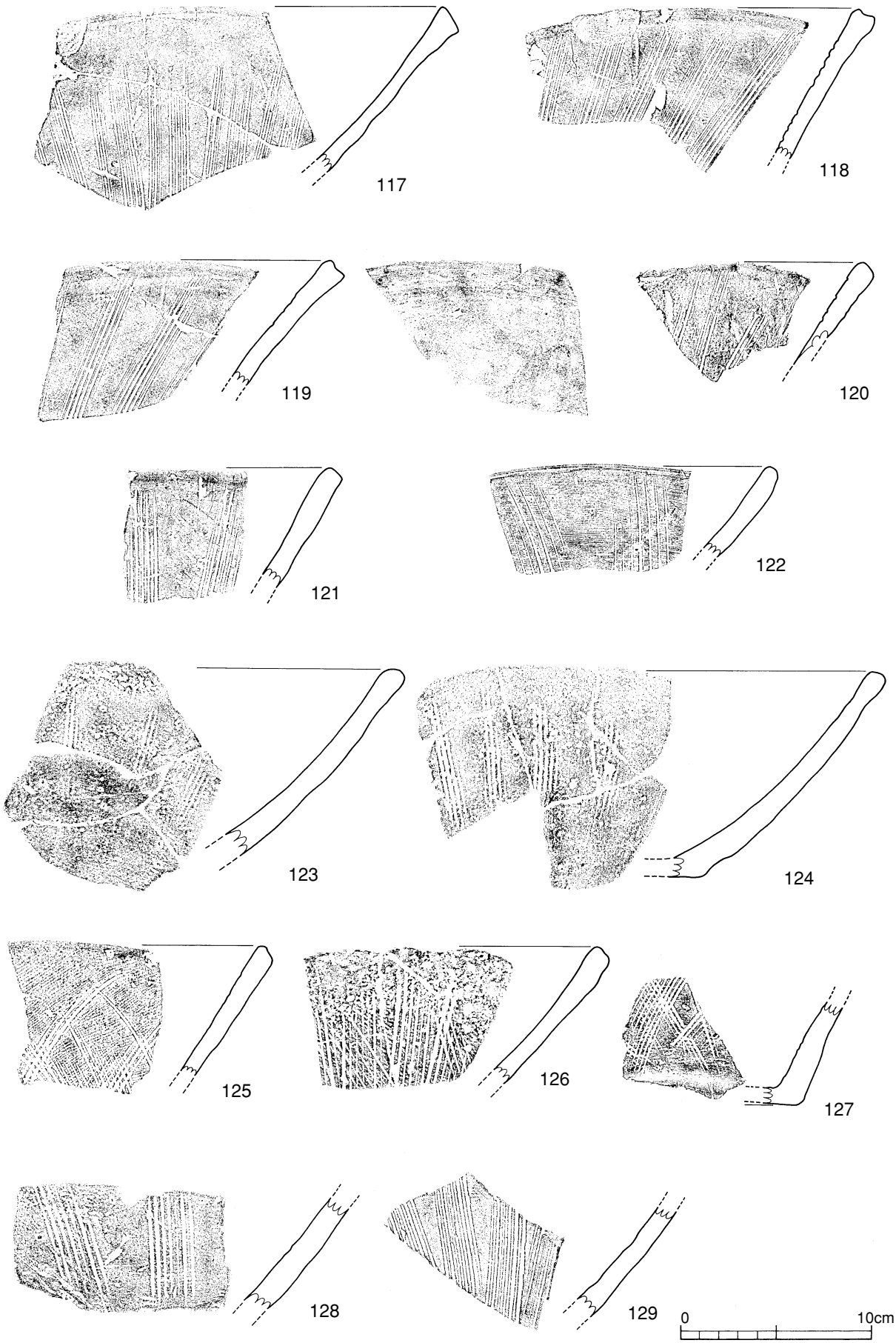
27-131　瓦質土器で在地系の擂鉢。内外面ともにナデ調整を行い、外面の一部には指頭圧痕が残る。内面には櫛状工具による８本単位のすり目を施す。

27-132　在地系の擂鉢。外面はナデ調整を行う。内面はハケ目調整後、櫛状工具による10本単位のすり目を施す。胎土は灰色で比較的粗く、頁状に焼き上がる。

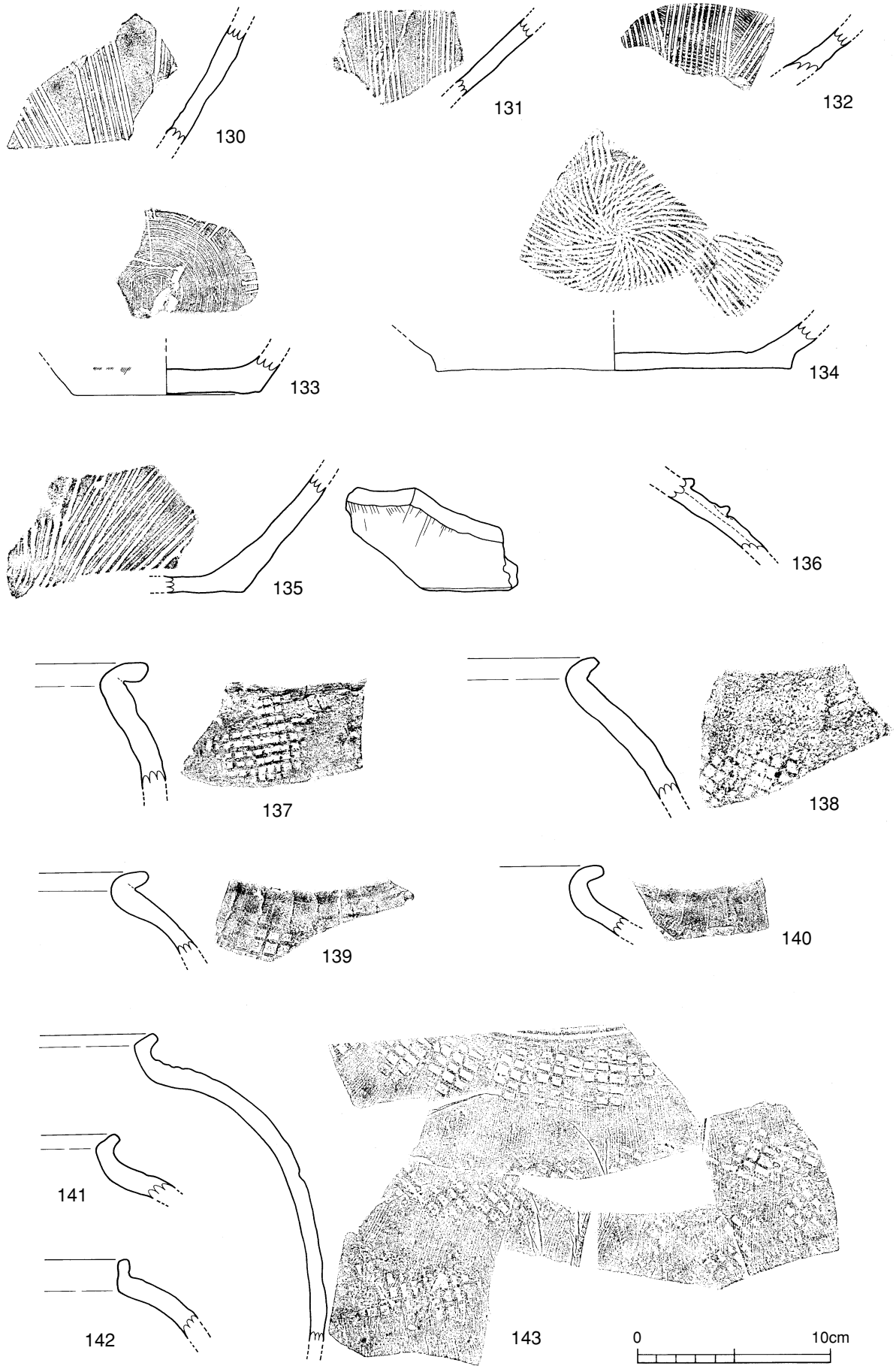
27-133　瓦質土器で在地系の擂鉢。復元底径10.0㎝。外面はハケ目調整後ナデ消す。内面見込み部分は、同心円状にハケ目調整を行う。見込み付近より体部上位にかけて櫛状工具による５本単位のすり目を施す。

27-134　須恵質土器で在地系の擂鉢。復元底径18.6㎝。底部内面は８本単位のすり目を放射線状に施す。

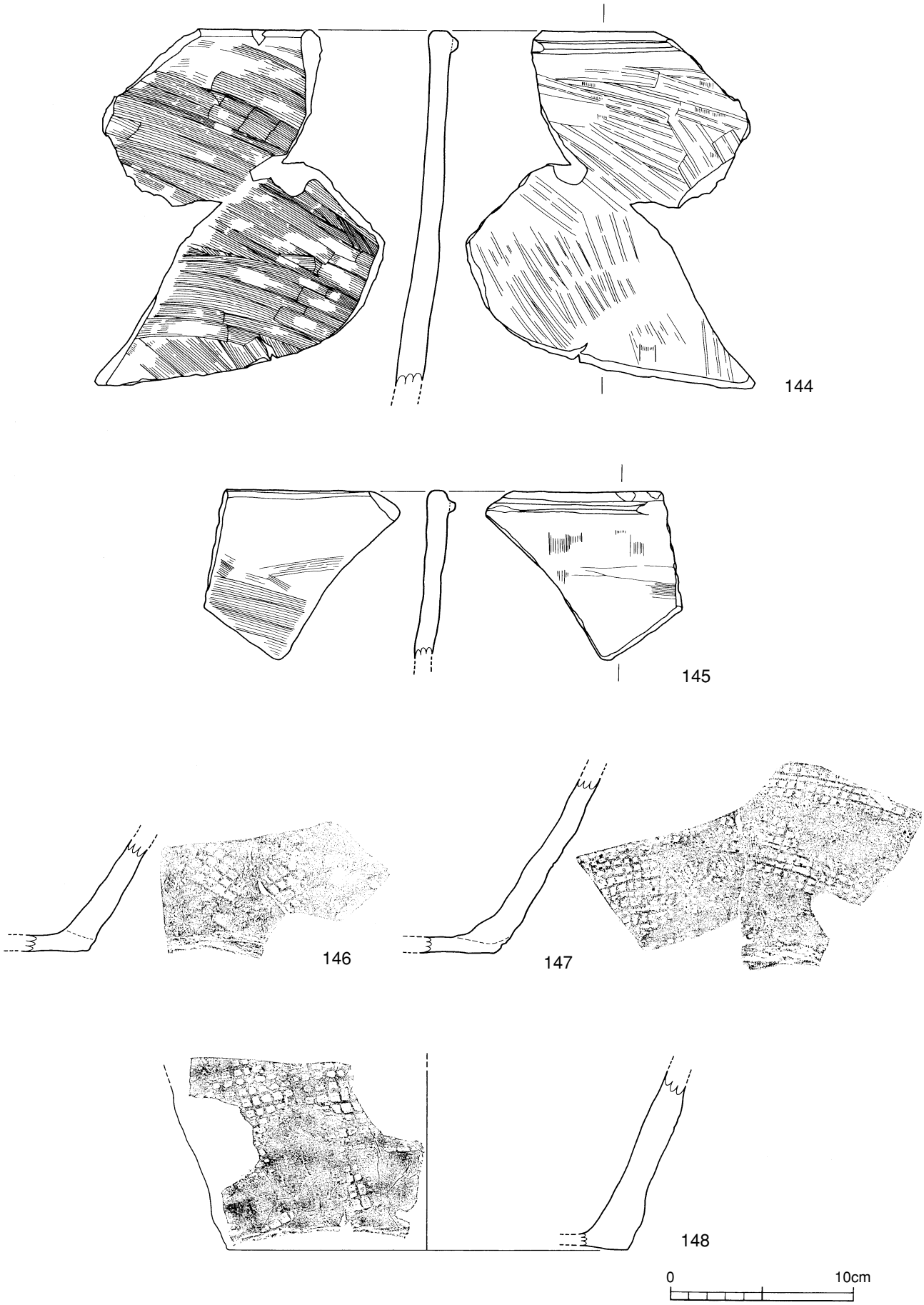
27-135　瓦質土器で在地系の擂鉢。外面はハケ目調



第26図　出土遺物実測図　8



第27図　出土遺物実測図　9



第28図　出土遺物実測図　10

整をした後、ナデ調整を行う。内面はハケ目調整後、櫛状工具による６本単位のすり目を施す。

27-136　瓦質土器で甕。二条の凸帯を施す。内外面共にナデ調整を行う。内面全体にカーボンが付着する。

27-137　須恵質土器で在地系甕の口縁部。外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。部分的に格子目が残る。内面は横方向のナデ調整を行う。口唇部は短く屈曲し、横方向のナデ調整を行う。

27-138　須恵質土器で在地系の甕。外面体部は格子目叩き後、ナデ調整を行う。部分的に格子目が残るが、磨滅が著しい。口唇部は短く斜めに屈曲し、横方向のナデ調整を行う。頸部付近は縦方向にヘラ削り調整を施す。

27-139　須恵質土器で在地系甕の口縁部。外面体部は格子目叩きを施し、内面はナデ調整を行う。口唇部は短く屈曲し、横方向のナデ調整を行う。頸部付近はやや肥厚し、外面は縦方向のヘラ削り調整を行う。

27-140　須恵質土器で在地系の甕。外面体部は格子目叩きを施し、内面は横方向のナデ調整を行う。口唇部は緩やかに屈曲し横ナデ調整を行う。頸部付近は縦方向のヘラ削り調整を施す。胎土は灰色で、砂粒が少ない。

27-141　須恵質土器で在地系の甕。外面は格子目叩きを施し、内面は横方向のナデ調整を行う。口縁部は緩やかに短く屈曲し、ナデ調整を行う。

27-142　須恵質土器で壺の口縁部。内外面はナデ調整を行う。口唇部は短く直立に立ち上がる。

27-143　須恵質土器で在地系の壺。外面体部は格子目叩き後、縦方向へのハケ目調整を行う。内面は横方向のハケ目調整を行う。口縁部は屈曲後、頸部付近は箆状工具による調整を行う。口唇部付近は回転ナデ調整を行う。

28-144　瓦質土器で甕又は鉢の口縁部。口縁部に一条の凸帯を巡らす。内外面ともにハケ目調整を行う。内外面の一部にカーボンが付着する。

28-145　須恵質土器で鉢の口縁部。外面は、縦方向のハケ目調整を行い、一部をナデ消し部分的に格子目が残る。内面は、ハケ目とナデによる調整を行う。口唇部に凸帯を一条巡らす。

28-146　須恵質土器で在地系の甕。１号堀下層及び３号堀上層より出土。外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。内面は横方向のナデ調整を行う。

28-147　須恵質土器で在地系の甕。体部外面は、格子目叩き後、ナデ調整を行う。部分的に格子目が残る。内面は削り後、ナデ調整を行う。胎土はにぶい褐色。胴部は、ゆるやかに開きながら立ち上がる。

28-148　須恵質土器で在地系の甕の底部。復元底径22.0㎝。体部外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。部分的に格子目が残る。内面はナデ調整。底部外面には板目圧痕が残る。胎土は灰色で頁状に焼き上がる。叩き締めが粗雑なため、焼成段階で体部外面が破損している。

29-149　須恵質土器で在地系の甕。１号堀及び道路状遺構第２面上層より出土。復元底径24.4㎝で、底部からほぼ直立に立ち上がる。体部外面は、格子目叩き後、ナデ調整を行う。部分的に格子目が残る。内面はナデ調整を行う。胎土は灰褐色。

29-150　須恵質土器で在地系の甕。復元底径19.8㎝。体部外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。内面はナデ調整を行う。底部外面には板目圧痕が残る。胎土は灰色。

29-151　須恵質土器で在地系の甕。外面は格子叩き後、ナデ調整を行う。部分的に格子目が残る。内面は横方向のハケ目調整を行う。

29-152　須恵質土器で在地系の甕。外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。部分的に格子目が残る。内面は削り調整後、ナデ調整を行う。

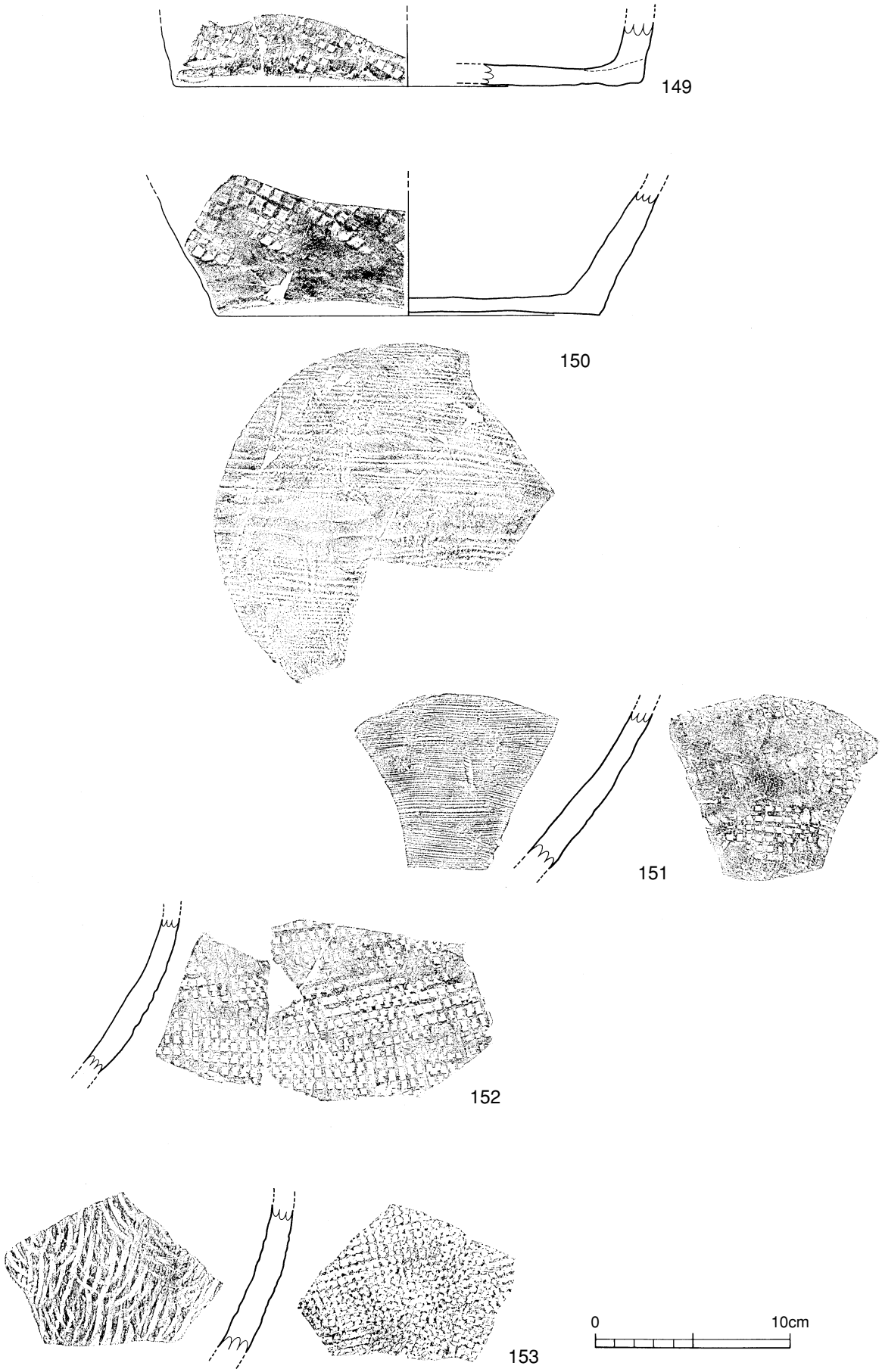
29-153　須恵質土器で在地系甕の胴部。外面は細かい格子目叩きを行い、内面には青海波文の当て具痕が残る。

【２号堀】

２号堀は、３号堀によって切られているため、２号堀の床面で出土した遺物をここでは取り上げる。

30-154　常滑窯系の甕。外面は格子目叩き及びナデ調整を行う。内面はナデ調整を行う。外面には自然釉がかかる。

30-155　須恵質土器で甕。外面は格子目叩き後、ナ



第29図　出土遺物実測図　11

デ調整を行う。部分的に格子目が残る。内面はハケ目調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。

30-156　瓦質土器で火鉢。二条の凸帯を巡らし、凸帯間には菊花文、凸帯下には連子状文のスタンプを押す。

【３号堀】

30-157　白磁碗の口縁部。復元口径17.4㎝。内外面とも回転ナデを行う。体部はやや丸みを帯び、口縁部はやや外反する。外面体部下位は一部無釉。細かい貫入を伴う。

30-158　白磁坏。復元口径10.6㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。内面はナデ調整。

30-159　土師質土器で坏。器高2.5㎝。内外面ともにナデ調整。底部は回転糸きり。

30-160　常滑窯系の甕。体部内外面ともにナデ調整を行う。口縁部は肥厚し、「N」字状を呈する。胎土は暗赤灰色で、頁状に焼き上がる。

30-161　瓦質土器で風炉。３号堀及び２号堀上層より出土。復元口径39.6㎝。内外面ともに丁寧なナデ調整を行う。口縁部には受け部がある。頸部には連子状文のスタンプを連続して押す。胴部には２条の凸帯を巡らし、凸帯間には斜格子文状のスタンプを連続して押す。胴部には風穴を開けているが、その形状は不明。

【道路状遺構】

30-162　青磁碗で底部の一部。道路状遺構第１面より出土。復元口径6.1㎝。透明な釉で貫入を伴う。高台高は0.9㎝と低く角高台で、畳付けから高台内面は釉を掻きとる。

30-163　青磁碗で底部の一部。道路状遺構第１面より出土。見込みにはスタンプを押す。高台内面は釉を掻きとる。貫入を伴う。

30-164　青磁盤で底部の一部。道路状遺構第１面より出土。見込みにはスタンプを押し、周辺には沈線を施す。高台内面は削りだしで、釉は高台内面までややかかる。貫入を伴う。

30-165　青磁碗で底部の一部。道路状遺構第２面上層より出土。見込みには鹿の動物文と「福」のスタンプを押す。高台内面は環状に釉を掻きとる。

30-166　青磁皿で菊花皿底部の一部。道路状遺構第１面より出土。復元底径5.2㎝。外面は回転ナデ調整後、ヘラの片彫りによる施文。内面は型起こし。

30-167　青磁碗の口縁部。道路状遺構第２面上層より出土。外面口縁部付近にヘラの片彫りによる施文。

31-168　備前窯系の壺の口縁部。道路状遺構第２面上層より出土。口縁部は玉縁状に肥厚する。

31-169　常滑窯系と思われる胴部の一部。道路状遺構第２面上層より出土。内外面ともにナデ調整を行う。

31-170　瓦質土器で火鉢の口縁部。道路状遺構第１面より出土。口縁部はやや肥厚し、口縁部下には二条の凸帯を巡らす。口縁部と凸帯間にはスタンプを連続して押す。内面はハケ目調整を行う。

31-171　瓦質土器で火鉢。道路状遺構第２面上層より出土。内外面ともにハケ目調整の後、一部をナデ消す。口唇部下に三条の凸帯を巡らす。凸帯間には一段目が菊花文、二段目が連子状文のスタンプを連続して押す。１号堀出土の23-81と同一個体もしくは同タイプと思われる。

31-172　瓦質土器で火鉢又は鉢の口縁部。道路状遺構第１面より出土。口縁部に一条の凸帯を巡らす。内外面ともにナデ調整を行う。

31-173　瓦質土器で擂鉢。道路状遺構第２面上層より出土。内面は、ナデ調整後、櫛状工具による８本単位のすり目を施す。

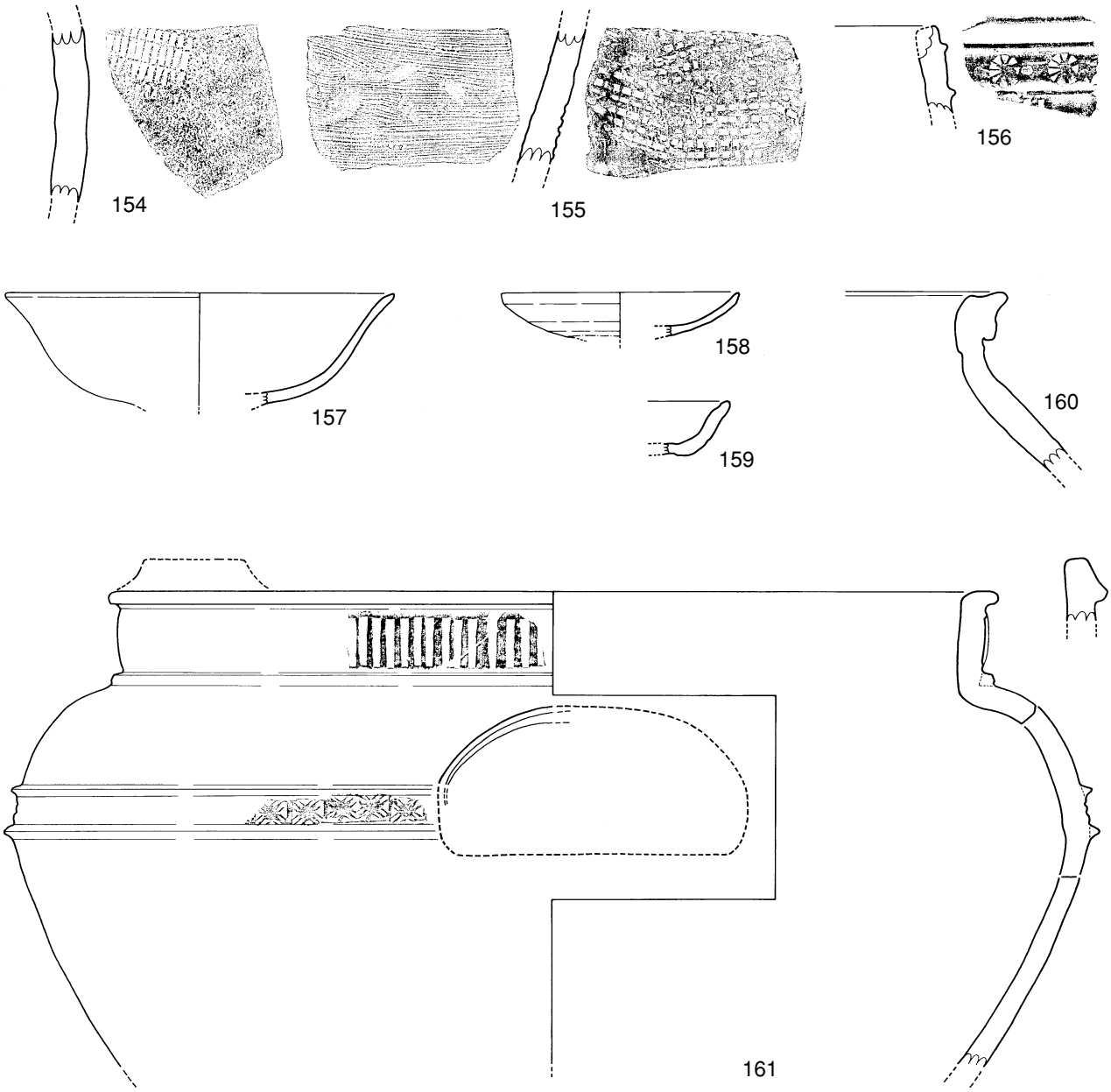
31-174　瓦質土器で擂鉢。道路状遺構第２面及びⅡ区より出土。復元底径14.2㎝。内面は櫛状工具による８本単位のすり目を施す。使用による磨耗が激しい。

31-175　瓦質土器で甕又は鉢の底部。道路状遺構第２面及び１号堀より出土。外面は縦方向のハケ目調整後、ナデ調整。内面は横方向のハケ目調整とナデ調整を行う。

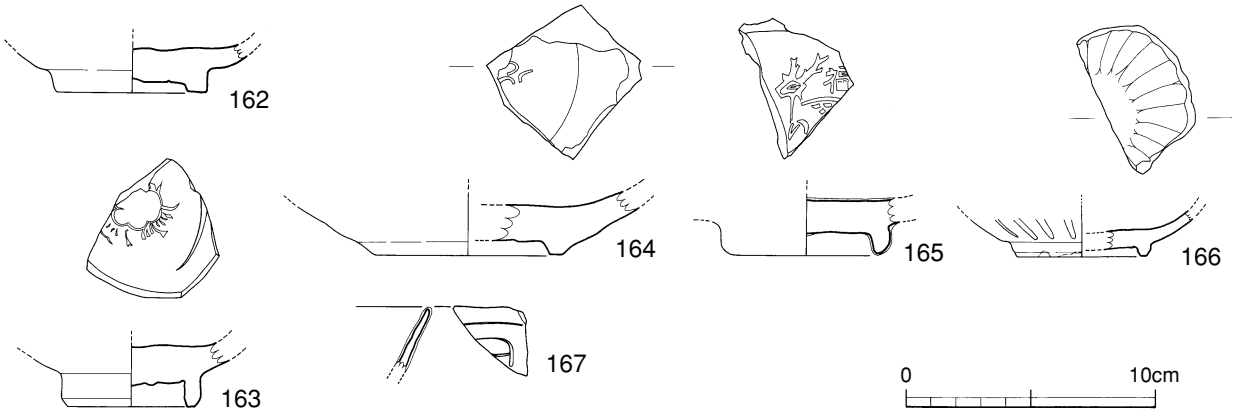
31-176　須恵質土器で壺又は甕の底部。道路状遺構第２面より出土。外面は菱形の叩き調整を行う。内面はナデ調整。胎土は灰色で頁状に焼き上がる。

31-177　瓦質土器で鉢の底部。道路状遺構第２面より出土。

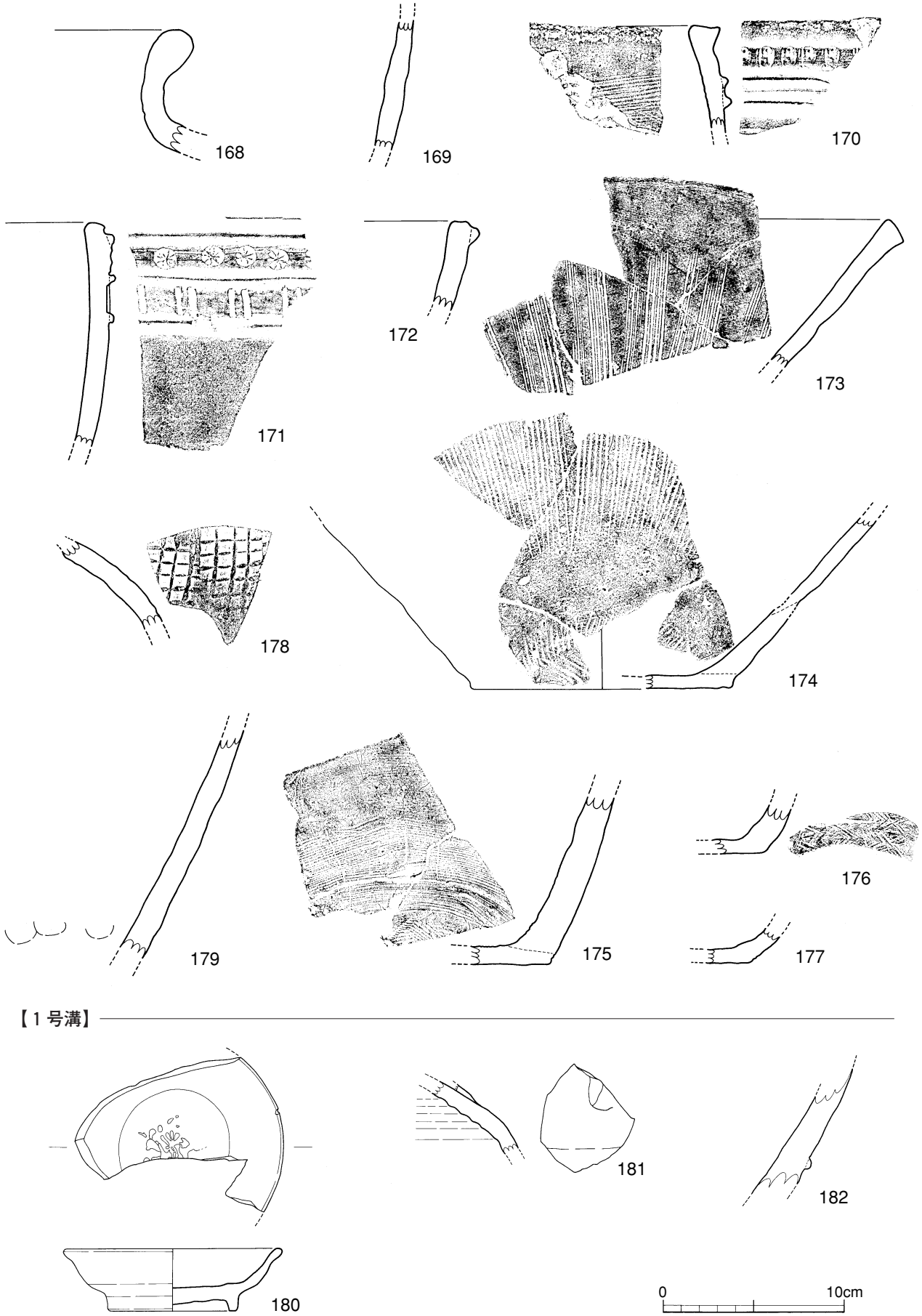
【2号・3号堀】



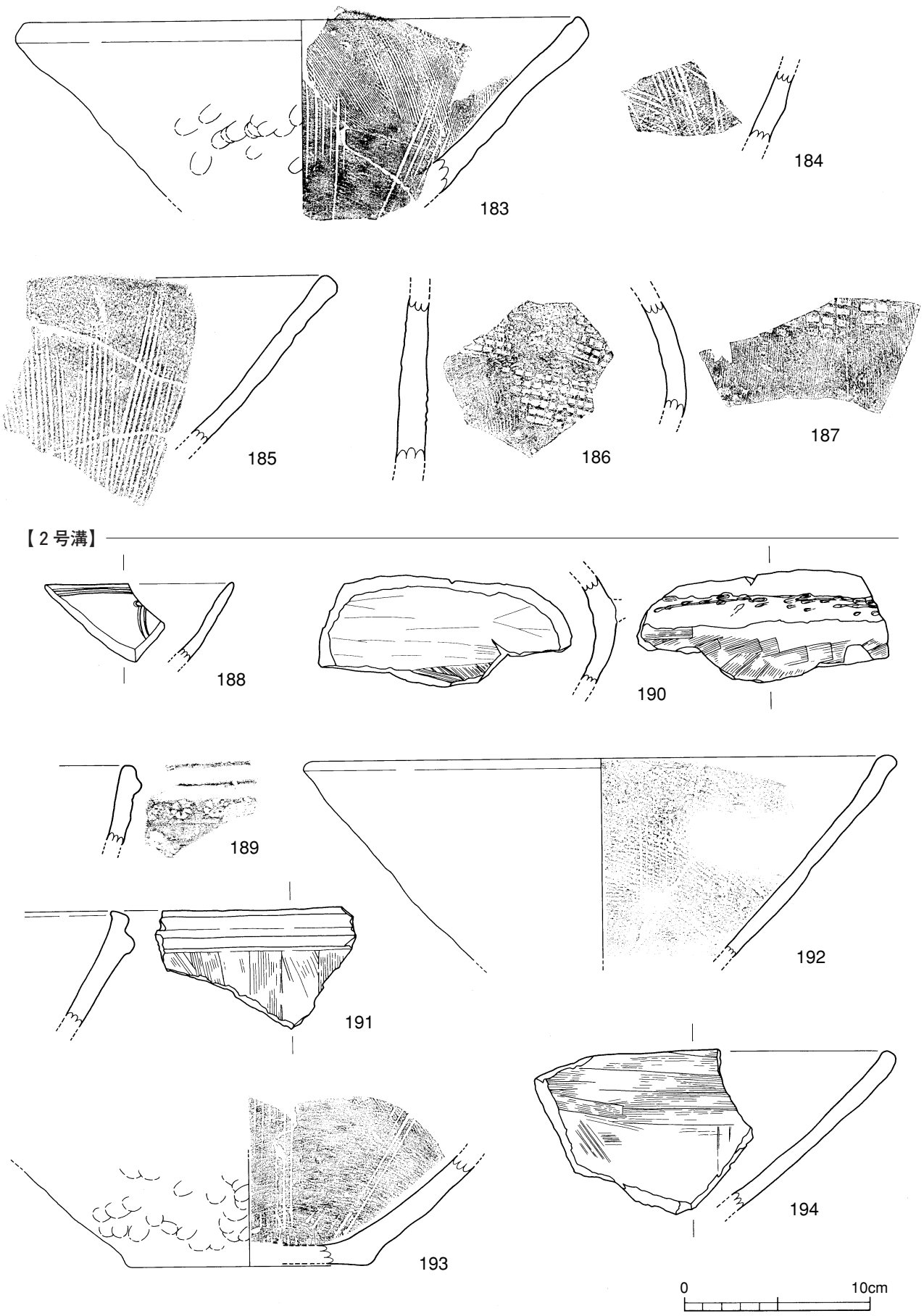
【道路状遺構】



第30図　出土遺物実測図　12



第31図　出土遺物実測図　13



第32図　出土遺物実測図　14

31-178　須恵質土器で甕の胴部。道路状遺構第２面より出土。外面は大きめの格子目叩きを行う。

31-179　瓦質土器で甕の胴部。道路状遺構第２面より出土。内外面ともにナデ調整を行い、内面には指頭圧痕が残る。１号溝出土の31-182と同一個体と思われる。

【１号溝】

31-180　青磁皿。復元口径11.8㎝。口縁部はやや外反する。外面体部は回転ヘラ削りを行う。内面は回転ナデ調整を行う。見込みにはスタンプを押す。畳付けから高台内は無釉。

31-181　白磁四耳壺で肩部の一部。内外面ともに轆轤ナデ調整を行う。内面にも部分的に釉がかかる。耳の一部が残る。

31-182　瓦質土器で火鉢。内外面ともにナデ調整を行う。外面には一条の凸帯を巡らす。道路状遺構第２面出土の31-179と同一個体と思われる。

32-183　瓦質土器で擂鉢。１号溝、２号溝及び11号溝より出土。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部は回転ナデ調整を行う。内面はハケ目調整後、櫛状工具による６本単位のすり目を施す。内面の一部は使用により磨耗している。

32-184　瓦質土器で擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。内面は回転ナデ調整後、櫛状工具による６本単位のすり目を２方向から施す。

32-185　瓦質土器で擂鉢。１号溝及び道路状遺構より出土。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近及び内面は回転ナデ調整を行う。内面には櫛状工具による８本単位のすり目を施す。

32-186　須恵質土器で甕又は壺。外面は格子目叩き後、ハケ目調整を行い、部分的にナデ消す。内面はハケ目調整を行う。32-187と同一個体と思われる。

32-187　須恵質土器で甕又は壺。外面は格子目叩き後、ハケ目調整を行い、部分的にナデ消す。内面はハケ目調整を行う。32-186と同一個体と思われる。

【２号溝】

32-188　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は直口する。外面はヘラ削りによる調整を行う。内面にはヘラの片彫りによる施文を施す。貫入を伴う。

32-189　瓦質土器で火鉢。内外面共にナデ調整を行う。口縁部下には一条の凸帯を巡らし、凸帯下には菊花文のスタンプを連続して押す。口縁部付近の一部にカーボンが付着する。胎土は、にぶい橙で頁状に焼き上がる。

32-190　瓦質土器で茶釜。鍔は剥離して欠損。鍔より上位部分は磨きを施し、鍔より下位は縦方向のハケ目調整を施す。内面は、ハケ目及びナデによる調整を行う。鍔より下位部分全体にカーボンが付着する。

32-191　瓦質土器で鉢。外面口縁部下に一条の凸帯を巡らし、凸帯下は縦方向にハケ目調整を行う。内面はナデ調整を行う。部分的にカーボンが付着する。胎土に砂粒を多く含む。

32-192　瓦質土器で擂鉢。復元口径31.0㎝。外面はナデ調整を行い、口縁部付近は回転ナデ調整を行う。内面はハケ目調整後、櫛状工具による６本単位のすり目を施す。

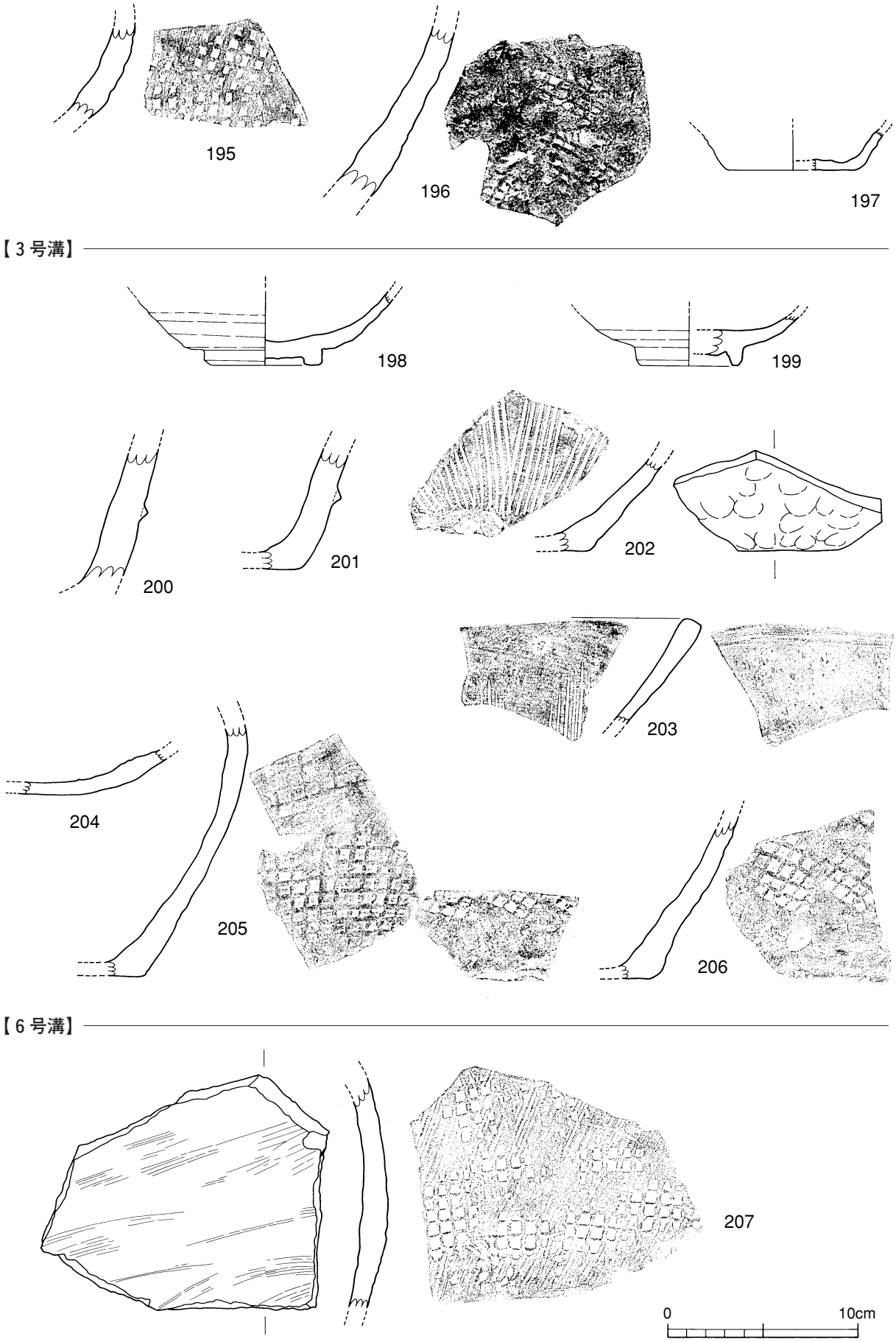
32-193　瓦質土器で擂鉢。復元底径13.0㎝。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。内面はハケ目調整後、櫛状工具による６本単位のすり目を施す。内面は使用による磨耗が著しい。

32-194　瓦質土器で擂鉢。外面は粗いナデ調整を行い、内面はハケ目調整を行う。内面には櫛状工具による４本以上のすり目が施されているが、磨耗が著しい。

33-195　須恵質土器で甕。外面は格子目叩き後、部分的にナデ調整を施す。内面はナデ調整を行う。胎土は灰色で頁状に焼き上がる。

33-196　須恵質土器で甕。外面は格子目叩き後、部分的にナデ調整を施す。内面はナデ調整を行う。

33-197　土師質土器で坏。復元底径6.8㎝。器高2.2㎝。内外面ともに回転ナデを行い、底部は、回転糸きり。



第33図　出土遺物実測図　15

【3号溝】

33-198　青磁碗の底部。復元底径5.9㎝。外面は回転ヘラ削り調整を行い、胴部下位付近まで施釉。内面は回転ナデ調整後、施釉。高台は角高台で、底部は粗い削りだし。

33-199　青磁碗で底部の一部。復元底径5.3㎝。外面は、回転ヘラ削り後施釉。釉は高台外面まで薄くかけられ、細かい貫入を伴う。

33-200　瓦質土器で火鉢の底部。内外面ともに横方向のナデ調整を行う。底部付近に一条の凸帯を巡らす。

33-201　瓦質土器で火鉢の底部。3号溝及び2号溝より出土。内外面ともに横ナデ調整を行う。底部付近に一条の凸帯を巡らす。

33-202　瓦質土器で擂鉢の底部。外面は、粗いナデ調整で指頭圧痕が残る。内面はナデ調整後、櫛状工具による6本単位のすり目を施す。

33-203　瓦質土器で擂鉢の口縁部。内外面ともにナデ調整を行う。外面には指頭圧痕が残る。内面には櫛状工具による6本単位のすり目を施す。

33-204　瓦質土器で釜又は鍋の底部。内外面ともに横ナデ調整を行い、外面底部付近は削り調整を行う。外面全体にカーボンが付着する。

33-205　須恵質土器で甕。外面は大きめの格子目叩き後、ナデ調整を行う。内面はナデ調整を行う。

33-206　須恵質土器で甕の底部。外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。底部付近には指頭圧痕が残る。内面は横ナデ調整を行う。

【6号溝】

33-207　須恵質土器で甕の胴部。外面体部は大きめの格子目叩き後、ハケ目調整を行う。一部ナデ消し、部分的に格子目が残る。内面はハケ目調整。34-208と同一個体の可能性がある。

【7号溝】

34-208　須恵質土器で甕の胴部。外面体部は格子目叩き後、ハケ目調整を行う。一部ナデ消し、部分的に格子目が残る。内面はハケ目による調整の後ナデ調整を行う。33-207と同一個体の可能性がある。

【8号溝】

34-209　青磁碗の底部。復元底径6.2㎝。外面は回転ヘラ削りを行う。高台高は1.6㎝と高く、高台外面を斜めに大きく面取りする。釉は高台内部にまでかかる。高台内面の釉は環状に掻きとる。貫入を伴う。

34-210　須恵質土器で擂鉢。外面は粗いナデ調整を行い、一部に指頭圧痕及びハケ目が残る。内面は櫛状工具による6本単位のすり目を施す。内面にはカーボンが多量に付着する。

34-211　須恵質土器で甕。外面は格子目叩き後、ナデ消す。内面は横方向のハケ目調整を行う。

34-212　土師質土器で坏。復元口径6.8㎝、復元底径5.0㎝、器高1.4㎝。回転ナデ調整を行い、底部は回転糸きり。口縁部にカーボンが付着する。

34-213　土師質土器で坏。復元口径6.6㎝、復元底径5.2㎝、器高1.8㎝。回転ナデ調整を行い、底部は回転糸きり。

34-214　土師質土器で坏。復元口径6.7㎝、復元底径5.8㎝、器高2.0㎝。回転ナデ調整を行い、底部は回転糸きり。口縁部にカーボンが付着する。

34-215　土師質土器で坏。復元口径9.9㎝、復元底径5.8㎝、器高2.0㎝。回転ナデ調整を行い、底部は回転糸きり。

34-216　土師質土器で坏。底部は回転糸きり。

【9号溝】

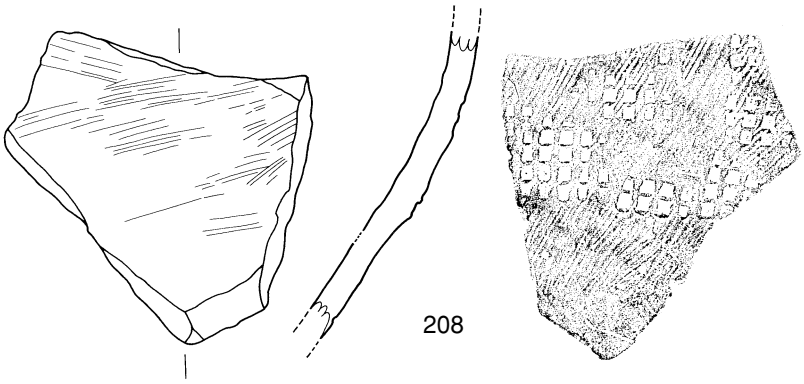
34-217　瓦質土器で火鉢の口縁部。口縁部はやや肥厚し、二条の凸帯を巡らす。一条目の凸帯上には菊花文、凸帯間には連子状文のスタンプを押す。内面はハケ目調整。

34-218　瓦質土器で擂鉢。内外面ともにハケ目調整を行う。内面は櫛状工具による6本単位のすり目を施す。

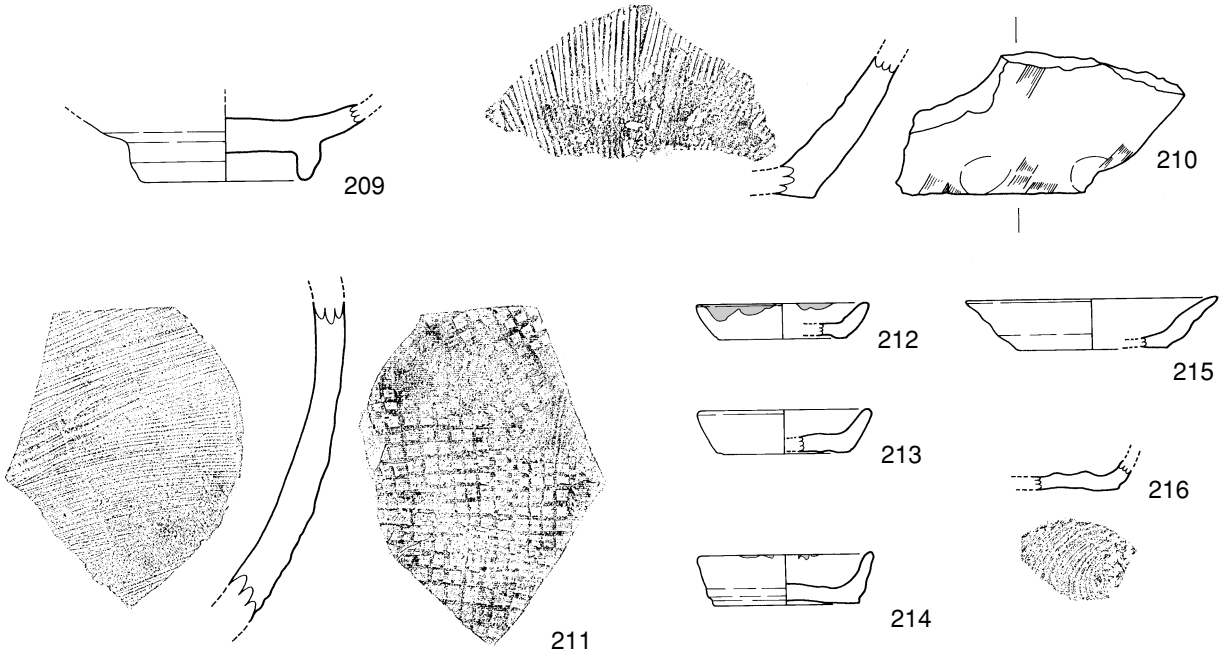
34-219　須恵質土器で甕。外面体部は格子目叩きの後、ハケ目調整と部分的にナデ消しを行う。内面は多方向のハケ目調整を行う。

34-220　須恵質土器で壺。口唇部は短く屈曲し、ナデ調整を行う。外面は山型の叩き調整を行う。内面は横方向のハケ目調整を行う。

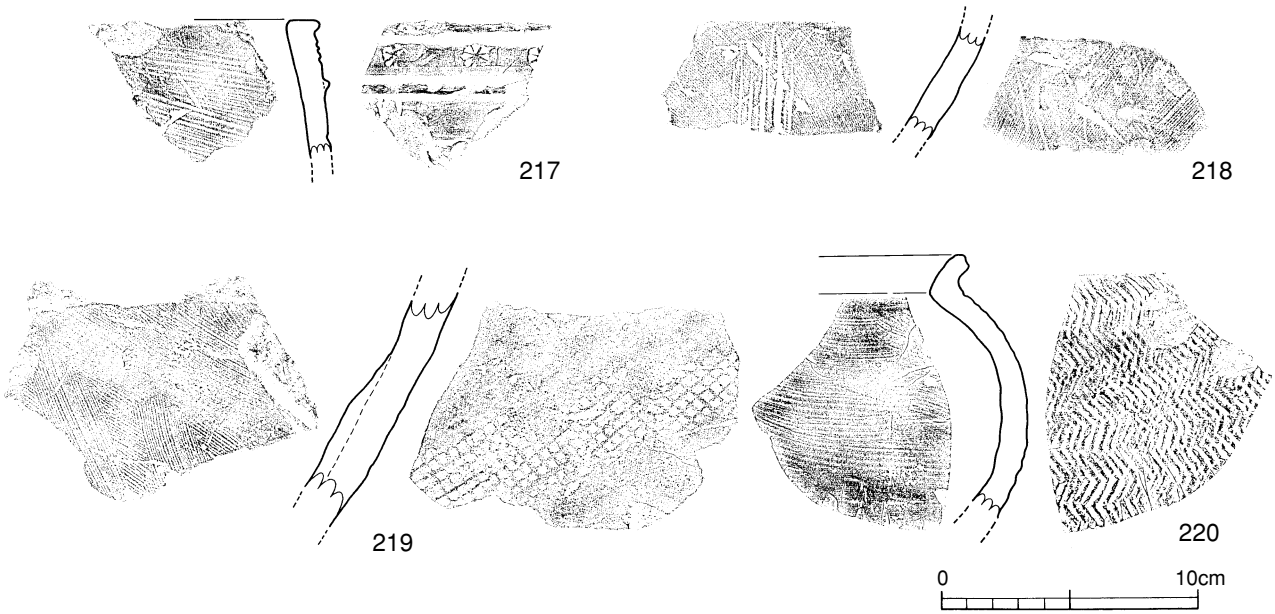
【7号溝】



【8号溝】



【9号溝】



第34図　出土遺物実測図　16

【11号溝】

35-221　青磁碗で底部の一部。復元底径6.0㎝。見込みには草花文状のスタンプを押す。高台内面は無釉で削りだし。

35-222　青磁碗又は坏で底部の一部。外面は回転ヘラ削りを行い、内面見込みには草花文状のスタンプを押す。高台高は0.5㎝と低く、畳付けから高台内面は無釉。貫入を伴う。

35-223　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は大きく外反する。内外面ともに回転ナデを行う。貫入が伴う。

35-224　青磁で香炉の底部と思われる。復元底径5.4㎝。高台高0.5㎝。外面はヘラ削りを行い、体部底部は無釉。内面は施釉後、見込み部分を環状に釉を掻きとる。

35-225　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は、やや玉縁状に肥厚する。内外面ともに回転ナデで、貫入を伴う。

35-226　白磁坏で口縁部の一部。口縁部はやや外反する。外面はヘラ削り、内面はナデ調整を行う。胎土は褐色。貫入を伴う。

35-227　青白磁で合子の蓋の一部。外面は、型起こしによる草花文。内面は無釉。外面端部は釉を掻きとる。

35-228　青磁盤で口縁部の一部。口縁部は肥厚し、上方に引き上げる。外面は回転ヘラ削り。内面は、幅の広い櫛状工具で縦方向に施文。

35-229　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は細く、直口する。外面は回転ヘラ削りを行い、ヘラ描きによる鎬連弁を施す。

35-230　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は直口する。外面は回転ヘラ削りを行い、ヘラ描きによる連弁を象る。

35-231　瓦質土器で火鉢。３条の凸帯を巡らし、凸帯間には、それぞれスタンプを連続して押す。内面はハケ目調整を行う。

35-232・233　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、横ナデ調整を行う。二条の凸帯を巡らし、凸帯間にはそれぞれスタンプを連続して押す。

35-234　瓦質土器で茶釜又は壺の一部と思われる。外面は丁寧なミガキを行う。内面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。

35-235　瓦質土器で茶釜。体部中位に鍔を巡らすが、欠損している。外面はナデ調整後、鍔より上位は、丁寧なミガキ調整を行う。耳部を貼り付け、その付近には菊花文のスタンプを押す。鍔より下位にはカーボンが付着する。内面は、ナデ調整を行い、鍔付近には指頭圧痕が残る。

35-236　瓦質土器で擂鉢。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部付近は、回転ナデ調整を行う。内面は櫛状工具による６本単位のすり目を施す。

35-237　瓦質土器で擂鉢。外面はナデ調整を行う。内面は、櫛状工具による６本単位のすり目を施す。

35-238　須恵質土器で擂鉢。外面は粗いナデ調整を行う。内面は横方向のハケ目調整後、櫛状工具による９本単位のすり目を施す。

35-239　常滑窯系の甕で口縁部。口縁部は、肥厚し「N」字状を呈する。

35-240　備前窯系と思われる胴部の一部。内外面ともにナデ調整を行う。

36-241　須恵質土器で口縁部の一部。口縁部は大きく屈曲し、丁寧に横ナデ調整をする。外面は格子目叩き、内面はハケ目調整を行う。

36-242　須恵質土器で口縁部の一部。口縁部は短く屈曲する。頸部付近は、縦方向にヘラ削り調整を施す。外面は格子目叩き、内面はナデ調整を行う。

36-243　須恵質土器で口縁部の一部。口縁部は短く屈曲する。外面は格子目叩き、内面はナデ調整を行う。

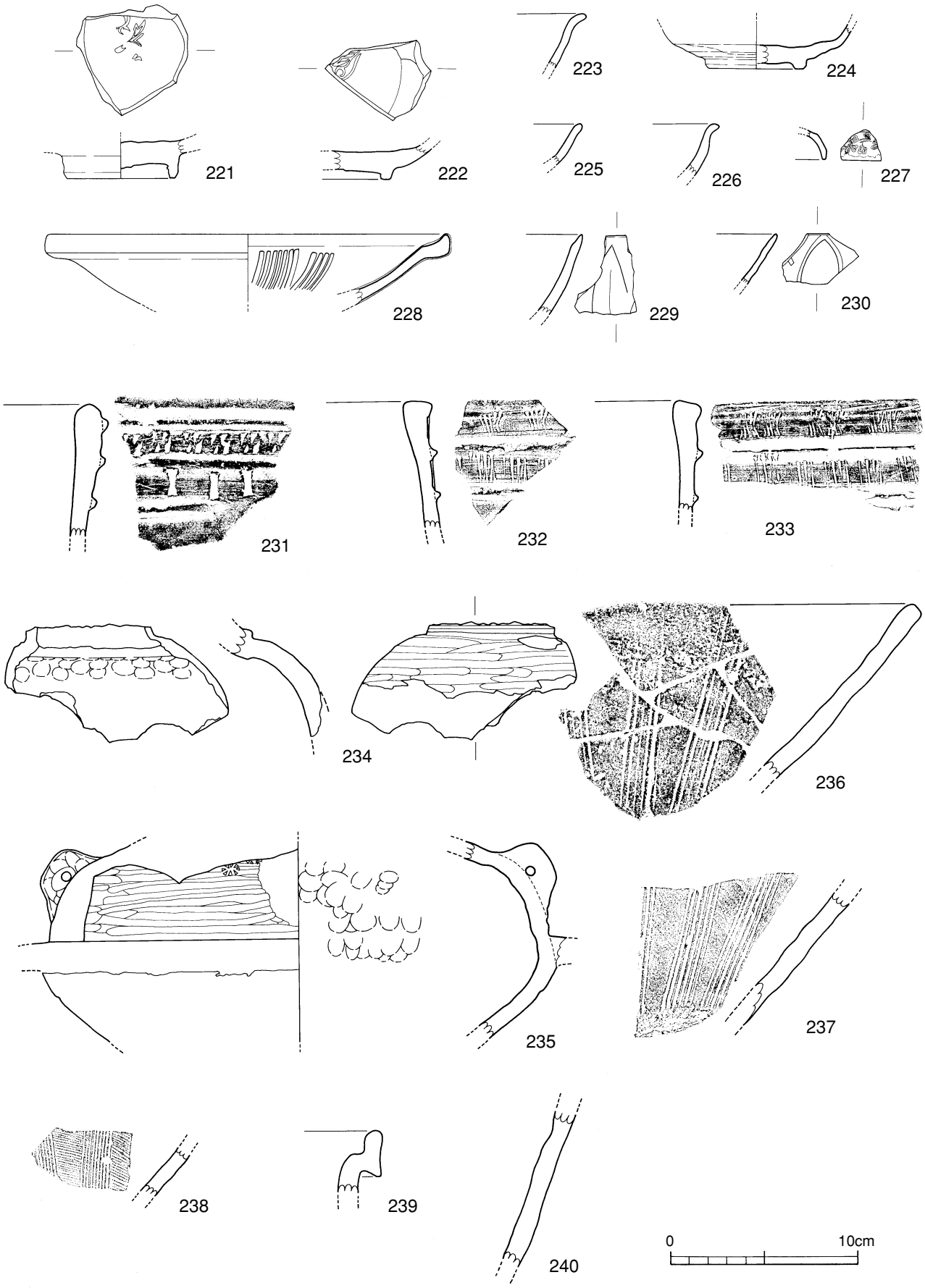
36-244　須恵質土器で底部の一部。内外面ともにナデ調整を行う。内面の一部に指頭圧痕が残る。

36-245　土師質土器で皿。復元口径7.4㎝、復元底径5.1㎝、器高2.3㎝。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は回転糸きり。

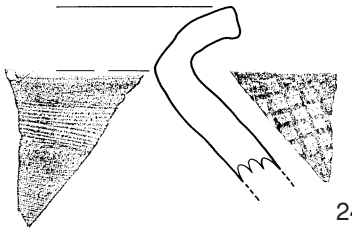
【13号溝】

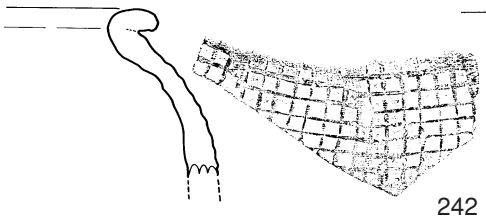
36-246　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は外反する。外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整を行う。

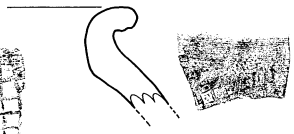
【11号溝】

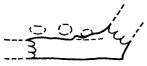


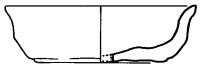
第35図　出土遺物実測図　17


241


242

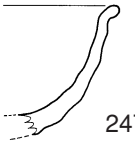

243

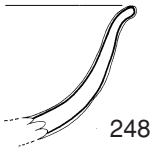

244


245

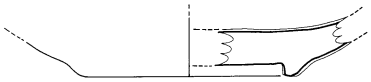
【13号溝】

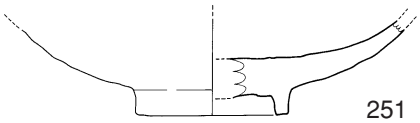
246

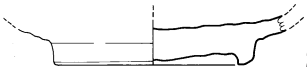

247

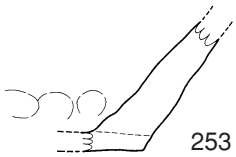

248

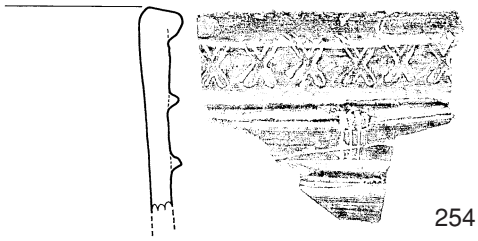
249

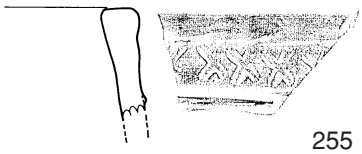

250

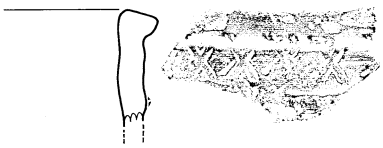

251

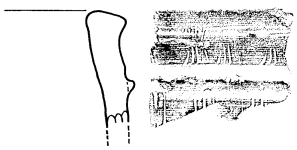

252

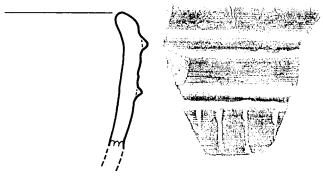

253

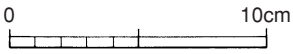

254


255

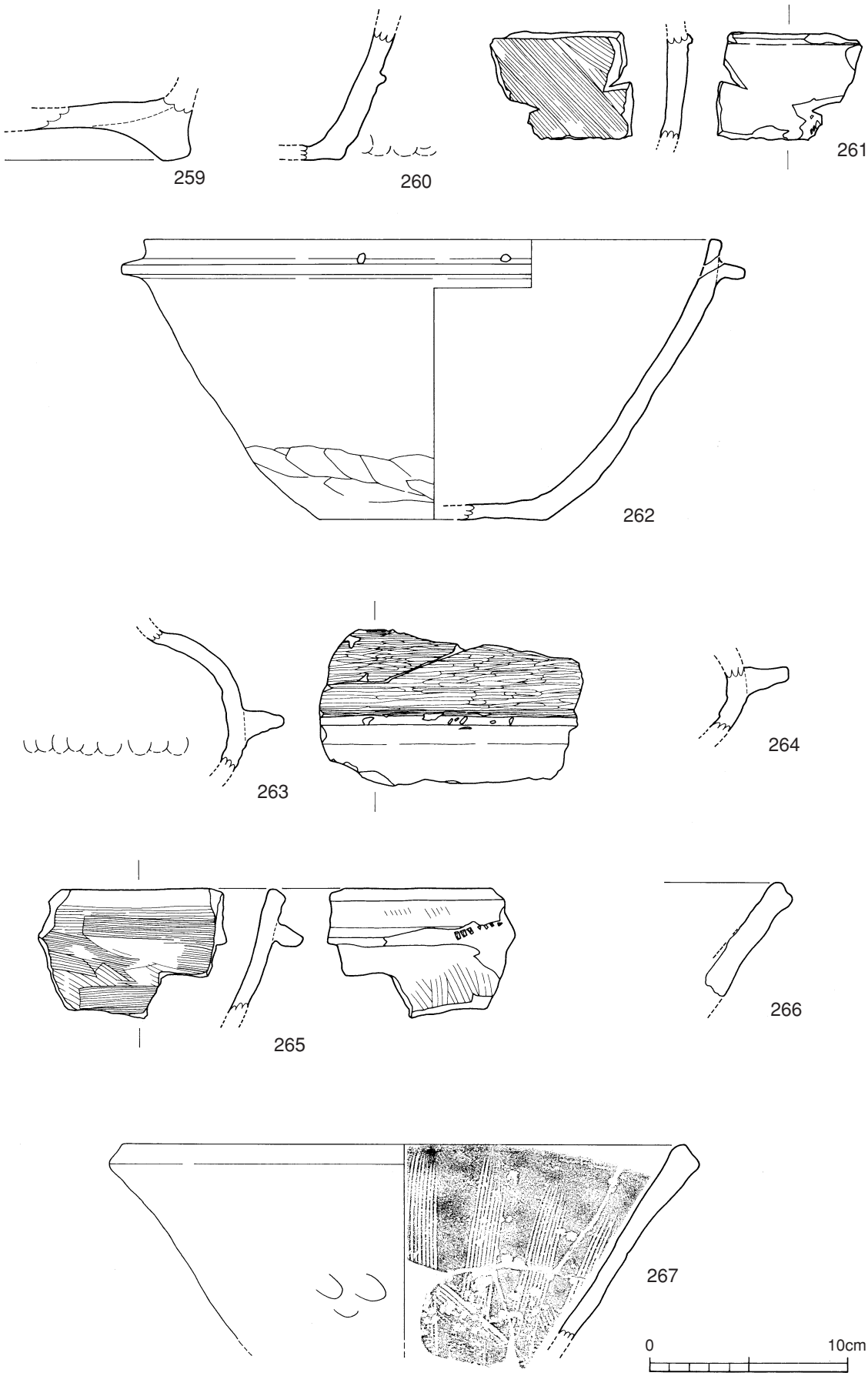

256


257


258



第36図　出土遺物実測図　18



第37図　出土遺物実測図　19

36-247　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は外反する。外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整を行う。細かい貫入を伴う。

36-248　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は外反する。外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整を行う。

36-249　青磁碗で口縁部の一部。口縁部は外反する。外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整を行う。貫入を伴う。

36-250　青磁盤で底部の一部。復元底径8.7㎝。体部外面には、櫛描きによる沈線が見られる。釉が厚くかけられ、高台内面は釉を掻きとる。貫入を伴う。

36-251　青磁碗で底部の一部。復元底径6.2㎝。緩やかな体部下位の立ち上がりから、大型の碗になると思われる。見込み部分は、重ね焼きのため無釉となる。

36-252　白磁皿で底部の一部。復元底径7.6㎝で、見込みも広く花文のスタンプを押す。高台内面はやや粗く削り、中央部が凸状になる。

36-253　常滑窯系の甕又は壺の底部。内外面共に粗いナデ調整を行う。内面には指頭圧痕が残る。胎土は砂粒が多く入り、頁状に焼き上がる。

36-254　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、口縁部下に二条の凸帯を巡らす。口縁部と一段目の凸帯間には斜格子文、凸帯間には連子状文のスタンプを連続して押す。

36-255　瓦質土器で火鉢。口縁部はやや肥厚し、口縁部下に一条の凸帯を巡らす。凸帯間には斜格子文のスタンプを連続して押す。

36-256　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、口縁部下に一条の凸帯を巡らす。凸帯間には斜格子文のスタンプを連続して押す。

36-257　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、口縁部下に一条の凸帯を巡らす。凸帯間には斜格子文、凸帯下には連子状文のスタンプを連続して押す。

36-258　瓦質土器で火鉢。口縁部はやや内湾する。口縁部下に二条の凸帯を巡らす。２段目の凸帯下には連子状文のスタンプを連続して押す。器厚が薄い。

37-259　瓦質土器で火鉢の底部。底部に脚部を貼り付けハケ目調整を行う。

37-260　瓦質土器で火鉢の底部。外面は横方向のナデ調整を行う。底部付近に一条の凸帯を巡らす。底部付近に指頭圧痕が残る。内面はナデ調整を行う。

37-261　瓦質土器で火鉢。一条の凸帯を施す。外面はナデ調整、内面はハケ目調整を行う。

37-262　瓦質土器で羽釜。口径29.0㎝、復元底径11.6㎝、器高14.5㎝で、逆台形を呈する。口縁部に鍔をめぐらし、鍔上部の２ヵ所に２個ずつ穿孔を持つ。内外面ともにナデ調整を行う。外面体部下位は削り調整を行う。外面全体にカーボンが付着する。

37-263　瓦質土器で茶釜の胴部。体部には鍔を巡らす。鍔より上部は細かいミガキ調整、下部はナデ調整を行う。内面はナデ調整、鍔付近に指頭圧痕が残る。鍔より下位全面にカーボンが付着する。

37-264　瓦質土器で釜または茶釜の鍔。内外面ともにナデ調整を行い。内面の鍔付近には指頭圧痕が残る。鍔より下位にはカーボンが付着する。

37-265　瓦質土器で鉢。口縁部下には、一条の大きい凸帯を巡らす。内外面ともにハケ目調整を行う。

37-266　瓦質土器で擂鉢。内外面ともにナデ調整を行う。内面は櫛状工具による６本単位のすり目を施す。磨耗が著しい。

37-267　瓦質土器で在地系の擂鉢。復元口径28.9㎝。外面はナデ調整を行い、口縁部は横ナデを行う。内面はナデ調整後、櫛状工具による８本単位のすり目を２方向から施す。

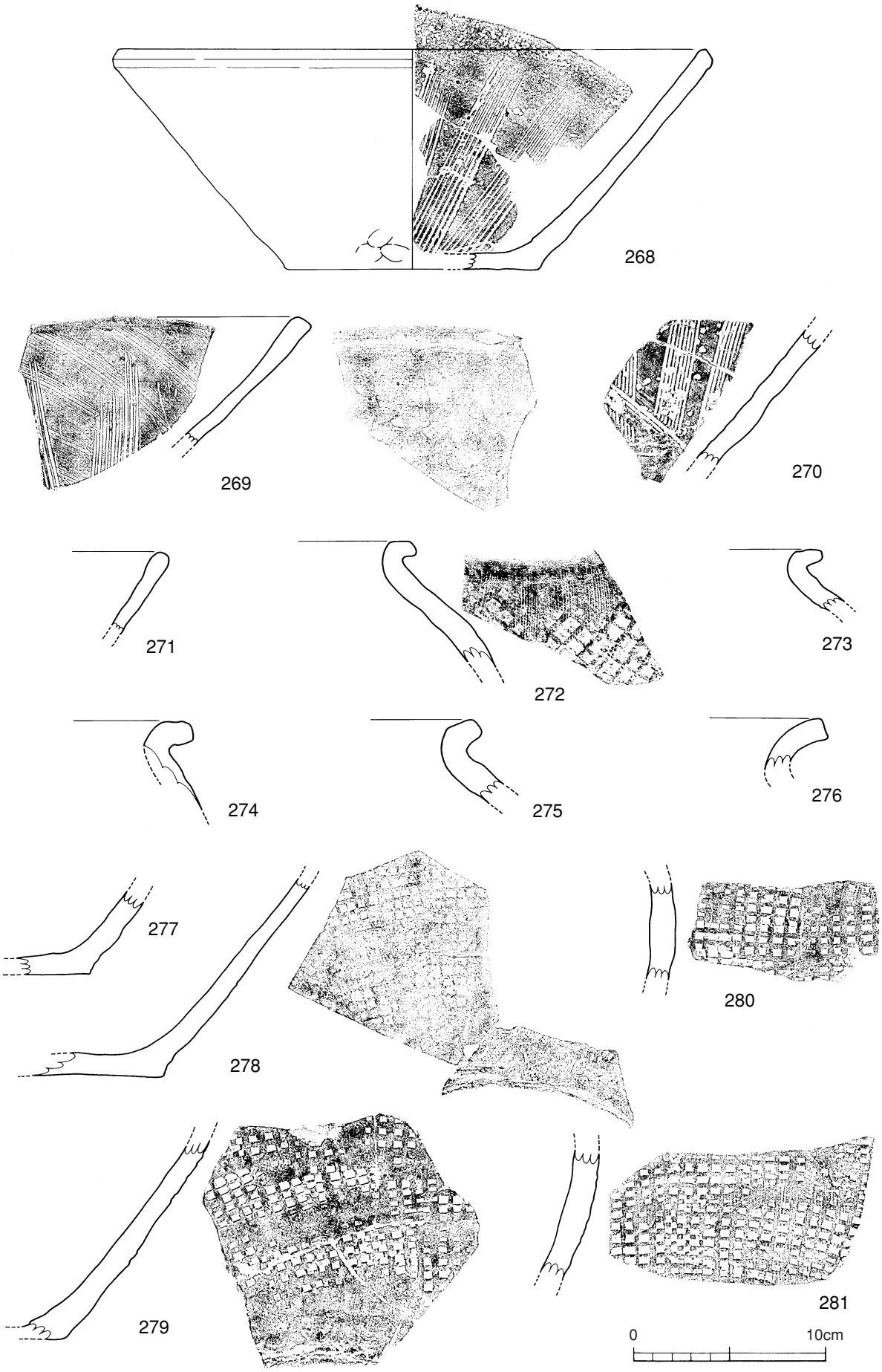
38-268　瓦質土器で在地系の擂鉢。復元口径31.2㎝、復元底径13.4㎝。外面はナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。口縁部は横ナデ調整。内面は櫛状工具による７本単位のすり目を施す。

38-269　瓦質土器で擂鉢。外面は粗いナデ調整、一部に指頭圧痕が残る。内面はハケ目調整後、櫛状工具による８本単位のすり目を施す。

38-270　瓦質土器で擂鉢。外面は粗いナデ調整を行う。内面は櫛状工具による２方向からの８本単位のすり目を施す。

38-271　瓦質土器で捏鉢。内外面ともにナデ調整を行う。磨耗が著しい。

38-272　須恵質土器で甕。口縁部は短く屈曲する。外面は格子目叩き調整を行う。外面頸部付近は縦方



第38図　出土遺物実測図　20

向のハケ目調整。内面はナデ調整を行う。
38-273　須恵質土器で甕。口縁部は短く屈曲する。外面は格子目叩き調整後、ナデ調整。内面はナデ調整。
38-274　須恵質土器で甕。口縁部は短く屈曲する。内外面共にナデ調整を行う。
38-275　須恵質土器で甕。口縁部は短く屈曲する。内外面共にナデ調整を行う。
38-276　須恵質土器で甕。口縁部は外反する。内外面共にナデ調整を行う。
38-277　須恵質土器で甕の底部。内外面ともにナデ調整を行う。外面底部付近に指頭圧痕が残る。
38-278　須恵質土器で甕の底部。外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。内面はナデ調整。胴部は、底部から大きく開きながら立ち上がる。
38-279　須恵質土器で甕の底部。外面は格子目叩き後、ナデ調整を行う。内面はナデ調整。
38-280　須恵質土器で甕。外面は格子目叩き調整、内面はナデ調整。
38-281　須恵質土器で甕。外面は格子目叩き調整、内面はナデ調整を行う。
39-282　須恵質土器で甕。13号溝及び11号溝より出土。外面は格子目叩き、内面はハケ目調整を行う。
39-283　壺。13号溝、11号溝、８号溝より出土。復元底径13.3㎝。内外面ともに粗いナデ調整を行う。
39-284　土師質土器で坏。復元口径11.6㎝、復元底径7.4㎝、器高2.3㎝。内外面ともにナデ調整を行う。

【14号溝】
39-285　瓦質土器で擂鉢。内面は櫛状工具による８本単位のすり目を施す。
39-286　瓦質土器で釜の鍔と思われる。

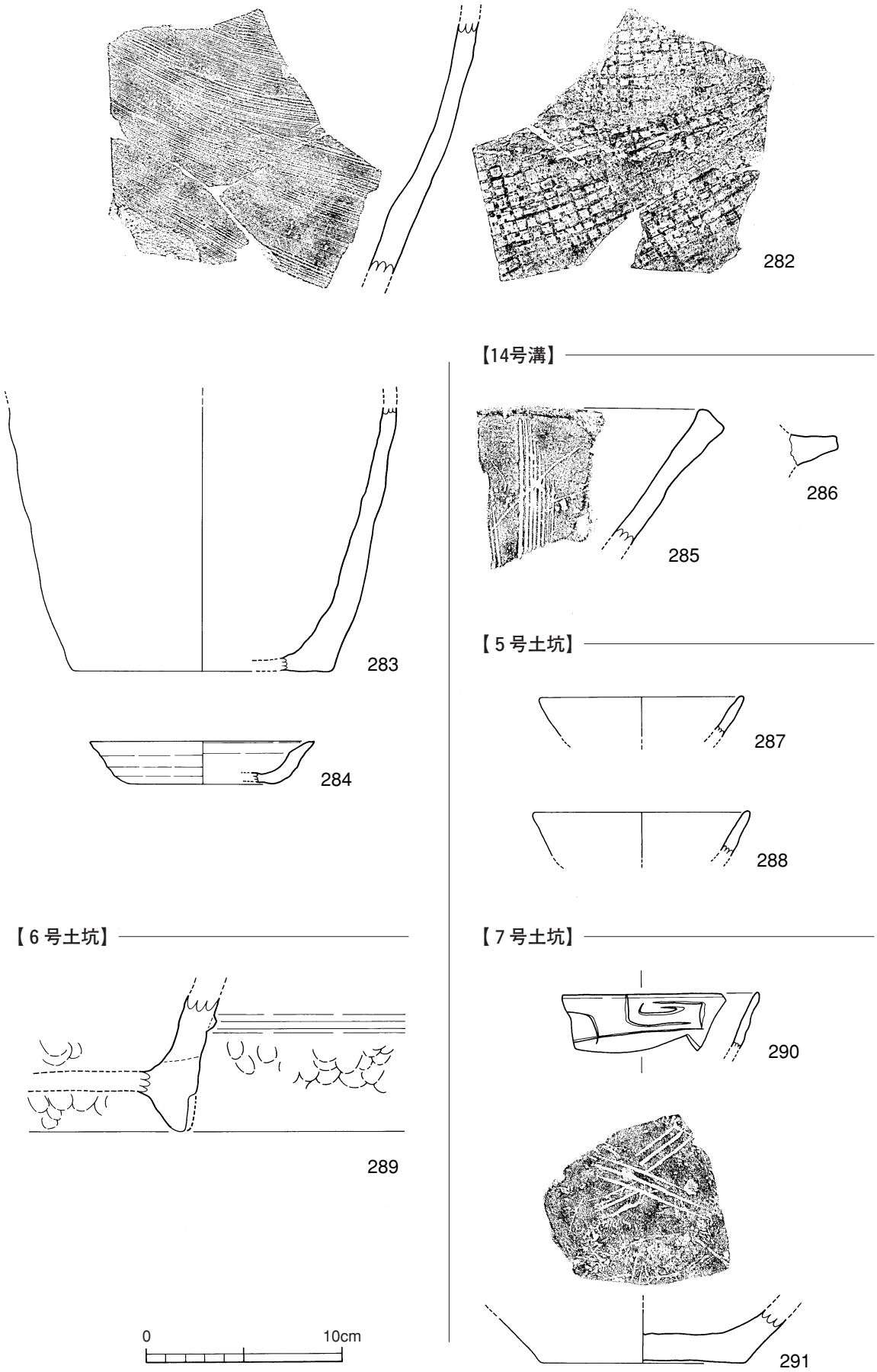
【５号土坑】
39-287　土師質土器で坏の口縁部。復元口径10.5㎝。内外面ともに回転ナデ調整を行う。
39-288　土師質土器で坏の口縁部。復元口径11.2㎝。内外面ともに回転ナデ調整を行う。

【６号土坑】
39-289　瓦質土器で火鉢の底部。体部下位に一条の凸帯を巡らす。脚部付近に指頭圧痕が残る。内外面ともにナデ調整。

【７号土坑】
39-290　青磁碗で口縁部の一部。７号土坑及び道路状遺構第１面より出土。外面にヘラ描きによる片彫りの雷文を施文。
39-291　瓦質土器で擂鉢の底部。底径10.4㎝。底部外面には板目圧痕が残る。内面見込みには櫛状工具による３本単位のすり目を施す。

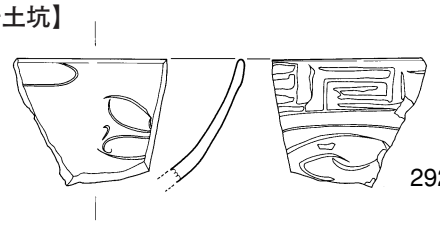
【10号土坑】
40-292　青磁碗で口縁部の一部。外面は回転ヘラ削り後、ヘラ描きによる雷文を施す。内面はヘラ描きによる施文。
40-293　青磁碗で底部の一部。復元底径6.0㎝。内面見込みには、ヘラ描きの片彫りによる施文。高台は削りだし。
40-294　瓦質土器で火鉢。口縁部は肥厚し、一条の凸帯を施す。菊花文のスタンプを押す。
40-295　瓦質土器で擂鉢の底部。復元底径12.6㎝。外面底部付近には指頭圧痕、底部には板目圧痕が残る。内面は磨耗が著しい。櫛状工具による７本単位のすり目を施す。
40-296　須恵質土器で甕。外面は叩き調整、内面はナデ調整を行う。

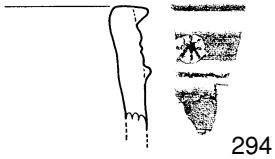
【１号土壙墓】
40-297　土師質土器で坏。口径7.1㎝、底径4.8㎝、器高2.1㎝の燈明皿。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は回転糸きり。口縁部の一部にカーボンが付着する。
40-298　土師質土器で坏。口径7.0㎝、底径4.6㎝、器高2.0㎝の燈明皿。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は回転糸きり。口縁部の一部にカーボンが付着する。

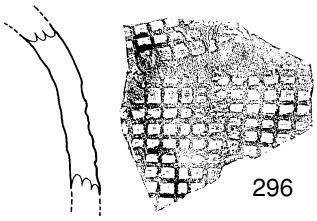


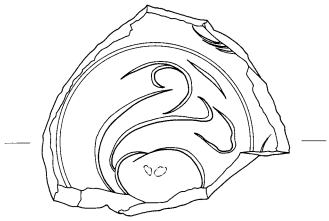
第39図　出土遺物実測図　21

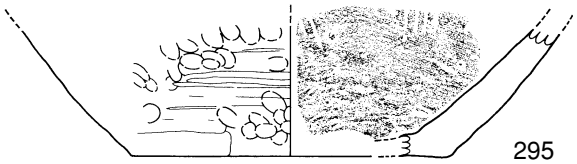
【10号土坑】

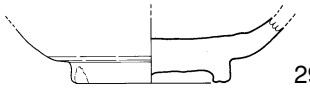

292


294

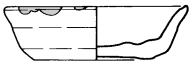

296

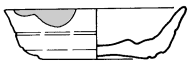



295

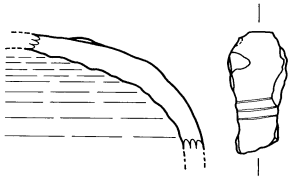

293

【1号土壙墓】

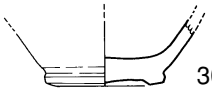

297


298

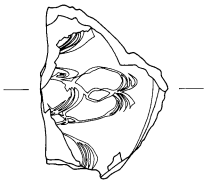
【Ⅰ区】

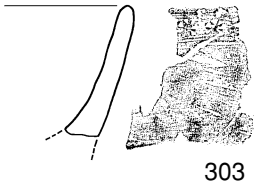

299

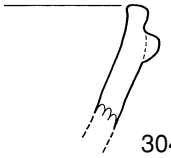
300

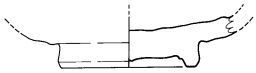

301

【Ⅱ区】

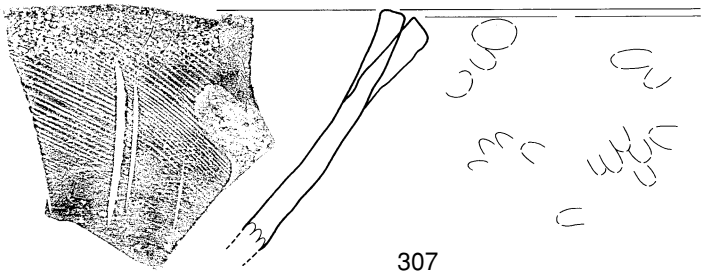



303

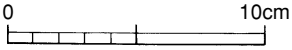

304


302

305


307

306



第40図　出土遺物実測図　22

【その他】

40-299　白磁四耳壺の肩部の破片。Ⅰ－８区第Ⅲ層より出土。外面は回転ナデ調整を行う。一部に、ヘラガキによる施文が見られる。内面は回転ナデを行う。

40-300　天目茶碗で口縁部の一部。Ｈ－７区第Ⅲ層より出土。口縁部は内傾し、くびれをもつ。釉調は黒褐色で、錆釉をしたのちに黒釉を施釉する。

40-301　天目茶碗で底部の一部。Ｈ－８区第Ⅲ層より出土。底径3.6㎝。体部外面は回転ヘラ削りを施す。釉調は黒褐色で、錆釉をしたのちに黒釉を体部中位程まで施釉する。

40-302　青磁碗で底部の一部。Ｇ－５区第Ⅲ層より出土。復元底径5.4㎝。外面は高台外面まで施釉、高台は削りだし。見込みにヘラ描きによる施文。貫入を伴う。

40-303　瓦質土器で浅鉢の一部。Ｇ－５区第Ⅲ層より出土。内外面ともにナデ調整を行う。口縁外面には菊花文のスタンプを押す。

40-304　瓦質土器で鉢。Ｆ－６区第Ⅲ層より出土。一条の凸帯を施し、凸帯下はハケ目調整。内面はナデ調整。

40-305　瓦質土器で火鉢の底部。Ｄ－５区第Ⅲ層より出土。内外面ともにナデ調整を行い、板状の脚部付近には指頭圧痕が残る。

40-306　瓦質土器で火鉢の底部。Ｄ－６区第Ⅲ層より出土。内外面ともにナデ調整を行い、板状の脚部付近には指頭圧痕が残る。

40-307　瓦質土器で擂鉢。Ｄ－３区第Ⅲ層より出土。外面は粗いナデ調整を行い、一部に指頭圧痕が残る。内面はハケ目調整後、櫛状工具による４本以上の単位のすり目を施す。口縁部は片口。

2　石製品

石製品は、砥石、石臼、滑石製の石鍋破片、碁石と少量であった。図化してはいないが、石斧が２点出土している。以下種別ごとに記す。

41-1～4　滑石製石鍋の破片。41-1･2は１号堀、41-3･4は４号土坑より出土。小さな破片ではあるが、内外面ともにノミ削りの痕跡が見られる。また、外面の一部にカーボンが付着する。41-4は、鍔部分が残存しており、鍔の断面は不定形台形を呈する。口縁は斜め上方に立ち上がる。

41-5～7　石臼の一部。41-5は、上臼の一部で、目立も残存している。推定径からやや小型であるため、茶臼の可能性もある。41-6及び41-7は、下臼の一部。

41-8～9　石臼の一部。41-8は、Ｂ－５区第Ⅲ層より出土した下臼の一部。41-9は、Ⅰ－８区柱穴より出土した上臼の一部。磨耗しているが、目立が一部残存している。

41-10～42-17　砥石。特に４号土坑より出土した42-15は大型で、加工痕も見られ、側面には火を受けた痕も見られる。

42-18・19　丁寧に面取りされた碁石。42-18は径1.6㎝、厚さ0.6㎝で円形。42-19は径1.8～2.0㎝、厚さ0.7㎝のやや楕円形になる。

3　金属製品

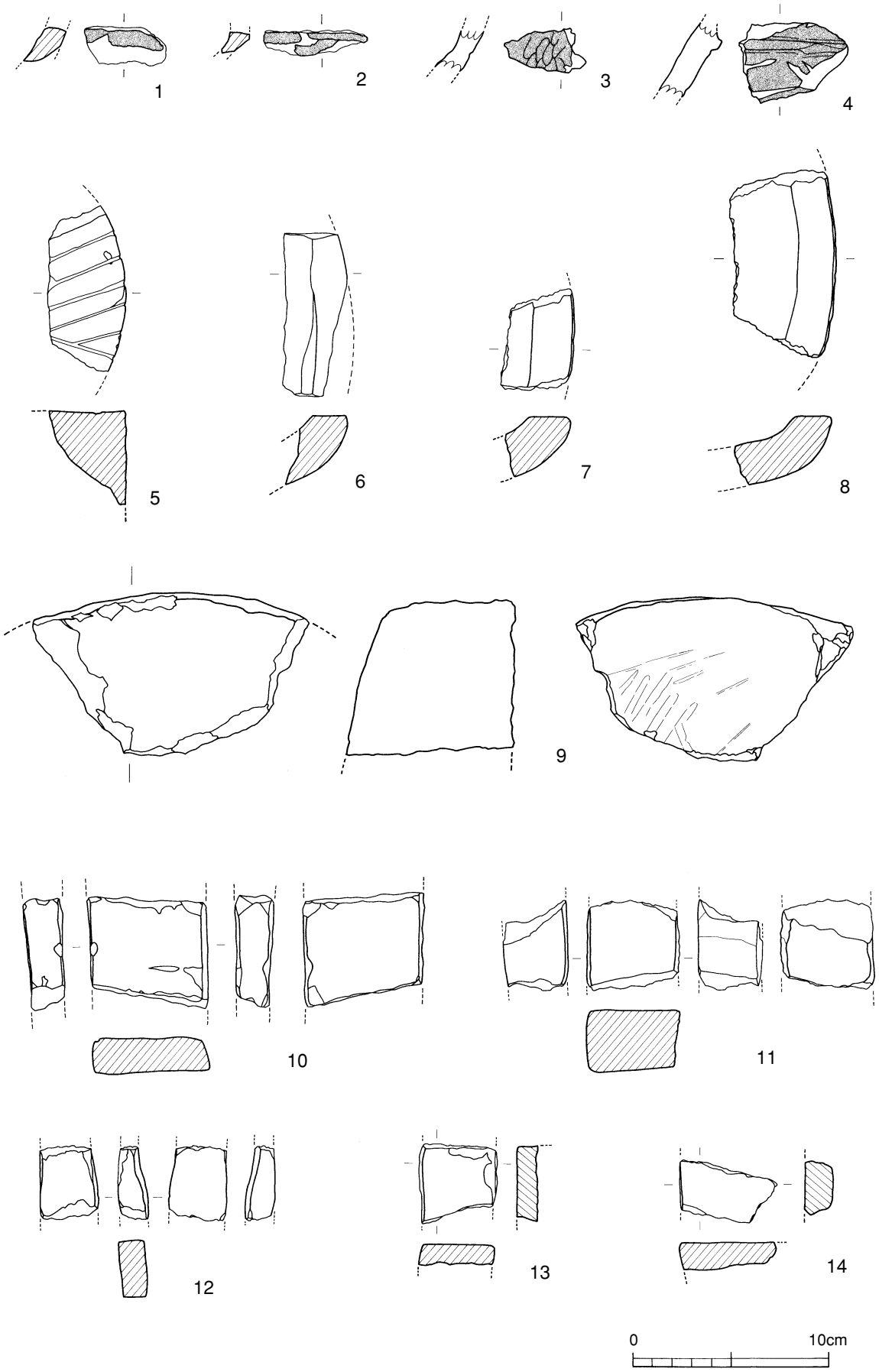
金属製品は、鉄製品を中心としている。そのほとんどが１号堀からの出土であり、鉄釘が占めている。なお、鉄滓も出土している。Ⅰ区からは、青銅製品の笄及び和鏡の破片が出土している。以下種別ごとに記す。

43-1　１号堀上層より出土した青銅製品。長さは約15.0㎝。下部にやや破損した痕跡が見られるが、ほぼ完形品に近い。上部に見られる湾曲は本来ものである。断面形は三角形となる。中ほどに、縦3.0㎜、横1.0㎜程のほぞ穴があいている。具体的な用途等は不明。

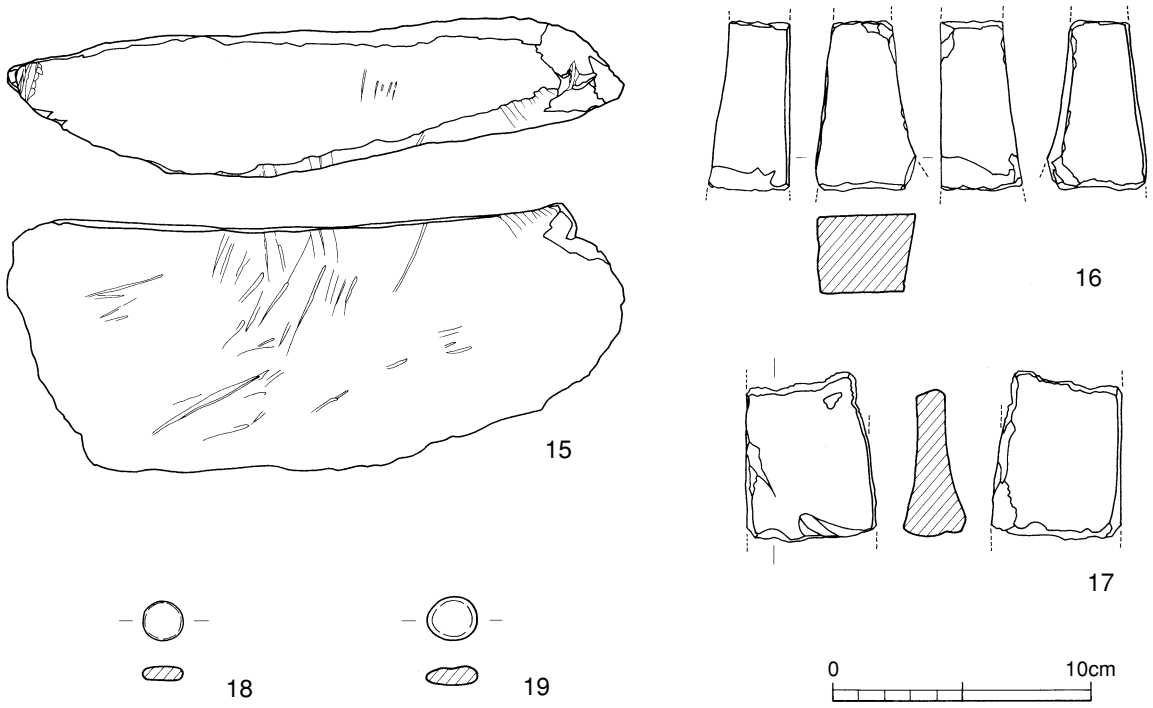
43-2　１号堀上層より出土した青銅製品。薄い胴板のものを環状にしており、２個ずつ対面する２箇所に径3.0㎜の穴を開けている。破片ではあるが、同様の別個体が同遺構より、あと１点出土している。用途等は不明。

43-3　１号堀より出土した青銅製品。片面は型起こしにより溝状になっている。一部に節状の突起が見られる。用途等は不明であるが、何らかの部品の一部と考えられる。

43-4　11号溝下層より出土した青銅製品で笄。一部欠損しているが、長さ11.1㎝、横1.2㎝、厚さ0.2㎝。



第41図　出土遺物（石製品）実測図　23



第42図　出土遺物（石製品）実測図　24

表には、型押しによる施文を行う。

43-5　13号溝下層より出土した青銅製品で和鏡の破片。面径は10.0㎝前後のものと思われる。残存率は５分の１程度。著しく変形をしていることから、破損後にかなりの高熱を受けている。

43-6　１号堀上層より出土した鉄製品で刀子の一部。残存縦5.5㎝、横1.1㎝、厚さ0.3㎝。

43-7　１号堀上層より出土した鉄製品で刀の切先部分。残存縦5.4㎝、横2.6㎝、厚さ0.3㎝。

43-8　11号溝より出土した鉄製品で刀子。残存縦7.6㎝、横1.3㎝、厚さ0.3㎝。

43-9　11号溝より出土した鉄製品で刀子。残存縦13.6㎝、横1.3㎝、厚さ0.3㎝。

43-10　１号堀上層より出土した鉄製品で錐。縦は11.0㎝で5.0㎜～6.0㎜の方形の断面形を持つ。

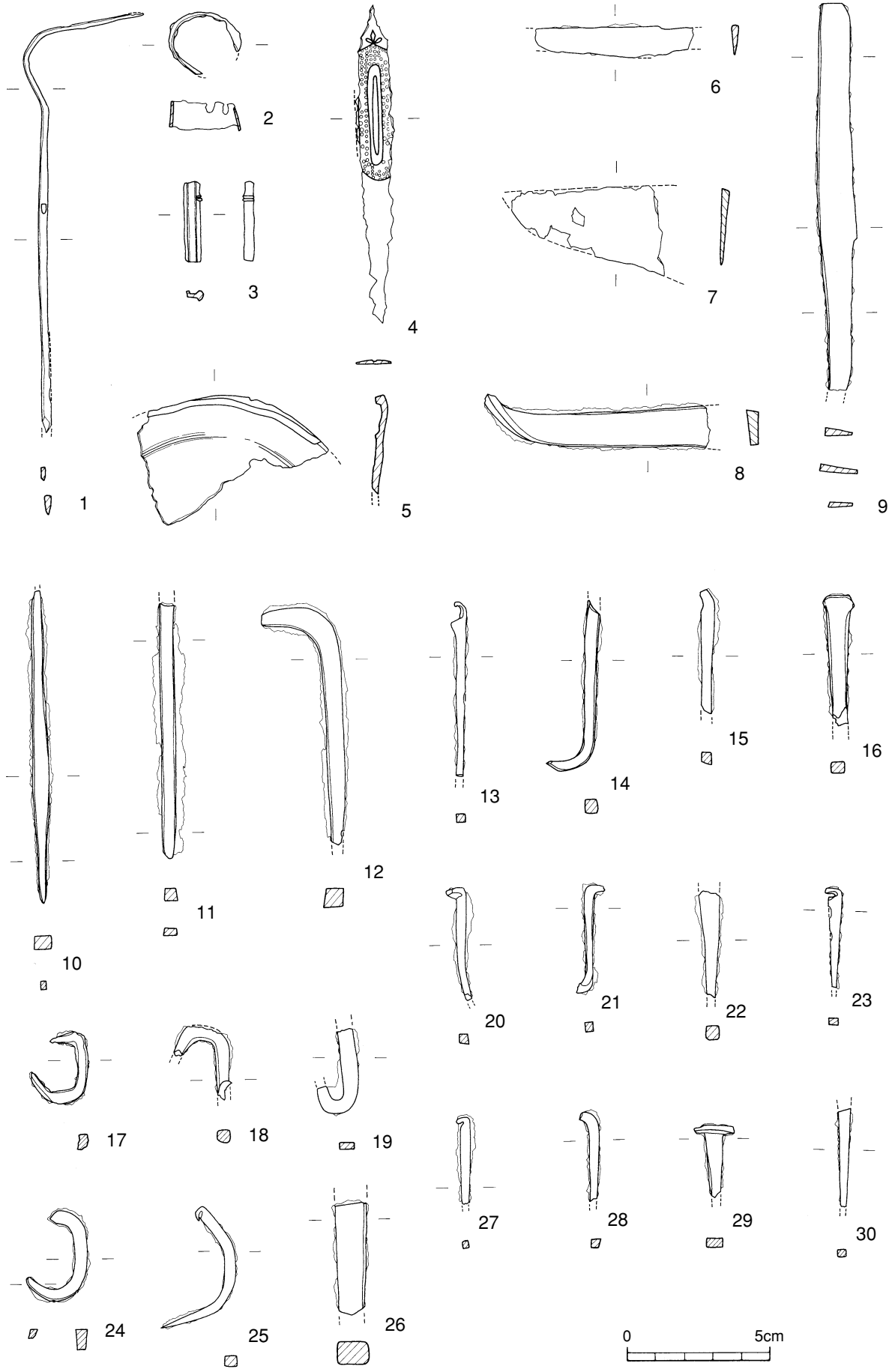
43-11～44-42　鉄製品で鉄釘。ほとんどが１号堀からの出土である。大きさは様々であるが、断面形は正方形もしくは長方形である。

44-43　11号溝から出土した鉄製品で小型のハサミと思われる。残存縦4.0㎝、横1.4㎝、厚さ0.3㎝。

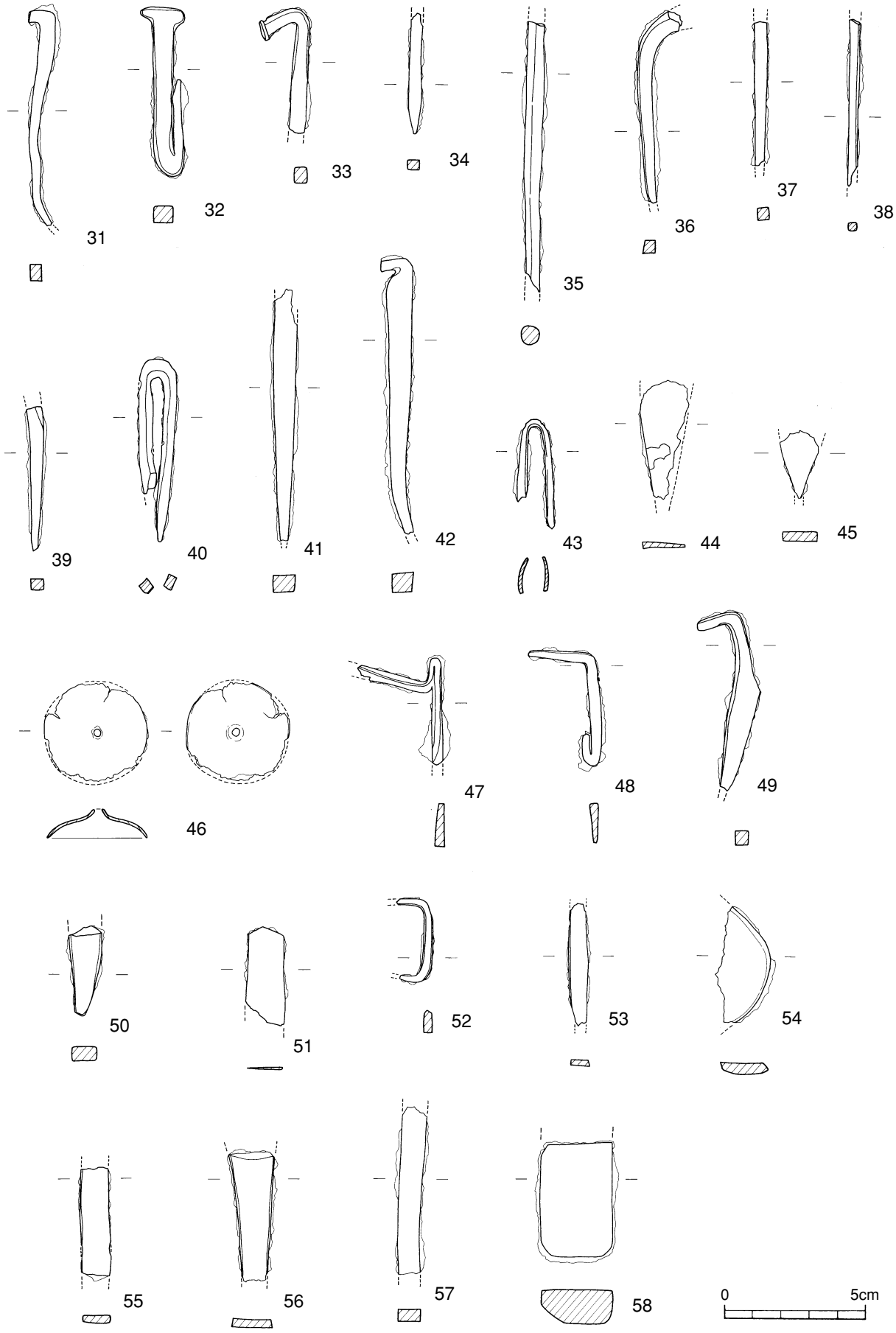
44-44・45　１号溝上層から出土した鉄製品で鉄鏃の一部と思われる。

44-46　１号堀より出土した鉄製品。径約3.6㎝の円形で、笠状になっており、その中心には径約2.0㎜の穴が開けられている。腐食が激しく取上げはできなかったが、同じものがもう１点出土している。

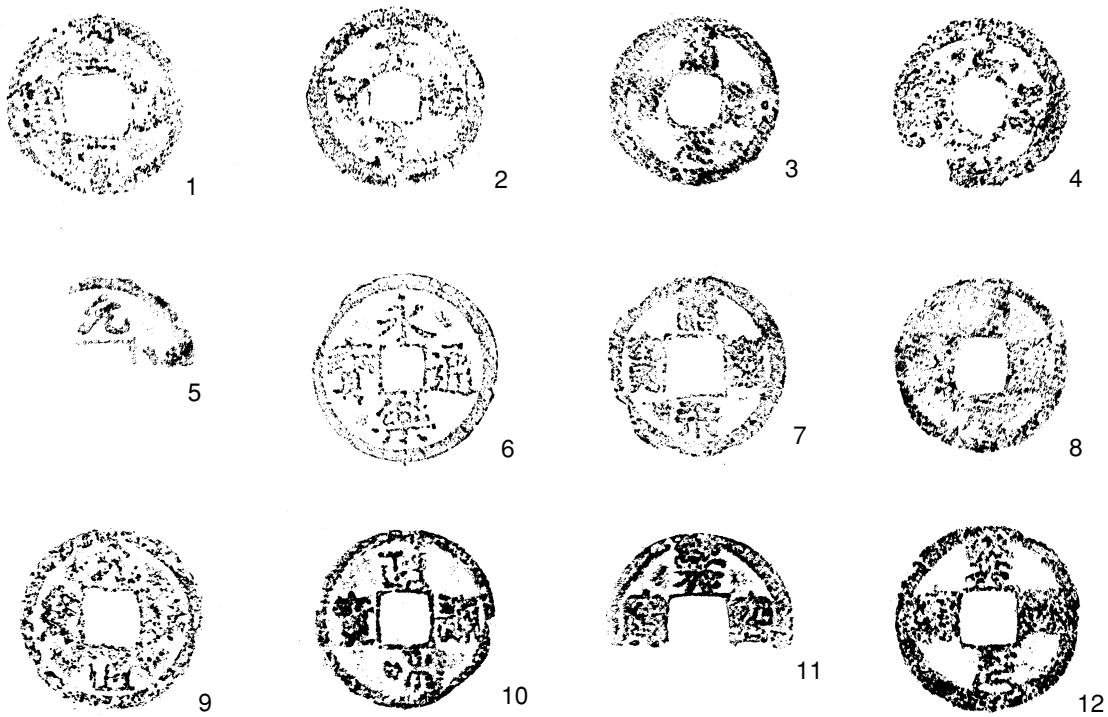
44-47～58　不明鉄製品であるが、何らかの部品の一部と思われる。



第43図　出土遺物（金属製品）実測図　25



第44図　出土遺物（金属製品）実測図　26



第45図　出土遺物（銅銭）拓本　27

報番	遺構	銭貨名	国名	初鋳年	書体	グリッド	層位
45-１	１号堀	景祐元寶	北宋	1034	真書	Ⅱ区	―
45-２	―	皇宋通寶	北宋	1038	篆書	―	―
45-３	１号堀	紹聖元寶	北宋	1094	篆書	Ⅱ区Ｂ－４	上層
45-４	１号堀	至道元寶	北宋	995	草書	Ⅱ区Ｆ－６	下層
45-５	１号堀	元祐通寶	北宋	1086	行書	Ⅱ区	下層
45-６	１号堀	永楽通寶	明	1408	―	Ⅱ区Ｃ－２	下層
45-７	道路状遺構	治平通寶	北宋	1064	篆書	Ⅱ区Ｆ－６	―
45-８	13号溝	開元通寶	南唐	960	篆書	Ⅱ区Ｇ－８	―
45-９	13号溝	元祐通寶	北宋	1086	行書	Ⅱ区Ｇ－８	―
45-10	13号溝	政和通寶	北宋	1111	篆書	Ⅱ区Ｇ－９	―
45-11	―	熙寧元寶	北宋	1068	篆書	Ⅱ区Ｆ－４	３層
45-12	―	熙寧元寶	北宋	1068	篆書	Ⅰ区Ⅰ－８	３層

第３表　銅銭観察表

第４表　土器類観察表

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
19-1	青磁碗	1号堀	D-5	—	—	—	—	(2.9)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類4-a
19-2	青磁碗	1号堀	—	—	—	—	—	(4.0)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類4-a
19-3	青磁碗	1号堀	—	—	—	—	—	(4.0)	オリーブ灰	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類4-a
19-4	青磁碗	1号堀	E-5	—	—	—	—	(2.3)	灰オリーブ	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類2～4
19-5	青磁碗	1号堀	C-4	—	—	—	—	(3.1)	灰オリーブ	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類a 19-6と同一か？
19-6	青磁碗	1号堀	—	—	—	—	—	(5.1)	灰オリーブ	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類a 19-5と同一か？
19-7	青磁碗	1号堀	—	—	(5.8)	—	1.0	(4.1)	灰オリーブ	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類c 上田B-Ⅱ
19-8	青磁碗	1号堀	—	—	4.4	5.0	0.9	(2.1)	オリーブ灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類b
19-9	青磁碗	1号堀	D-5	—	—	—	—	(3.8)	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅲ類2-c
19-10	青磁坏	1号堀	—	(12.1)	—	—	—	(3.0)	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁坏Ⅲ類4-a
19-11	青磁碗	1号堀	F-5.6	—	(5.7)	(6.2)	1.0	(2.4)	黄緑	黄緑	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類一イ 元禄式青磁
19-12	青磁碗	1号堀	—	—	4.9	5.4	1.0	(2.4)	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類一イ
19-13	青磁盤	1号堀	D-5	—	5.8	5.8	1.1	(2.2)	灰白	灰白	太宰府編年龍泉窯系青磁盤Ⅳ類一イ
19-14	青磁碗	1号堀	—	—	5.7	—	—	(2.8)	淡黄緑	淡黄緑	上田C-Ⅱ
19-15	青磁碗	1号堀	—	(15.8)	(5.7)	(6.2)	—	7.0	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類
19-16	青磁碗	1号堀	—	—	—	—	—	(2.9)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類一イ
19-17	青磁坏	1号堀	E-6	(12.7)	6.1	6.4	0.8	3.9	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁坏Ⅳ類一イ 接／道路状遺構第2面
19-18	青磁碗	1号堀	B-4.5	—	—	—	—	(3.2)	緑黄	緑黄	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
19-19	青磁碗	1号堀	—	—	—	—	—	(3.7)	灰緑	灰緑	上田B-Ⅱ-a
19-20	青磁碗	1号堀	B-3	—	—	—	—	(5.0)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降 上田D-Ⅱに相似
20-21	青磁坏	1号堀	F-5	—	—	—	—	(2.7)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁坏Ⅲ類1-a
20-22	青磁坏	1号堀	C-4	—	—	—	—	(2.3)	灰オリーブ	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁坏Ⅳ類
20-23	青磁香炉	1号堀	—	—	—	—	—	(2.2)	緑青	緑青	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
20-24	青磁碗	1号堀	—	—	(6.8)	—	1.2	(3.4)	明緑灰	明緑灰	上田B-Ⅱ-b
20-25	青磁碗	1号堀	—	—	5.4	—	0.8	(2.0)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類か？
20-26	青磁碗	1号堀	—	—	—	—	—	(3.7)	明緑青	明緑青	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類一イ 上田D-Ⅰ-a
20-27	青磁碗	1号堀	—	(15.0)	—	—	—	(5.9)	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降 上田D-Ⅱ
20-28	青磁碗	1号堀	—	—	4.8	5.4	1.5	(2.7)	灰オリーブ	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
20-29	青磁碗	1号堀	E-5　F-6 G-3.5	(14.0)	5.4	6.0	1.6	7.4	明灰オリーブ	明灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降 上田C-Ⅱ-a
20-30	青磁碗	1号堀	D-5 E-3.5.6.7	(13.6)	(5.5)	—	—	8.2	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降 接／道路状遺構第2面
20-31	青磁碗	1号堀	—	—	—	—		(2.3)	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
20-32	白磁皿	1号堀	B-3	—	—	—	—	(2.2)	灰白	灰白	白磁皿Ⅸ類　（森田A）
20-33	白磁碗	1号堀	—	(17.0)	—	—	—	(5.6)	灰白	灰白	森田C
20-34	白磁皿	1号堀	—	—	5.5	—	0.7	(2.3)	灰白	明緑灰	森田C
20-35	白磁皿	1号堀	—	—	(3.4)	3.8	0.4	(1.4)	灰白	灰白	森田D
20-36	白磁皿	1号堀	—	—	4.0	—	0.3	(1.6)	明灰白	明灰白	森田D
20-37	白磁 多角坏	1号堀	C-4	—	—	—	—	(1.7)	灰白	灰白	森田D
21-38	白磁皿	1号堀	D-5	(8.5)	(3.2)	(3.4)	0.5	2.3	灰白	灰白	森田D
21-39	白磁皿	1号堀	—	(8.8)	4.4	4.8	—	2.1	灰白	灰白	森田D
21-40	白磁皿	1号堀	D-5 E-5	(9.6)	—	—	—	(1.2)	灰白	灰白	森田D 接／10号土坑
21-41	白磁皿	1号堀	—	(8.0)	—	—	—	(3.0)	灰白	灰白	森田D
21-42	白磁皿	1号堀	D-5	—	—	—	—	(2.0)	灰白	灰白	森田D

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
21-43	白磁皿	1号堀	B-4	—	—	—	—	(1.9)	灰白	灰白	森田D
21-44	白磁皿	1号堀	—	—	—	—	—	(1.8)	明灰白	明灰白	森田D
21-45	白磁皿	1号堀	B-3 G-4	—	—	—	—	(2.3)	灰白	灰白	森田E
21-46	白磁皿	1号堀	—	(12.8)	(7.0)	(7.2)	0.6	3.1	灰白	灰白	森田E
21-47	白磁皿	1号堀	—	—	(7.6)	—	0.6	(1.7)	灰白	灰白	森田E
21-48	白磁皿	1号堀	—	—	3.8	—	0.5	(1.9)	灰	灰白	李朝
21-49	青白磁碗	1号堀	—	—	(3.6)	(4.4)	1.2	(3.1)	明緑灰	明緑灰	
21-50	染付碗	1号堀	D-5	—	—	—	—	(2.9)	—	—	小野碗　　C－Ⅲ類
21-51	染付大碗	1号堀	—	—	—	—	—	(2.8)	—	—	
21-52	染付碗	1号堀	D-5	—	—	—	—	(2.6)	—	—	
21-53	染付	1号堀	D-4	—	—	—	—	(3.6)	—	—	
21-54	天目碗	1号堀	B-4	—	—	—	—	(2.7)	褐	灰褐	中国
21-55	壺	1号堀	—	—	—	—	—	(5.8)	赤褐 10R4／3	灰褐 7.5Y R4／2	備前窯系
21-56	壺	1号堀	—	—	—	—	—	(8.0)	灰褐 7.5Y R4／2	灰褐 7.5Y R4／2	常滑窯系
21-57	壺	1号堀	—	—	—	—	—	(7.6)	褐 7.5Y R4／3	にぶい黄褐 10Y R5／3	備前窯系
21-58	壺又は甕	1号堀	—	—	—	—	—	(8.6)	暗褐黄	灰白 5Y7／2	
22-59	土師質坏	1号堀	—	7.1	5.8	—	—	1.5	にぶい橙 7.5Y R6／4	にぶい橙 7.5Y R6／4	燈明皿、口縁部にカーボン付着
22-60	土師質坏	1号堀	—	(7.0)	(6.2)	—	—	1.4	橙 5Y R6／6	橙 5Y R6／6	燈明皿、内面にカーボン付着
22-61	土師質坏	1号堀	—	(8.9)	(7.6)	—	—	1.3	浅黄橙 10Y R8／3	浅黄橙 10Y R8／3	
22-62	土師質坏	1号堀	—	(9.7)	(8.2)	—	—	1.7	橙 5Y R6／6	橙 5Y R6／6	燈明皿、内面にカーボン付着
22-63	土師質坏	1号堀	—	(9.8)	(6.8)	—	—	2.4	橙 5Y R6／6	橙 5Y R6／6	
22-64	土師質坏	1号堀	—	(10.2)	(7.4)	—	—	2.2	にぶい橙 5Y R7／4	にぶい橙 5Y R7／4	燈明皿、口縁部にカーボン付着
22-65	土師質坏	1号堀	—	(10.8)	(8.3)	—	—	2.3	にぶい橙 5Y R6／4	にぶい橙 5Y R6／4	燈明皿、内面にカーボン付着
22-66	土師質坏	1号堀	F-6	(11.1)	(6.5)	—	—	2.7	灰褐 7.5Y R4／2	褐 7.5Y R4／3	燈明皿、内面にカーボン付着
22-67	土師質坏	1号堀	—	—	—	—	—	3.5	橙 2.5Y R6／6	橙 2.5Y R6／6	
22-68	土師質坏	1号堀	—	—	(6.8)	—	—	(1.5)	橙 7.5Y R7／6	橙 7.5Y R7／6	
22-69	土師質坏	1号堀	—	(7.0)	(4.8)	—	—	2.0	にぶい黄橙 10Y R6／3	にぶい黄橙 10Y R6／3	燈明皿、口縁部にカーボン付着
22-70	土師質坏	1号堀	—	(5.8)	(4.2)	—	—	1.8	にぶい橙 7.5Y R6／4	橙 7.5Y R7／6	口縁部にカーボン付着
22-71	土師質坏	1号堀	F-6	—	(6.4)	—	—	(1.7)	橙 7.5Y R7／6	橙 7.5Y R7／6	
22-72	黒色土器	1号堀	—	—	(8.0)	—	—	1.5	にぶい黄橙 10Y R7／4	オリーブ黒 5Y3／1	黒色土器Ａ類
22-73	土師質碗	1号堀	B-4	—	(7.5)	(7.9)	1.3	(2.1)	にぶい黄橙 10Y R7／4	にぶい黄橙 10Y R7／3	
22-74	瓦器碗	1号堀	B-4	—	—	(7.8)	0.6	(1.8)	灰白 10Y R8／2	灰白 10Y R8／2	
22-75	瓦質碗	1号堀	B-3	—	6.0	—	—	(3.1)	赤褐 2.5Y R4／8	赤褐 2.5Y R4／8	
22-76	土師質坏	1号堀	C-4	—	—	—	—	(0.7)	にぶい黄橙 10Y R6／3	にぶい黄橙 10Y R6／3	
22-77	土師質坏	1号堀	—	—	7.9	—	—	(1.5)	にぶい黄橙 10Y R5／3	にぶい褐 7.5Y R5／4	
22-78	土師質坏	1号堀	B-3	—	(10.5)	—	—	(1.2)	にぶい橙 7.5Y R7／4	にぶい橙 7.5Y R7／4	
22-79	土師質坏	1号堀	—	(6.2)	(3.2)	—	—	1.4	浅黄橙 10Y R8／4	浅黄橙 10Y R8／4	
23-80	火鉢	1号堀	D-4	(44.8)	—	—	—	(13.6)	浅黄 2.5Y7／3	にぶい橙 7.5Y R7／3	
23-81	火鉢	1号堀	—	43.8	—	—	—	(14.0)	灰黄 2.5Y6／2	灰黄 2.5Y7／2	
23-82	火鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(8.3)	にぶい黄 2.5Y6／3	にぶい黄 2.5Y6／3	
23-83	火鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(5.9)	にぶい黄橙 10Y R7／3	にぶい黄橙 10Y R7／3	
23-84	火鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(9.0)	黄灰 2.5Y4／1	黄灰 2.5Y4／1	

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
23-85	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(6.0)	黄灰 2.5Y4／1	灰黄褐 10YR5／2	
23-86	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(3.8)	にぶい黄橙 10YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／4	
23-87	火鉢	1号堀	B-4	―	―	―	―	(3.4)	褐灰 10YR5／1	黒 10YR2／1	
23-88	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(10.0)	灰 7.5Y4／1	灰黄 2.5Y6／2	
23-89	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(5.1)	にぶい赤褐 5YR5／4	橙 5YR6／6	
23-90	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(4.9)	灰 5Y4／1	灰 5Y4／1	
24-91	火鉢	1号堀	D-5	―	―	―	―	(7.2)	灰褐 7.5YR4／2	にぶい黄褐 10YR5／3	
24-92	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(6.4)	橙 5YR6／6	橙 5YR6／6	
24-93	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(4.3)	にぶい黄橙 10YR6／3	にぶい黄橙 10YR6／3	
24-94	火鉢	1号堀	B-2	―	―	―	―	(5.4)	黒 10YR2／1	黒 10YR2／1	
24-95	火鉢	1号堀	D-4	―	―	―	―	(6.9)	にぶい黄橙 10YR6／3	にぶい黄橙 10YR6／3	
24-96	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(8.8)	灰 5Y6／1	灰 5Y6／1	
24-97	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(7.0)	黄灰 2.5Y4／1	にぶい黄褐 10YR6／3	
24-98	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(8.7)	明赤褐 5YR5／6	にぶい黄橙 10YR6／3	
24-99	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(6.9)	にぶい黄橙 10YR7／4	灰黄褐 10YR6／2	
24-100	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(6.8)	オリーブ黒 5Y3／1	オリーブ黒 5Y3／1	
24-101	火鉢	1号堀	F-6	―	―	―	―	(8.7)	にぶい黄橙 10YR6／3	にぶい黄橙 10YR6／3	
24-102	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(4.7)	にぶい橙 7.5YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／4	
24-103	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(6.8)	黒 5Y2／1	灰 5Y4／1	
24-104	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(11.7)	にぶい黄橙 10YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／3	
24-105	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(7.0)	灰 5Y6／1	灰 5Y6／1	
25-106	火鉢	1号堀	E-5	―	―	―	―	(10.9)	にぶい橙 7.5YR6／4	にぶい橙 7.5YR6／4	
25-107	火鉢	1号堀	C-4	―	―	―	―	(5.4)	にぶい黄橙 10YR6／3	にぶい黄橙 10YR6／3	
25-108	火鉢 又は鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(3.5)	黄褐 2.5Y5／3	黄灰 2.5Y4／1	
25-109	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(5.8)	灰 5Y5／1	灰 5Y5／1	
25-110	火鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(5.6)	暗灰黄 2.5Y5／2	黄灰 2.5Y4／1	
25-111	火鉢	1号堀	D-5	―	(34.4)	―	―	(5.3)	灰黄 2.5Y7／2	灰黄 2.5Y6／2	
25-112	茶釜	1号堀	C-5 F-6	―	―	―	―	(3.0) (5.1)	黒 5Y2／1	黒 5Y2／1	
25-113	捏鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(3.9)	灰 7.5Y5／1	灰オリーブ 7.5Y6／2	東播系。14C
25-114	捏鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(5.4)	にぶい黄橙 10YR7／4	にぶい黄橙 10YR7／4	
25-115	擂鉢	1号堀	D-5	―	―	―	―	(7.7)	暗灰黄 2.5Y5／2	暗灰黄 2.5Y5／3	
25-116	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(9.5)	灰白 5Y7／1	灰白 5Y7／1	
26-117	擂鉢	1号堀	F-5 D-4	―	―	―	―	(8.9)	灰 7.5Y6／1	灰 7.5Y6／1	
26-118	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(8.1)	灰 N5／	灰 N5／	
26-119	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(6.8)	灰黄褐 10YR6／2	にぶい黄橙 10YR7／3	
26-120	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(5.5)	にぶい黄 2.5Y6／3	にぶい黄橙 10Y6／3	
26-121	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(6.5)	灰黄 2.5Y6／2	灰黄 2.5Y6／2	
26-122	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(4.9)	黄灰 2.5Y5／1	灰 5Y5／1	
26-123	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(10.1)	橙 5Y6／6	橙 5Y7／6	
26-124	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(11.1)	淡赤橙 2.5YR7／4	にぶい橙 5YR7／4	
26-125	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(7.0)	にぶい黄橙 10YR6／3	にぶい黄橙 10YR7／3	
26-126	擂鉢	1号堀	―	―	―	―	―	(7.4)	灰 5Y6／1	灰 5Y6／1	

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
26-127	擂鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(5.6)	オリーブ黒 5Y3／1	オリーブ黒 5Y3／1	
26-128	擂鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(6.0)	灰白 5Y7／1	灰白 5Y7／1	
26-129	擂鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(5.9)	灰黄 2.5Y7／2	灰黄 2.5Y6／2	
27-130	擂鉢	1号堀	D-5	—	—	—	—	(6.3)	黄灰 2.5Y5／1	黄灰 2.5Y5／1	
27-131	擂鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(4.1)	黄灰 2.5Y5／1	黄灰 2.5Y5／1	
27-132	擂鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(2.3)	黒褐 10YR3／1	褐灰 10YR5／1	
27-133	擂鉢	1号堀	—	—	(10.0)	—	—	(2.1)	灰黄 2.5Y7／1	灰白 2.5Y7／2	
27-134	擂鉢	1号堀	D-4	—	(18.6)	—	—	(2.5)	灰 5Y5／1	灰 5Y6／1	
27-135	擂鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(6.2)	灰黄 2.5Y7／2	浅黄 2.5Y7／3	
27-136	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(3.9)	にぶい黄橙 10YR7／3	黒褐 10YR3／1	内面にカーボン付着
27-137	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(6.7)	灰 N4／	灰 N4／	
27-138	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(7.6)	にぶい橙 7.5Y6／4	にぶい橙 7.5Y6／4	
27-139	甕	1号堀	F-5	—	—	—	—	(4.5)	にぶい橙 7.5Y6／4	黄灰 2.5Y5／1	
27-140	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(3.7)	灰 N6／	灰 5Y5／1	
27-141	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(3.5)	灰 7.5Y5／1	灰 7.5Y5／1	27—143と同一タイプ。
27-142	壺	1号堀	—	—	—	—	—	(4.3)	にぶい黄橙 10YR6／3	にぶい黄橙 10YR6／3	
27-143	壺	1号堀	—	—	—	—	—	(16.5)	灰 N4／	灰 N5／	接／1号溝
28-144	甕又は鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(19.9)	にぶい赤褐 5YR5／4	橙 7.5YR6／6	内外面ともにカーボン付着。
28-145	鉢	1号堀	—	—	—	—	—	(9.4)	灰 7.5Y4／1	にぶい黄橙 10YR7／4	外面はカーボン付着
28-146	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(6.3)	灰褐 7.5YR6／2	灰黄褐 10YR6／2	接／3号堀（G-5）
28-147	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(10.0)	にぶい褐 7.5YR6／3	灰黄褐 10YR6／2	
28-148	甕	1号堀	—	—	(22.0)	—	—	(10.1)	灰 N5／	灰 N5／	
29-149	甕	1号堀	—	—	(24.4)	—	—	(3.3)	灰黄褐 10YR6／2	褐灰 10YR5／1	接／道路状遺構第2面（E—6）
29-150	甕	1号堀	G-5	—	(19.8)	—	—	(6.5)	灰 N5／	灰 N5／	
29-151	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(8.4)	灰 N4／	灰 N4／	
29-152	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(8.3)	灰 5Y5／1	灰 5Y6／1	
29-153	甕	1号堀	—	—	—	—	—	(7.7)	にぶい赤褐 2.5YR4／4	灰黄褐 10YR5／2	
30-154	甕	2号堀	—	—	—	—	—	(7.9)	灰オリーブ 7.5Y6／2	灰 5Y4／1	常滑窯系
30-155	甕	3号堀	—	—	—	—	—	(6.3)	灰黄褐 10YR4／2	灰 N4／	
30-156	火鉢	3号堀	G-5	—	—	—	—	(3.0)	灰 5Y4／1	灰 5Y4／1	
30-157	白磁碗	3号堀	G-5	(17.4)	—	—	—	(5.1)	灰白	灰白	森田E
30-158	白磁坏	3号堀	—	(10.6)	—	—	—	(2.0)	灰白	灰白	接／1号堀（B-3）
30-159	土師質坏	3号堀	G-5	—	—	—	—	2.5	にぶい橙 7.5YR6／4	にぶい橙 7.5YR6／4	
30-160	甕	3号堀	—	—	—	—	—	(8.2)	暗赤灰 7.5R3／1	暗赤灰 7.5R3／1	常滑窯系
30-161	風炉	3号堀	G-8	(39.6)	—	—	—	(21.6)	灰黄褐 10YR4／2	灰黄 2.5Y6／2	接／2号堀（G-5）
30-162	青磁碗	道路状遺構	—	—	(6.1)	—	0.9	(1.9)	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類
30-163	青磁碗	道路状遺構	—	—	(5.0)	(5.6)	1.0	(2.5)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
30-164	青磁盤	道路状遺構	C-5	—	(7.4)	—	0.5	(2.5)	暗緑	暗緑	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
30-165	青磁碗	道路状遺構	E-6	—	(5.7)	(6.8)	1.3	(2.3)	明緑青	明緑青	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
30-166	青磁菊花皿	道路状遺構	B-5	—	(5.2)	(5.4)	0.5	(1.8)	灰白	灰白	
30-167	青磁碗	道路状遺構	E-6	—	—	—	—	(2.7)	明緑青	明緑青	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降 上田C—Ⅱ
31-168	壺	道路状遺構	E-6	—	—	—	—	(6.8)	暗赤褐 5YR3／2	暗赤褐 5YR3／3	備前窯系

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
31-169	甕又は壺	道路状遺構	D-6	—	—	—	—	(7.0)	にぶい赤褐 5Y R5／4	にぶい黄橙 10Y R6／3	常滑窯系
31-170	火鉢	道路状遺構	B-4	—	—	—	—	(5.9)	オリーブ黒 7.5Y3／1	オリーブ黒 7.5Y3／1	
31-171	火鉢	道路状遺構	F-6	—	—	—	—	(12.2)	にぶい黄 2.5Y6／3	黄灰 2.5Y6／1	23-81と同一タイプ
31-172	火鉢又は鉢	道路状遺構	E-6	—	—	—	—	(4.9)	灰 5Y4／1	灰 5Y4／1	
31-173	擂鉢	道路状遺構	E-6	—	—	—	—	(8.2	灰 7.5Y5／1	灰 7.5Y6／1	
31-174	擂鉢	道路状遺構	D-6	—	(14.2)	—	—	(9.3)	にぶい橙 2.5Y R6／4	橙 5Y R7／6	
31-175	甕又は鉢	道路状遺構	B-5	—	—	—	—	(9.2)	にぶい黄橙 10Y R6／3	オリーブ黒 5Y3／1	接／1号堀
31-176	壺又は甕	道路状遺構	E-6	—	—	—	—	(1.9)	灰 5Y4／1	灰 5Y4／1	
31-177	鉢	道路状遺構	E-6	—	—	—	—	(2.7)	灰白 5Y7／2	灰 5Y6／1	
31-178	甕	道路状遺構	E-6	—	—	—	—	(4.8)	灰 5Y5／1	灰 5Y5／1	
31-179	甕	道路状遺構	D-6	—	—	—	—	(12.5)	オリーブ黒 5Y3／1	灰 5Y4／1	31-182と同一個体
31-180	青磁皿	1号溝	—	(11.8)	(7.0)	(7.2)	0.9	3.4	明緑灰	明緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降元禄式皿
31-181	白磁四耳壺	1号溝	—	—	—	—	—	(4.0)	明オリーブ灰	明オリーブ灰	
31-182	火鉢	1号溝	—	—	—	—	—	(6.9)	オリーブ黒 5Y3／1	黄灰 2.5Y5／1	31-179と同一個体
32-183	擂鉢	1号溝	—	(30.2)	—	—	—	(9.7)	灰黄 2.5Y6／2	灰黄 2.5Y6／2	接／2号溝（D－6）、11号溝
32-184	擂鉢	1号溝	—	—	—	—	—	(3.9)	にぶい黄褐 10Y R5／3	にぶい黄橙 10Y R6／3	
32-185	擂鉢	1号溝	D-5	—	—	—	—	(9.1)	橙 2.5Y R7／6	橙 2.5Y R6／6	接／道路状遺構（D－6）
32-186	甕又は壺	1号溝	—	—	—	—	—	(9.3)	灰 N4／	灰 N4／	32-187と同一個体
32-187	甕又は壺	1号溝	—	—	—	—	—	(6.4)	灰 N4／	灰 N4／	32-186と同一個体
32-188	青磁碗	2号溝	—	—	—	—	—	(4.3)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類4－a
32-189	火鉢	2号溝	—	—	—	—	—	(4.4)	橙 7.5Y R7／6	にぶい橙 7.5Y R7／4	口縁部にカーボン付着
32-190	茶釜	2号溝	D-6	—	—	—	—	(6.0)	オリーブ黒 10Y3／1	灰 7.5Y4／1	
32-191	鉢	2号溝	—	—	—	—	—	(6.3)	にぶい橙 7.5Y R6／4	橙 7.5Y R6／6	内外面にカーボン付着
32-192	擂鉢	2号溝	C-6 D-6	(31.0)	—	—	—	(11.1)	灰黄 2.5Y6／2	にぶい黄橙 10Y R6／4	
32-193	擂鉢	2号溝	D-6	—	(13.0)	—	—	(5.9)	暗灰黄 2.5Y5／2	暗灰黄 2.5Y5／2	
32-194	擂鉢	2号溝	C-6	—	—	—	—	(8.8)	にぶい橙 5Y R6／3	にぶい橙 5Y R6／3	接／5号溝
33-195	甕	2号溝	C-6	—	—	—	—	(5.1)	暗灰黄 2.5Y5／2	暗灰黄 2.5Y5／2	
33-196	甕	2号溝	—	—	—	—	—	(9.2)	にぶい黄橙 10Y R6／3	にぶい黄橙 10Y R6／3	内外面にカーボン付着
33-197	土師質坏	2号溝	C-6	—	(6.8)	—	—	(2.2)	橙 5Y R7／6	橙 5Y R7／6	
33-198	青磁碗	3号溝	D-6	—	(5.9)	(6.4)	0.9	(4.0)	オリーブ灰	オリーブ灰	
33-199	青磁碗	3号溝	D-6	—	(5.3)	(5.7)	1.0	(2.7)	灰オリーブ	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類ーイ
33-200	火鉢	3号溝	—	—	—	—	—	(7.4)	にぶい黄 2.5Y6／3	にぶい黄 2.5Y6／3	
33-201	火鉢	3号溝	C-6	—	—	—	—	(6.5)	褐灰 10Y R4／1	灰黄褐 10Y R5／2	接／2号溝（C－6）
33-202	擂鉢	3号溝	—	—	—	—	—	(5.0)	黄灰 2.5Y6／1	灰黄 2.5Y6／2	
33-203	擂鉢	3号溝	—	—	—	—	—	(5.8)	灰 5Y5／1	灰 5Y5／1	
33-204	釜又は鍋	3号溝	—	—	—	—	—	(2.4)	黒褐 2.5Y3／1	灰 5Y4／1	外面にはカーボン付着
33-205	甕	3号溝	D-6	—	—	—	—	(13.7)	灰 N5／	灰 N5／	
33-206	甕	3号溝	D-6	—	—	—	—	(8.8)	暗黄灰 2.5Y5／2	黄灰 2.5Y5／1	
33-207	甕	6号溝	—	—	—	—	—	(12.5)	黄灰 2.5Y5／1	黄灰 2.5Y6／1	34-208と同一個体？
34-208	甕	7号溝	—	—	—	—	—	(12.2)	黄灰 2.5Y5／1	灰黄 2.5Y6／2	33-207と同一個体？
34-209	青磁碗	8号溝	—	—	(6.2)	(7.4)	1.6	(3.0)	オリーブ灰	オリーブ灰	無文ならば上田D－Ⅱ
34-210	擂鉢	8号溝	—	—	—	—	—	(5.5)	灰 N5／	灰 N5／	内面にカーボン付着

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
34-211	甕	8号溝	―	―	―	―	―	(12.7)	灰 10Y6／1	灰白 10Y7／1	
34-212	土師質坏	8号溝	―	(6.8)	(5.0)	―	―	1.4	にぶい橙 7.5Y R6／4	橙 5Y R6／6	燈明皿、口縁部にはカーボン付着
34-213	土師質坏	8号溝	―	(6.6)	(5.2)	―	―	1.8	橙 5Y R6／6	橙 5Y R6／6	
34-214	土師質坏	8号溝	―	(6.7)	(5.8)	―	―	2.0	橙 7.5Y R6／6	橙 7.5Y R6／6	燈明皿、口縁部にはカーボン付着
34-215	土師質坏	8号溝	―	(9.9)	(5.8)	―	―	2.0	にぶい橙 7.5Y R6／4	にぶい橙 7.5Y R6／4	
34-216	土師質坏	8号溝	―	―	―	―	―	(1.2)	橙 2.5Y R6／6	にぶい橙 5Y R6／4	
34-217	火鉢	9号溝	―	―	―	―	―	(5.6)	灰 5Y6／1	灰 5Y5／1	
34-218	擂鉢	9号溝	―	―	―	―	―	(4.5)	にぶい黄橙 10Y R6／4	にぶい黄橙 10Y R6／4	
34-219	甕	9号溝	―	―	―	―	―	(9.4)	灰 7.5Y4／1	灰 7.5Y6／1	
34-220	壺	9号溝	―	―	―	―	―	(10.5)	灰 N5／	灰 N5／	
35-221	青磁碗	11号溝	―	―	(6.0)	(6.4)	1.3	(2.1)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類ーイ
35-222	青磁碗 又は坏	11号溝	―	―	7.6	―	0.5	(1.8)	緑灰	緑灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類
35-223	青磁碗	11号溝	―	―	―	―	―	(3.0)	緑褐色	緑褐色	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類ーイ
35-224	青磁香炉	11号溝	―	―	(5.4)	(5.6)	0.5	(2.5)	明オリーブ灰	明オリーブ灰	
35-225	青磁碗	11号溝	―	―	―	―	―	(2.2)	灰緑	灰緑	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
35-226	白磁坏	11号溝	―	―	―	―	―	(2.9)	明オリーブ灰	明オリーブ灰	森田Ｃ
35-227	青白磁 合子	11号溝	H-7	―	―	―	―	(1.6)	明青白色	明青白色	
35-228	青磁盤	11号溝	―	(22.2)	―	―	―	(3.9)	青緑色	青緑色	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
35-229	青磁碗	11号溝	H-7	―	―	―	―	(4.3)	オリーブ灰	オリーブ灰	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類ｂ
35-230	青磁碗	11号溝	―	―	―	―	―	(2.7)	にぶい黄	にぶい黄	上田Ｂ－Ⅱ
35-231	火鉢	11号溝	―	―	―	―	―	(7.2)	灰黄 2.5Y6／2	にぶい黄橙 10Y R6／3	
35-232	火鉢	11号溝	―	―	―	―	―	(7.0)	灰 5Y4／1	灰 5Y4／1	35-233と同一タイプ？
35-233	火鉢	11号溝	―	―	―	―	―	(6.2)	灰 5Y4／1	オリーブ黒 5Y3／1	35-232と同一タイプ？
35-234	茶釜 又は壺	11号溝	―	―	―	―	―	(6.2)	にぶい黄橙 10Y R6／4	にぶい黄橙 10Y R6／4	
35-235	茶釜	11号溝	―	―	―	―	―	(10.9)	灰 5Y6／1	灰 5Y6／1	
35-236	擂鉢	11号溝	―	―	―	―	―	(9.5)	灰黄 2.5Y6／2	黄灰 2.5Y5／1	
35-237	擂鉢	11号溝	―	―	―	―	―	(7.3)	にぶい黄橙 10Y R6／3	灰 5Y4／1	
35-238	擂鉢	11号溝	―	―	―	―	―	(2.6)	灰 N5／	灰 N5／	
35-239	甕	11号溝	―	―	―	―	―	(3.4)	オリーブ黒 5Y3／1	オリーブ黒 5Y3／1	常滑窯系
35-240	甕	11号溝	―	―	―	―	―	(8.5)	にぶい褐 7.5Y5／3	にぶい褐 7.5Y5／3	備前窯系
36-241	甕	11号溝	―	―	―	―	―	(6.9)	灰 5Y4／1	灰 5Y4／1	
36-242	甕	11号溝	―	―	―	―	―	(6.7)	灰 5Y4／1	灰 5Y4／1	
36-243	甕	11号溝	―	―	―	―	―	(4.0)	灰 7.5Y5／1	灰 7.5Y6／1	
36-244	甕	11号溝	―	―	―	―	―	(1.4)	にぶい赤褐 5Y R5／4	灰黄 2.5Y6／2	
36-245	土師質皿	11号溝	H-7	(7.4)	(5.1)	―	―	2.3	橙 5Y R6／6	橙 5Y R7／6	
36-246	青磁碗	13号溝	―	―	―	―	―	(5.1)	緑青	緑青	上田Ｄ－Ⅱ
36-247	青磁碗	13号溝	G-8	―	―	―	―	(5.1)	オリーブ灰	オリーブ灰	上田Ｄ－Ⅱ
36-248	青磁碗	13号溝	―	―	―	―	―	(4.8)	灰オリーブ	灰オリーブ	上田Ｄ－Ⅱ
36-249	青磁碗	13号溝	G-8	―	―	―	―	(4.5)	オリーブ灰	オリーブ灰	上田Ｄ－Ⅱ
36-250	青磁盤	13号溝	―	―	(8.7)	―	―	(2.3)	暗緑	暗緑	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類以降
36-251	青磁大碗	13号溝	―	―	(6.2)	―	1.0	(3.8)	灰オリーブ	灰オリーブ	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅳ類？
36-252	白磁皿	13号溝	―	―	(7.6)	(8.1)	1.0	(1.9)	灰白	灰白	

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
36-253	甕又は壺	13号溝	—	—	—	—	—	(5.1)	黒褐 7.5Y R3／1	褐灰 7.5Y R4／1	常滑窯系
36-254	火鉢	13号溝	G-8	—	—	—	—	(8.2)	暗灰黄 2.5Y5／2	灰 5Y4／1	
36-255	火鉢	13号溝	—	—	—	—	—	(4.5)	にぶい黄褐 10Y R5／3	にぶい黄褐 10Y R5／3	
36-256	火鉢	13号溝	G-8	—	—	—	—	(4.7)	暗灰黄 2.5Y5／2	黄灰 2.5Y4／1	
36-257	火鉢	13号溝	G-8	—	—	—	—	(4.7)	黄灰 2.5Y4／1	黒褐 2.5Y3／1	
36-258	火鉢	13号溝	—	—	—	—	—	(5.4)	オリーブ黒 5Y3／1	黒 5Y2／1	
37-259	火鉢	13号溝	—	—	—	—	—	(3.2)	灰 5Y5／1	灰 5Y6／1	
37-260	火鉢	13号溝	—	—	—	—	—	(6.8)	灰 N4／	黄灰 2.5Y6／1	
37-261	火鉢	13号溝	G-8	—	—	—	—	(5.5)	黒 2.5Y2／1	暗灰黄 2.5Y5／2	
37-262	羽釜	13号溝	G-8	29.0	(11.6)	—	—	14.5	灰 7.5Y4／1	灰白 5Y7／2	接／14号溝、外面にカーボン付着
37-263	茶釜	13号溝	G-8	—	—	—	—	(7.4)	黒褐 2.5Y3／1	黒褐 2.5Y3／1	
37-264	釜又は茶釜	13号溝	—	—	—	—	—	(3.3)	褐灰 10Y R4／1	灰 5Y6／1	
37-265	鉢	13号溝	—	—	—	—	—	(6.4)	にぶい褐 7.5Y R6／3	にぶい褐 7.5Y R6／3	
37-266	擂鉢	13号溝	G-8	—	—	—	—	(5.9)	にぶい黄橙 10Y R6／3	にぶい黄橙 10Y R7／4	
37-267	擂鉢	13号溝	—	(28.9)	—	—	—	(10.1)	灰黄褐 10Y R6／2	灰白 10Y R7／2	35—223と同一個体か？
38-268	擂鉢	13号溝	—	(31.2)	(13.4)	—	—	(11.8)	灰黄 2.5Y7／2	灰白 2.5Y8／2	
38-269	擂鉢	13号溝	—	—	—	—	—	(6.9)	灰 7.5Y6／1	灰白 7.5Y7／1	
38-270	擂鉢	13号溝	G-8	—	—	—	—	(7.2)	灰 5Y6／1	灰 5Y6／1	
38-271	捏鉢	13号溝	G-8	—	—	—	—	(4.5)	灰黄 2.5Y6／2	にぶい黄 2.5Y6／4	
38-272	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(6.8)	灰 5Y5／1	灰 5Y5／1	
38-273	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(3.3)	黄灰 2.5Y5／1	黄灰 2.5Y6／1	
38-274	甕	13号溝	G-8	—	—	—	—	(4.8)	灰 5Y5／1	灰 5Y5／1	
38-275	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(4.5)	にぶい橙 7.5Y R6／4	にぶい黄 2.5Y6／3	
38-276	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(2.7)	灰 5Y5／1	灰 5Y5／1	
38-277	甕	13号溝	G-8	—	—	—	—	(4.4)	灰 5Y4／1	暗灰黄 2.5Y5／2	
38-278	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(10.3)	灰黄 2.5Y6／2	灰黄 2.5Y7／2	
38-279	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(10.7)	灰 7.5Y5／1	灰 7.5Y6／1	
38-280	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(5.2)	黄灰 2.5Y4／1	黄灰 2.5Y4／1	
38-281	甕	13号溝	—	—	—	—	—	(7.0)	灰 5Y6／1	灰 5Y6／1	
39-282	甕	13号溝	G-8	—	—	—	—	(13.1)	黄灰 2.5Y4／1	黄灰 2.5Y4／1	内外面共にカーボン付着 接／11号溝
39-283	壺	13号溝	—	—	(13.3)	—	—	(13.9)	黄灰 2.5Y6／1	暗灰黄 2.5Y5／2	接／8号溝、11号溝
39-284	土師質坏	13号溝	—	(11.6)	(7.4)	—	—	2.3	橙 2.5Y R7／6	赤橙 10R6／8	
39-285	擂鉢	14号溝	—	—	—	—	—	(7.1)	にぶい黄橙 10Y R6／4	にぶい黄橙 10Y R7／3	
39-286	鍔	14号溝	—	—	—	—	—	(1.6)	灰 5Y6／1	灰 5Y6／1	
39-287	土師質坏	5号土坑	E-4	(10.5)	—	—	—	(2.1)	橙 7.5Y R6／6	橙 7.5Y R6／6	
39-288	土師質坏	5号土坑	E-4	(11.2)	—	—	—	(2.3)	橙 7.5Y R7／6	にぶい橙 7.5Y R7／4	
39-289	火鉢	6号土坑	C-6 D-6	—	—	—	—	(7.1)	黄灰 2.5Y4／1	黄灰 2.5Y5／1	
39-290	青磁碗	7号土坑	D-6	—	—	—	—	(2.9)	淡緑青	淡緑青	上田Ｃ—Ⅱ 接／道路状遺構
39-291	擂鉢	7号土坑	D-6	—	10.4	—	—	(2.8)	にぶい黄橙 10Y R6／4	にぶい褐 7.5Y R5／4	
40-292	青磁碗	10号土坑	G-6	—	—	—	—	(4.9)	淡緑青	淡緑青	上田Ｃ—Ⅱ
40-293	青磁碗	10号土坑	G-6	—	(6.0)	(6.4)	—	(2.5)	オリーブ黄	オリーブ黄	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類2～4
40-294	火鉢	10号土坑	G-6	—	—	—	—	(5.0)	灰黄 2.5Y7／2	黄灰 2.5Y6／1	

報番	器種	遺構	グリッド	法量（cm）					色調		備考
				口径	底径	高台径	高台高	器高	外面	内面	
40-295	擂鉢	10号土坑	G-6	—	(12.6)	—	—	(5.1)	黄灰 2.5Y5／1	灰黄 2.5Y6／2	
40-296	甕	10号土坑	G-6	—	—	—	—	(6.8)	黄灰 2.5Y5／1	灰 7.5Y4／1	
40-297	土師質坏	1号土壙墓	G-5.6	7.1	4.8	—	—	2.1	橙 7.5YR6／6	橙 7.5YR6／6	燈明皿、口縁部にカーボン付着
40-298	土師質坏	1号土壙墓	G-5.6	7.0	4.6	—	—	2.0	橙 7.5YR6／6	橙 7.5YR6／6	燈明皿、口縁部にカーボン付着
40-299	白磁四耳壺	—	I-8	—	—	—	—	(4.6)	緑灰	オリーブ灰	III類
40-300	天目碗	—	H-7	—	—	—	—	(1.9)	オリーブ黒	オリーブ黒	
40-301	天目碗	—	H-8	—	3.6	4.7	—	(2.6)	にぶい黄橙	黒	
40-302	青磁碗	—	G-5	—	(5.4)	(5.7)	1.0	(2.0)	灰オリーブ	オリーブ黄	太宰府編年龍泉窯系青磁碗I類2～4
40-303	浅鉢	—	G-5	—	—	—	—	(5.2)	にぶい橙 7.5YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／3	
40-304	鉢	—	F-6	—	—	—	—	(4.9)	にぶい橙 7.5YR7／4	にぶい橙 7.5YR6／4	
40-305	火鉢	—	D-5	—	—	—	—	(3.2)	褐灰 10YR4／1	黒褐 10YR3／1	
40-306	火鉢	—	D-6	—	—	—	—	(3.3)	にぶい黄橙 10YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／4	
40-307	擂鉢	—	D-3	—	—	—	—	(9.6)	にぶい黄橙 10YR6／4	にぶい黄橙 10YR6／4	内外面共にカーボン付着

第5表　石製品観察表

報番	器種	遺構	層位	グリッド	法量（cm）				備考
					タテ	ヨコ	アツミ	重量（g）	
41-1	石鍋	1号堀	下層	F-6	2.0～	4.2～	1.4～	19.0	
41-2	石鍋	1号堀	下層	C-4	1.3～	5.4～	1.1～	10.7	
41-3	石鍋	4号土坑	—	—	2.4～	4.2～	1.1～	14.6	
41-4	石鍋	4号土坑	—	—	4.1～	5.7～	1.6	56.9	
41-5	石臼	1号堀	下層	—	8.7～	4.0～	4.9～	162.9	
41-6	石臼	1号堀	下層	B-3	8.5～	3.4～	3.6～	87.4	
41-7	石臼	1号堀	下層	—	5.3～	3.8～	3.2～	67.9	
41-8	石臼	—	3層	B-5	9.8～	5.5～	3.6～	184.0	
41-9	石臼	—	—	I-8	14.3～	8.5～	8.5～	1114.1	
41-10	砥石	道路状遺構	—	B-5	5.9～	6.1	1.9	121.6	4面使用
41-11	砥石	1号堀	下層	—	4.7～	4.8～	3.3～	93.1	3面使用
41-12	砥石	1号堀	上層	D-5	3.9～	1.6～	3.0～	22.8	4面使用
41-13	砥石	1号堀	下層	—	4.2～	4.0～	1.1～	30.0	1面使用・天草陶石
41-14	砥石	1号堀	下層	—	3.3～	5.1～	1.5～	25.4	2面使用・天草陶石
42-15	砥石	4号土坑	—	—	24.3～	6.3～	10.7～	1657.0	加工面・比熱あり
42-16	砥石	道路状遺構	—	—	6.8～	3.9～	3.1～	128.2	3面使用
42-17	砥石	11号溝	—	—	6.7～	5.1～	2.5～	89.4	2面使用・天草陶石
42-18	碁石	1号堀	上層	—	1.6	1.6	0.6	2.6	
42-19	碁石	—	3層	F-5	1.8	2.0	0.7	3.7	

第６表　金属製品観察表

報番	器種	遺構	層位	グリッド	法量（cm）			備考
					タテ	ヨコ	アツミ	
43-1	不明青銅器	1号堀	上層	—	15.0～	0.7	0.2	
43-2	不明青銅器	1号堀	上層	—	—	1.0	0.1	
43-3	不明青銅器	—	3層	G－7	2.9～	0.4	0.6	
43-4	笄	11号溝	下層	—	11.1	1.2	0.2	
43-5	和鏡	13号溝	下層	G－9	—	—	0.3	
43-6	刀子	1号堀	上層	—	5.5～	1.1	0.3	
43-7	鉄刀	1号堀	上層	B－4	5.4～	2.6	0.3	
43-8	刀子	11号溝	—	—	7.6～	1.3	0.5	
43-9	刀子	11号溝	—	—	13.6	1.3	0.3	
43-10	錐	1号堀	上層	—	11.0	0.6	0.5	
43-11	鉄釘	1号堀	下層	—	9.1～	0.5	0.5	
43-12	鉄釘	1号堀	下層	—	8.3～	0.7	0.7	
43-13	鉄釘	1号堀	上層	—	6.2～	0.3	0.3	
43-14	鉄釘	1号堀	上層	—	6.0～	0.5	0.5	
43-15	鉄釘	1号堀	下層	—	4.4～	0.4	0.5	
43-16	鉄釘	1号堀	上層	—	4.6～	0.7	0.4	
43-17	鉄釘	1号堀	上層	—	2.6～	0.6	0.5	
43-18	鉄釘	1号堀	上層	B－3	2.4～	0.5	0.5	
43-19	鉄釘	1号堀	下層	—	3.0～	0.6	0.3	
43-20	鉄釘	1号堀	上層	—	4.0～	0.3	0.3	
43-21	鉄釘	1号堀	下層	—	3.8～	0.4	0.4	
43-22	鉄釘	1号堀	上層	—	3.6～	0.5	0.5	
43-23	鉄釘	1号堀	上層	—	3.5～	0.3	0.3	
43-24	鉄釘	1号堀	下層	—	3.2～	0.7	0.5	
43-25	鉄釘	1号堀	上層	—	4.3～	0.4	0.4	
43-26	鉄釘	1号堀	上層	—	3.8～	1.1	0.8	
43-27	鉄釘	1号堀	下層	—	3.1～	0.4	0.4	
43-28	鉄釘	1号堀	下層	—	3.2～	0.4	0.3	
43-29	鉄釘	1号堀	上層	—	2.5～	0.6	0.4	
43-30	鉄釘	1号堀	上層	—	3.5～	0.3	0.3	
44-31	鉄釘	2号溝	上層	D－6	7.7～	0.6	0.4	
44-32	鉄釘	1号溝	—	—	6.1～	0.7	0.6	
44-33	鉄釘	1号溝	—	—	4.5～	0.6	0.6	
44-34	鉄釘	1号溝	—	—	4.1～	0.5	0.4	
44-35	鉄釘	9号溝	—	—	9.6～	0.6	0.7	
44-36	鉄釘	11号溝	—	—	6.8～	0.5	0.5	
44-37	鉄釘	13号溝	—	G－8	5.1～	0.4	0.5	
44-38	鉄釘	7号土坑	上層	D－6	6.0～	0.3	0.3	
44-39	鉄釘	—	3層	E－4	5.2～	0.5	0.4	
44-40	鉄釘	—	3層	C－5	6.5	0.5	0.4	
44-41	鉄釘	—	—	H－8	8.6～	0.8	0.6	
44-42	鉄釘	—	表土	—	9.8～	0.7	0.8	
44-43	不明鉄器	11号溝	—	—	4.0	1.3	0.3	
44-44	鉄鏃	1号堀	上層	—	4.3～	1.4	0.2	
44-45	鉄鏃	1号堀	上層	—	2.5～	1.3	0.3	
44-46	不明鉄器	1号堀	上層	D－5	3.5～	3.6	0.1	
44-47	不明鉄器	1号堀	上層	—	3.8～	1.6	0.3	
44-48	不明鉄器	1号堀	下層	F－6	4.2～	1.4	0.3	
44-49	不明鉄器	1号堀	下層	C－4	6.5～	0.5	0.5	
44-50	不明鉄器	1号堀	下層	—	3.2～	0.9	0.5	
44-51	不明鉄器	1号堀	上層	—	3.5～	1.3	0.1	
44-52	不明鉄器	13号溝	—	—	3.0	0.8	0.3	
44-53	不明鉄器	11号溝	—	—	4.1～	0.7	0.3	
44-54	不明鉄器	2号溝	上層	D－6	4.3～	1.7	0.4	
44-55	不明鉄器	7号土坑	上層	D－6	3.9～	1.0	0.3	
44-56	不明鉄器	—	表土	—	4.6～	1.4	0.3	
44-57	不明鉄器	—	3層	G－7	5.7～	0.8	0.5	
44-58	不明鉄器	—	—	H－6	4.4～	2.5	1.2	

第　Ⅳ　章

船入遺跡出土人骨について

熊本県西合志町船入遺跡出土の中世人骨

松下孝幸*

キーワード：熊本県、中世人骨、土壙墓、側臥、長頭型、歯槽性突顎、低身長

はじめに

熊本県菊池郡西合志町大字須屋字船入（ふないり）に所在する船入遺跡の発掘調査が、国道３号熊本北バイパス改築工事に伴って2001年（平成13年）から2002年にかけておこなわれ、土壙墓から人骨３体が出土した。保存状態は３体ともよいものではなかったが、それぞれ人骨を検出することが可能であり、残存していた骨を現場で同定することができた。

熊本県での中世人骨の報告例は少なく、荒尾市浄業寺（永井、1965）、宇土市緑川（故松野・他、1970）、城南町尾窪（内藤、1973）、塚原（内藤、1975）、荒尾市杉谷（内藤・他、1978）、興善寺町馬場（松下、1980）、深田村灰塚（松下、2001）があるにすぎない。尾窪から出土した中世人骨は比較的保存状態も良好で、神奈川県鎌倉市の材木座遺跡でみられた中世人骨の特徴である、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎がみられることがわかり、長頭性、鼻根部の扁平性、歯槽性突顎は関東地方だけにみられる地域的特徴ではなく、汎日本的な中世人の時代的特徴であることを示した貴重な例である。本町の近隣では植木町の松本遺跡から中世人骨が出土している。また、最近は熊本市内の二本木第８次調査区、同第13次調査区、同第14次調査区および上高橋遺跡、南新宮遺跡からも中世人骨が出土している。

本中世人骨は保存状態はけっして良好なものではなかったが、筆者が現場へおもむき、残存していた人骨の同定、埋葬姿勢の確認や性別などの推測をおこなうことができたので、その結果を報告しておきたい。

資　料

今回の調査で検出された人骨は合計３体である。表１に示すとおり、３体とも成人骨で、２体は男性骨、残り１体は女性骨である。保存状態はいずれもよくないが、３体とも現場で実際に人骨を掘り出すなどして、観察することができた。

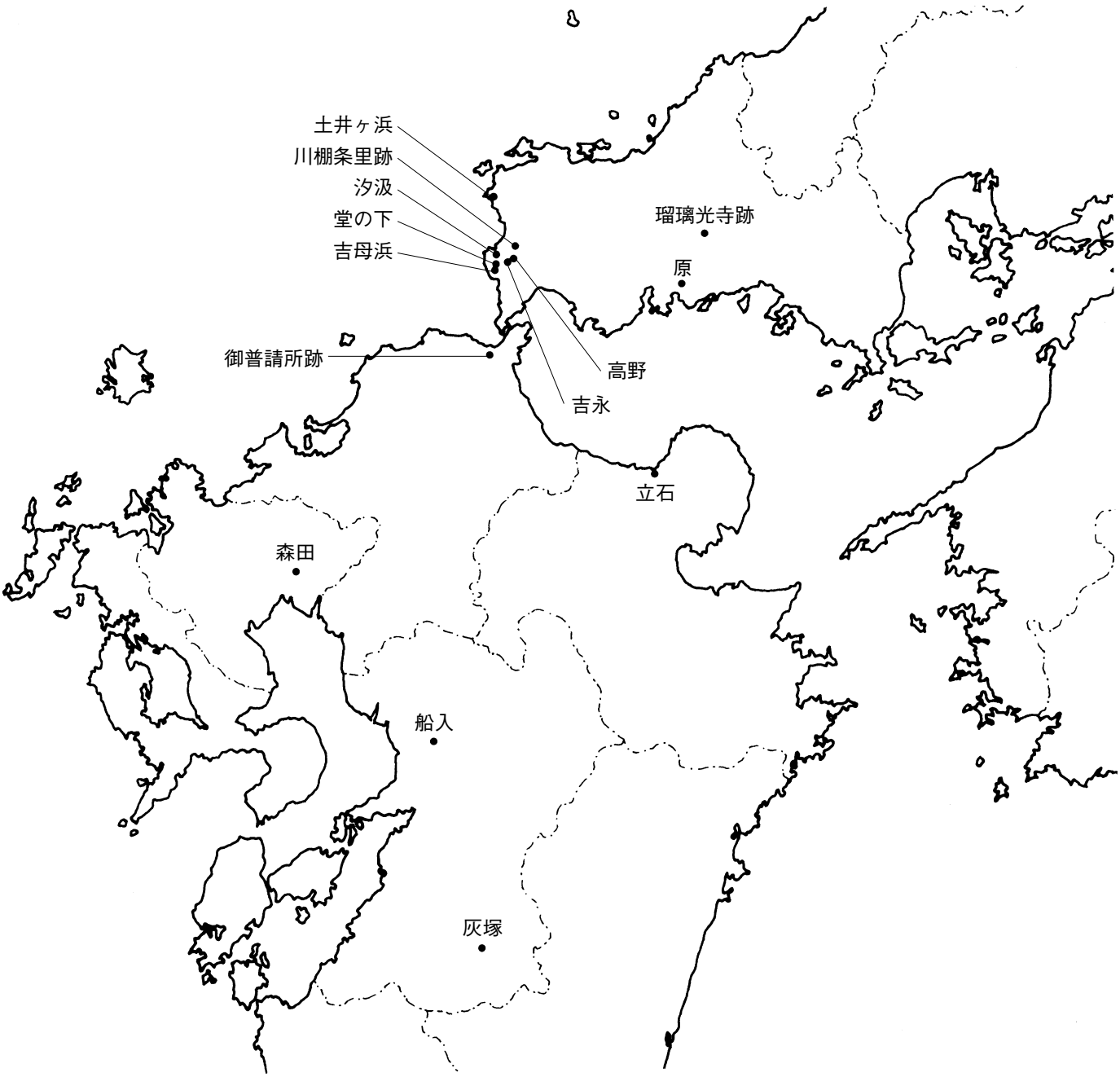
表１　出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢	備考（頭型、推定身長値など）
１号土壙墓	男性	壮年	側臥屈葬（右が下）　長頭型、歯槽性突顎、153㎝～154㎝
３号土壙墓	男性	熟年	側臥屈葬（右が下）　歯槽性突顎
２号土壙墓	女性	壮年	側臥屈葬（右が下）　長頭型、歯槽性突顎

この３体の人骨は、考古学的所見より、中世に属する人骨である。

なお、性判別については所見の項でそれぞれの個体ごとにその推定根拠を挙げた。年齢区分に関しては表２の基準のとおりである。

＊　Takayuki　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム〕



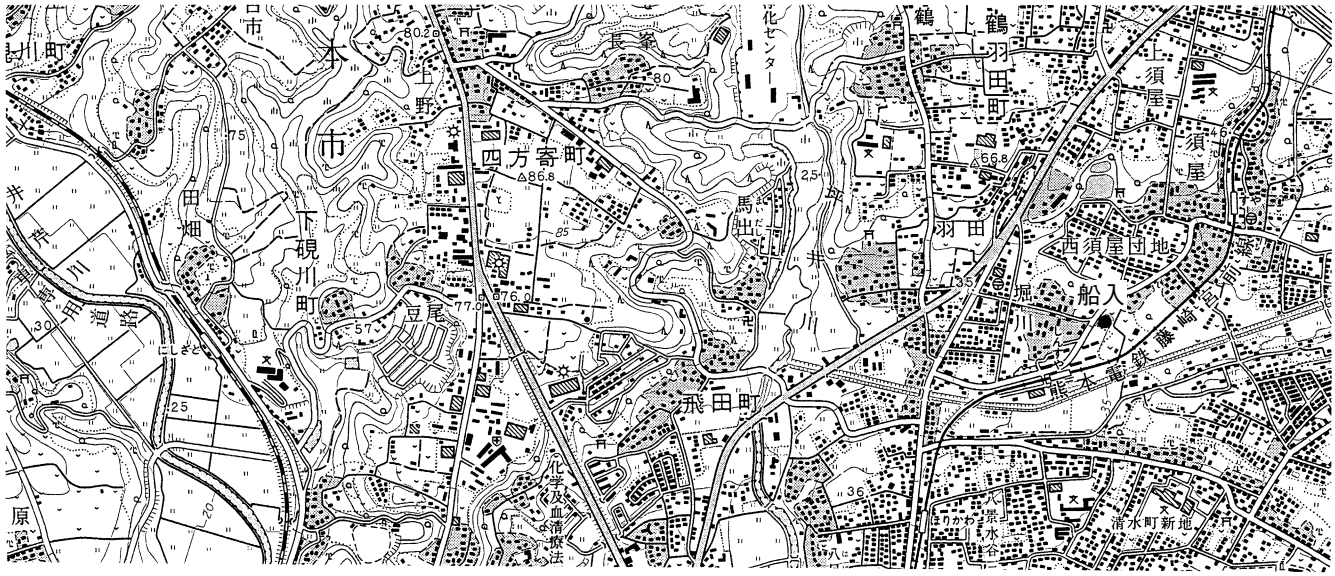


図１　遺跡の位置（１／25,000）（Fig.1 Location of the Funairi site, Nishi-goshi Cho, Kumamoto Prefecture）

表２　年齢区分　（Table 2. Division of age）

年齢区分		年　　齢	
未成人	乳児	１歳未満	
	幼児	１歳～５歳	（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	６歳～15歳	（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳	（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21歳～39歳	（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳	（60歳未満）
	老年	60歳以上	

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

所　見

１号土壙墓人骨（男性・壮年）

１．出土状態（埋葬の姿勢）

150㎝×120㎝の大きな隅丸方形の土壙墓から検出された。土壙墓の径が大きくまた、深さは80㎝もあり、墓坑の深さも深い。このように大きな墓坑から出土する中世人骨の例は珍しく、最近調査した例では山口県豊北町中平尾（なかひらお）遺跡で検出された例があるぐらいである。

人骨は北頭位。人骨の検出状況は、左側寛骨が上に、右側寛骨が下になった側臥状態で検出された。下肢骨は膝関節を曲げ、右側を下にした状態で、右側に倒れていた。しかし、腰から上の上半身は少しは右側に捻ってはいたが、ほとんど仰臥状態で、頭蓋も正面を向いていた。結果的には上半身は仰臥、下半身は側臥という姿勢である。埋葬の姿勢（体位）は骨盤の状態で決定するべきものなので、本例は側臥屈葬という表現をすることになる。なお、このような姿勢で死去するとは考えがたいし、死後このような姿勢にするのも不自然であることから、この姿勢は死後硬直が解けたあとに埋葬したことを物語っているものと思われる。右側の前腕骨はほとんど残っていないが、右側の下顎骨の下方に指骨らしい骨が確認できたので、左側の肘関節は鋭角に曲げられていたようである。右側の肘関節はおそらく直角に曲げられていたものと思われる。膝関節は曲げられて、右側に倒れていた。なお、土師質皿（燈明皿）２枚が副葬されていた。

２．人骨所見

人骨はほぼ全身が残っていたが、骨粉状になっているものが多く、取り上げができない。残っていたのは頭蓋、左右の鎖骨、右側の肩甲骨、両側の上腕骨、左側の前腕骨、椎骨（脊柱）、左側寛骨、両側の大腿骨と脛骨である。椎骨は骨粉状態だった。

頭蓋は原型を保ったまま取り上げることができなかったが、観察したところ、頭蓋は長さが長く、頭型は長頭型であった。外後頭隆起部が残っていたが、外板が剥離しており、隆起の程度は不明である。乳様突起の大きさも不明である。左右の外耳道の観察ができたが、骨腫は両側とも存在しない。ラムダ縫合の観察が可能で、内外両板ともまだ開離していた。鼻根部の観察はできなかったが、上顎骨が残っており、歯槽性突顎が観察できた。下顎骨も一部が残存していた。下顎には歯も釘植しており、遊離歯も存在する。歯槽の状態と残存歯を歯式で示した。

／	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　▼：先天的欠損　■：未萌出　／：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は下顎の切歯と小臼歯はBrocaの2～3度であるが、その他の歯は1度で、咬耗状態は歯種によって異なっている。また、大臼歯の歯頸部にはひどい齲食が認められる。上顎切歯にはほとんど咬耗が認められないことからも、歯槽性突顎の傾向がうかがえる。

四肢骨はそれほど大きいものではなく、大腿骨頭も著しく大きいものではない。

性別は、下顎骨が大きいので男性と推定した。年齢はラムダ縫合の内外両板が開離していたことから、壮年と思われる。また、大腿骨の最大長をおおよそ推測して、現場で計測したところ左側の最大長は38㎝～39㎝程度であった。これから算出した身長値は153㎝から154㎝程度で、これはかなりの低身長である。

3号土壙墓人骨（男性・熟年）

1．出土状態（埋葬の姿勢）

人骨は南頭位。他の2体とは頭の向きが逆になっていた。埋葬姿勢は右を下にした側臥屈葬。膝関節は強屈していたが、肘関節の様態は不明である。残っていたのは、頭蓋、左側の上腕骨、左右不明の前腕骨の一部、左右の大腿骨と脛骨の一部、椎骨（脊柱）の痕跡と左側の寛骨であるが、寛骨はほとんど痕跡状態であった。また、おそらく左側と思われる足の骨の痕跡もみられた。頭蓋も右側を下にした状態で検出された。頭蓋はやや長そうである。鼻根の様態は不明であるが、歯槽性突顎がみられる。大腿骨は短く、本例もおそくら小柄だったと思われる。

2．人骨所見

頭蓋は、脳頭蓋や上顎骨などが残っていた。骨壁は厚い。外後頭隆起はよく発達している。乳様突起の大きさは不明である。両側の外耳道の観察ができたが、骨腫は両側とも存在しない。上顎骨歯槽突起と下顎骨歯槽部および遊離歯も残っていた。歯槽の状態と残存歯を歯式で示した。

❽	❼	6	❺	❹	3	❷	1	1	／	／	／	／	／	／	8
❽	7	❻	5	4	3	2	1	1	2	3	／	5	6	7	／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　▼：先天的欠損　■：未萌出　／：不明、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

上顎右側第一大臼歯は残根状態で、咬耗度はBrocaの4度であるが、その他の歯は2度から3度である。上顎中切歯（右）には舌側歯頸部に深く抉られた部分が認められた。これは歯槽性突顎のために上顎切歯の歯頸部に下顎切歯があたっていたために生じたものと思われる。

大腿骨体の一部を取り上げることができたが、保存状態が悪く特徴は不明である。

性別は、外後頭隆起がやや隆起していたことと現場で観察したところ大腿骨の径が大きかったので、男性と推定した。年齢は観察できた冠状縫合の一部で、内板に癒合閉鎖がみられたことから熟年と推定した。

２号土壙墓（女性・壮年）

１．出土状態（埋葬の姿勢）

人骨は北頭位。人骨は珍しい姿勢で検出された。頭蓋は高い位置にあり、腰から下肢にかけて低くなっており、上半身が傾斜した状態で検出されたのである。要するに人骨が斜めになっていた。寛骨などの下肢骨が残っていなかったので、埋葬姿勢は明確ではないが、椎骨（脊柱）が左側にカーブしており、左側上腕骨の位置から推測すれば、姿勢は右側を下にした側臥だった可能性が強い。頭蓋も右側を下にした状態であった。

２．人骨所見

残っていたのは頭蓋、下顎骨、左側の上腕骨、寛骨の一部、椎骨（脊柱）である。上腕骨はやや長いが、骨体は細い。下肢骨は残っていなかった。頭蓋は土圧でややつぶれていたが、径は小さく、おそらく頭型は長頭型と思われる。鼻根部は不明だが、歯槽性突顎がみられる。頭蓋壁はかなり薄い。外後頭隆起が観察できたが、突出は弱い。両側の外耳道が観察できたが、左右とも骨腫は存在しない。ラムダ縫合が観察できたが、内外両板とも開離している。遊離歯が残存していた。歯式で示すと次のとおりである。

／	／	／	5	／	／	／	／	1	／	3	／	／	6	／
／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	3	4	／	／	／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　▼：先天的欠損　■：未萌出　／：不明、番号は歯種〕

〔１：中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕

歯のサイズはかなり大きい。咬耗度は Broca の１～３度である。歯の咬合形式は不明である。

性別は、頭蓋の径が小さいこと、左側上腕骨が細いことから、女性と推定した。年齢はラムダ縫合の内外両板が開離していることから、壮年と思われる。

要　約

熊本県菊池郡西合志町大字須屋字船入（ふないり）にある船入遺跡の発掘調査で土壙墓が検出され、人骨３体が出土した。保存状態は３体ともよいものではなかったが、残存していた人骨を現場で発掘し、骨の同定をおこなうことができた。人類学的観察をおこない、次の所見を得た。

１．土壙墓が３基検出され、成人骨が３体出土した。３体のうち２体は男性骨で、１体は女性骨であった。

２．この３体の人骨は、考古学的所見から、中世（14世紀）に属する人骨である。

３．３体とも埋葬姿勢は右を下にした側臥で、２体は膝関節を曲げていた（屈葬）。

４．３基の土壙墓のうち１基（１号土壙墓）は、大きく深い墓坑であった。また、１基（２号土壙墓）は上肢が上方に、下肢が下方になるように斜めに埋葬されていた。このような埋葬状態はきわめて珍しい。

５．保存状態が悪かったので、形質的特徴の情報は少ないが、３体ともに歯槽性突顎がみられた。また、長頭型と思われるものが２体（１号土壙墓・男性、２号土壙墓・女性）存在した。

６．現場で大腿骨の最大長を計測することができたものが１体（１号土壙墓）あった。この男性の推定身長値は153㎝から154㎝程度で、中世人としてはかなりの低身長であった。

７．今回出土した中世人骨は、人骨を現場で確認することはできたが、取り上げに耐えられるほど丈夫なものではなかった。現場で観察したところ、長頭性、歯槽性突顎を認めることができたが、鼻根部は観察することができなかった。また、顔の高さも不明である。身長値は、男性１体はかなりの低身長で、もう１体の男性も小柄であったようである。

謝辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課の皆様方に感謝致します。

≪参考文献≫

1．松下孝幸、1980：熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺Ⅰ（熊本県文化財調査報告第45集）：145－159.

2．松下孝幸、2001：熊本県深田村灰塚遺跡出土の中世人骨。灰塚遺跡（Ⅱ）（熊本県文化財調査報告第197集）：239－245.

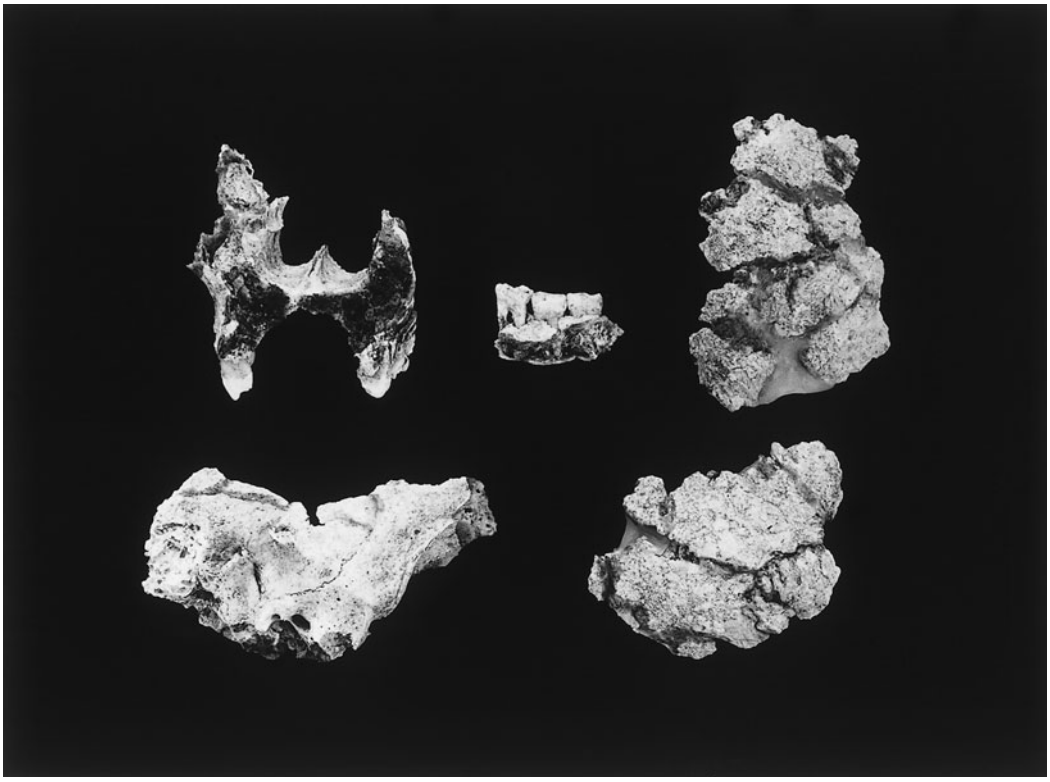
3．故松野茂・他、1970：熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌、44：999－1016.

4．永井昌文、1965：荒尾市淨業寺中世人骨について。淨業寺と小代氏（荒尾市文化財報告第１集）：51－53.

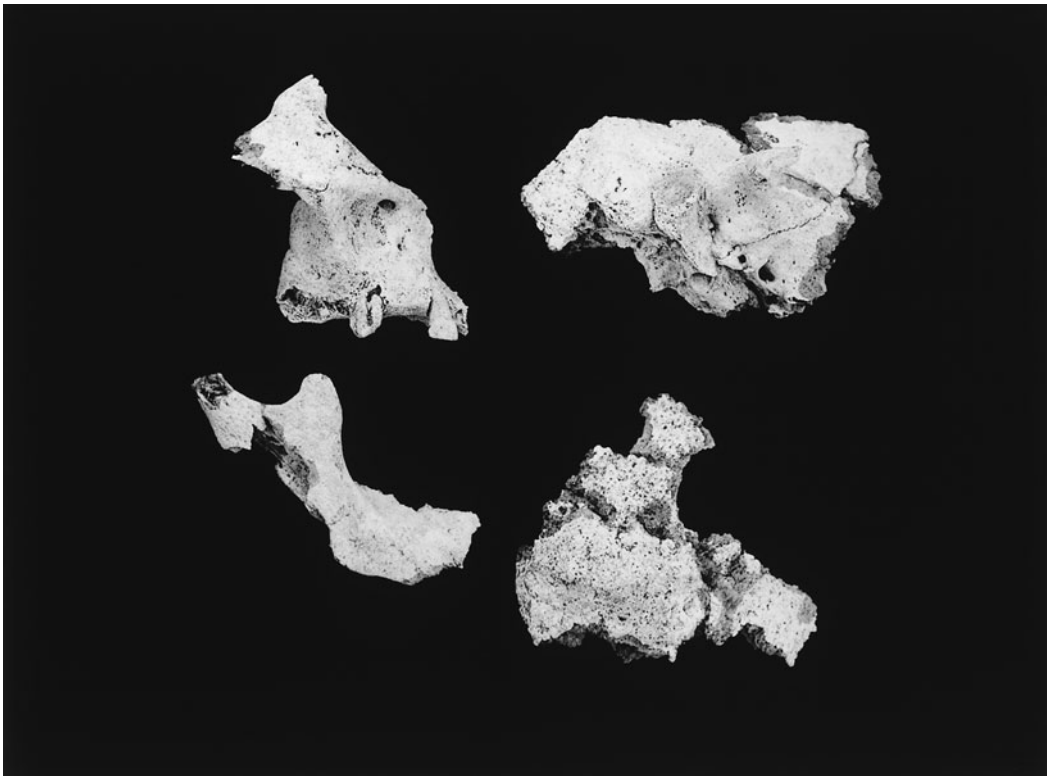
5．内藤芳篤、1973：人骨。尾窪－熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査（熊本県文化財調査報告12）：62－78.

6．内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾５号墳出土の人骨について。塚原（熊本県文化財調査報告第16集）：317－322.

7．内藤芳篤・他、1978：杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡（熊本県荒尾市文化財調査報告第３集）：116－122.



1 号土壙墓人骨（男性・壮年）（The Funairi 1, young adult male）



3 号土壙墓人骨（男性・熟年）（The Funairi 3, mature male）

第　V　章

ま　と　め

第Ⅴ章　ま　と　め

本遺跡は、掘立柱建物２棟のみしか確認されなかったものの、それを取り囲む大規模な堀が確認された中世の居館跡である。居館の営まれた中心は、14世紀中葉から15世紀中葉であると思われるが、ここでは、こうした遺跡の性格について若干の考察を加えてみたい。

なお、第Ⅱ章で概述のとおり、Ⅰ区に関しては、遺構は確認されたものの、大規模な削平を受けていた。出土した遺物から判断すれば、Ⅱ区と同時期の遺構であると思われる。しかし、上層部の削平及び道路による調査区の分断により、調査区全体の性格づけまでは至らなかった。そのため、Ⅰ区の詳細については、今後の調査に委ねたいと思う。

１　方形居館跡

今回の調査の大きな成果は、第46図に示す調査区を囲む堀が確認できたことである。確認した３条の堀の主要な部分を占めるのが１号堀である。幅約4.2～6.3m、深さ約0.7～1.4mと場所により不定形ではあるが、本来は、逆台形の同じ規模であったと思われる。

２号堀と３号堀は、平行して位置しており、切り合い関係にある。３号堀は、１号堀の一部と２号堀を全域で切っている。３条の堀から出土した遺物は、12世紀後半のものが少数含まれていたものの、いずれも15世紀代のものが中心であった。このことから、３条の堀は、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。つまり、１号堀と２号堀によって、本来の堀が形成され、その後、２号堀の掘り替えとして、３号堀が形成されたと考えられる。

今回、調査区内では、土橋状遺構と思われるものは確認できなかった。これは、後述する堀の推定範囲である調査区外に土橋状遺構等が存在している可能性を示している。しかし、今回の調査では、１号堀南側で平行する形で同時期の道路状遺構が確認された。この道路状遺構との関係からすれば、本来は、堀の南側に土橋状遺構に相当する遺構が存在する可能性も否定できない。このことについて、３条の堀の位置関係から推測できたことを以下に記し、今後の調査に委ねたいと思う。

第46図に見られるとおり、１号堀と２号堀は、それぞれの接点となる位置で、立ち上がりが確認できる。このことは、１号堀と２号堀間に土橋状遺構に相当する遺構が存在していた可能性を秘めている。これは、１号堀の堀形が西側と東側で大きく違っていることにも関係している。つまり、１号堀の中央より以東は、本来の形を拡張しているが、この延長線上に２号堀の立ち上がりが見られ、３号堀へとつながっている。これは、２号堀の掘り替えである３号堀造成時に、１号堀の一部が拡張された可能性を示していると考えられる。

しかし、今回の調査では、１号堀と２号堀間には、１号土壙墓が存在しており、その直接の接点については、断定できるものを得ることができなかった。

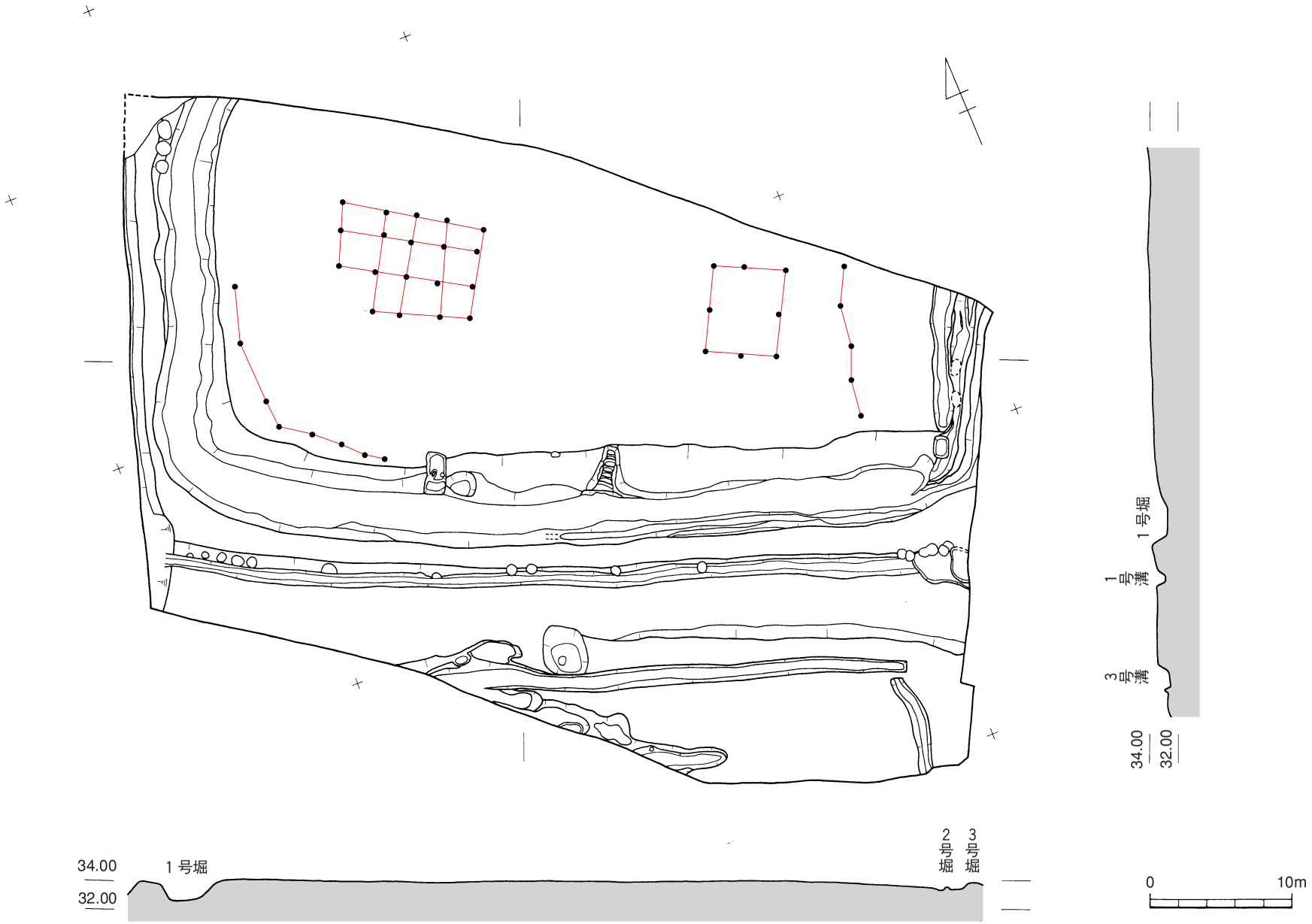
今回の調査で確認できた３条の堀は、全て北側の調査区外へと伸びていることが確認できた。本来の堀による区画の範囲については、調査区外であるため詳細ついては、今後の調査に委ねるが、ここでは、現地の踏査及び測量によって、推測できたことを記しおく。

堀の推定範囲、つまり方形居館跡は、第47図に示すとおりである。以下その根拠を示しておく。

第一に、確認できた１号堀北側の延長線上約４ｍ先には現在の道路が存在し、１号堀と軸を同じにしている。この道路は、第48図の明治期の地籍図によると、以前は、調査区内まで伸びており、それは１号堀の位置と重なることが確認できる。このことからも、現在の道路は、１号堀の延長線である可能性が高い。

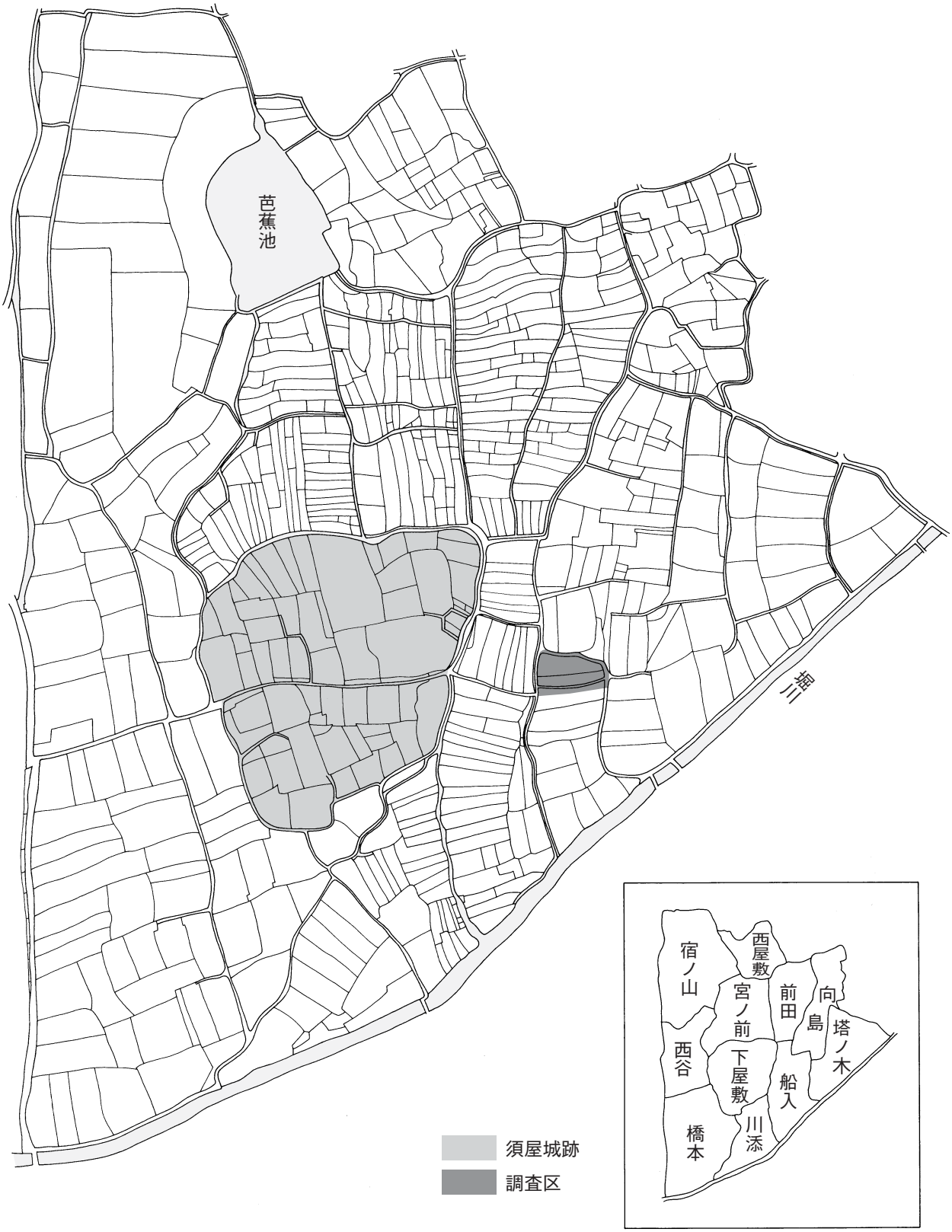
第二に推定範囲の北側部分の一部に現在も溝が残存していることである。この溝は、１号堀の南側部分と同軸の北西に軸をとっている。現在、上層部は埋没しているが、地域の方の話から、溝は古くから存在し、本来もっと深かったということであった。

第三は、第48図に示す明治期の遺跡周辺の地籍図である。推定範囲を境として、字境となっている。



第46図　Ⅱ区全体断面図

第47図　堀推定図



第48図　周辺地籍図

また、２号堀及び３号堀の延長線上にある墓地は、近世のものであり、それは地割からもうかがえる。

この堀の推定範囲は、南北を長辺とする方形区画となる。その規模は、南北の長辺が約97.0m、東西の短辺が約57.0mを測る。北東部分のコーナーのみが直線的な形状をとる。なお、この北東側の隣接した箇所は、現在は竹林であるが、地域の方の話から古くは寺跡であり、踏査の際には、15世紀頃の空風輪も確認できた。

今回の調査区内で、確認できた掘立柱建物は２棟のみであった。推定範囲とした方形居館跡の約３分の１の調査であり、調査区外が居館跡の中心となるものと考えられる。

2　関連遺構

１号堀の南辺と平行に軸をとるのが道路状遺構と１号溝である。道路状遺構、１号溝ともに、調査区を東西に横断しており、調査区外へと延びている。調査区外については、大規模な削平を受けており、不明であるが、その延長線上約70m先には、須屋城跡が存在している。第48図の地籍図からこの道路状遺構が須屋城跡へと続いていることも推測できる。

第Ⅱ章でも述べたとおり、路面は少なくとも３時期に分けられる。出土遺物から判断すると、１号堀と同時期の路面は、第２面及び第３面である。それぞれの路面は、１号溝と共存関係にあったと考えられる。堀と道路状遺構、それに伴う１号溝、これらは、ほぼ平行に軸をとっており、そこには計画性もうかがえる。

これら遺跡の主要な部分を占めるこれらの遺構の廃絶時期は、出土遺物から判断すれば、15世紀中葉であり、方形居館跡は、14世紀中葉から15世紀中葉に存在していた館跡であると考えられる。

なお、１号堀内に存在している階段状遺構であるが、本来の堀造成時のものではないと思われる。階段状遺構は、１号堀拡張後の立ち上がりに位置していることから、１号堀の改築時に新たに創られたものと考えられる。しかし、その目的や性格については、不明である。

本遺跡から出土した遺物は、それほど多くはない。しかし、輸入陶磁器類や１号堀から出土した天目碗（21－54）や茶釜（25－112）、13号溝から出土した茶釜（37－263、264）等も見られ、また、方形居館跡の規模から、本遺跡の性格をうかがい知ることができる。さらに、ほぼ同時期の平城である須屋城跡と隣接しており、須屋城主と関係する人物の居館跡である可能性が考えられる。須屋城跡を含めた今後の調査成果に期待したい。

参考文献

水野哲郎　1993 『祇園遺跡』熊本県文化財調査報告書第188号　　熊本県教育委員会

濱田彰久　1997 『庵ノ前遺跡Ⅲ』 熊本県文化財調査報告第160集　　熊本県教育委員会

濱田彰久　1999 『迫ノ上遺跡』 熊本県文化財調査報告第170集　　熊本県教育委員会

濱田彰久　1999 『古閑山遺跡』 熊本県文化財調査報告第171集　　熊本県教育委員会

山下義満　2001 『灰塚遺跡（Ⅱ）』熊本県文化財調査報告書第197号　熊本県教育委員会

隈　昭志　1978 『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集　熊本県教育委員会

浦田信智　1985 『西谷遺跡』 熊本県文化財調査報告第76集　　熊本県教育委員会

平岡勝昭　1986 『新南部・潤野遺跡』 熊本県文化財調査報告第84集　　熊本県教育委員会

山本信夫　2000 『大宰府条坊跡ＸＶ』 大宰府市の文化財　第49集　大宰府市教育委員会

金城亀信他編　1998 『首里城跡』 沖縄県文化財調査報告書第132集　　沖縄県教育委員会

中世土器研究会編　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』　　新陽社

小野正敏編集代表　2001 『図解・日本の中世遺跡』　　東京大学出版会

森田　勉　1982 「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」　『貿易陶磁研究』第２号

上田秀夫　1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」　『貿易陶磁研究』第２号

永井久美男編　1994 『中世の出土銭』　　兵庫埋蔵銭調査会

鋤柄俊夫　2002 「考古学からみた中世村落研究の可能性　－日置荘と冨田荘－」

『居伝遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第79冊　2000　奈良県立橿原考古学研究所

西合志町史編纂委員会　1995　西合志町史２巻　　西合志町

『日本城郭大系　第十八巻　福岡　熊本　鹿児島』 1979　新人物往来社

付　編

伝てっぽう塚

例　　言

1　本書は、一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成10年度に実施した熊本県清水町字砥崎に所在する「伝てっぽう塚」の調査報告書である。

2　調査は、国土交通省九州地方整備局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育委員会が実施した。

3　現地調査は、高谷和生・石橋和久が行った。地形測量を含めた実測の一部を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。遺物の実測は井島・井上・宮崎・坂本が行った。遺構製図及び遺物製図は横山が行った。

4　本書に掲載している遺構実測図は、以下の縮尺で作成した。全体遺構配置図600分の１、塚40分の１、溝60分の１である。

5　本書の執筆・編集は角田があたり、校正に際しては横山が補助した。

6　遺物等の一切の資料は、熊本県文化財資料室（熊本市渡鹿３丁目15－12）で一括保管している。

目　　次

例　言

第Ⅰ章　調査の概要

1　調査に至る経緯と経過……1
2　調査の組織……1
3　調査の方法と経過……1

第Ⅱ章　調査の成果

1　はじめに……1
2　遺構とそれに伴う遺物……5

第Ⅲ章　ま　と　め……5

挿図目次

第１図　全体遺構配置図　　第２図　溝実測図
第３図　塚・溝実測図　　第４図　出土遺物実測図

第Ⅰ章　調査の概要

1　調査に至る経緯と経過

伝てっぽう塚は、「新地包蔵地」内の熊本市清水町字砥崎に所在している。昭和47年度の北バイパス予定地内の踏査では、確認されていなかった文化財である。

平成10年度、本塚に隣接する北バイパス予定地内において土の採掘が行われた際、地域住民から以下の内容の要望があった。採掘地に隣接して、南北朝時代から西南戦争の時期と口伝されている『伝てっぽう塚』が存在している。この塚を地元の文化財として保存できないかという内容であった。

これを受けて文化課は、早急に踏査を行い現状の把握を行った。塚の現状は、ブロック３段組で囲まれた南北3.5m×2.5m×0.6mの土壇状であった。確認調査は、平成10年12月２日から２日間で行った。確認調査では、塚本体の４分の１を半割して調査を実施した。覆土内からは、古代の蔵骨器と共に木炭・骨片がまとまって出土した他、中世から近世にかけての遺物も出土した。塚本体は、原位置ではなく移動していることが判明した。このほか、新たに一条の浅い溝も確認した。

これを受け、塚本体の原位置については周辺部分約500㎡の発掘調査が必要である旨を熊本工事事務所に通知し、発掘調査を行った。

2　調査の組織

【平成10（1998）年度　確認・本調査】

調査責任者	豊田貞二（教育審議員兼文化課長）
	川上康治（課長補佐）
調査総括	松本健郎（課長補佐兼調査第１係担当）
調査担当	高谷和生（参事）
	石橋和久（非常勤嘱託）
調査事務局	伊津野博（課長補佐）
	小斉久代（総務係長）
	岸本誠司（主事）
	川口久夫（主事）
	東　　修（主事）

3　調査の方法と経過

発掘調査は平成11年２月１日より３月８日までの約１ヶ月間行った。まず、重機による表土剥後、手作業による清掃を行った。引き続き国土座標にあわせたグリッドを調査区内に設定した。設定したグリッドの一辺の長さは５mである。表土剥ぎは、表土と暗黒褐色土を取り除いた第Ⅲ層上面でとめている。塚本体が位置する北側部分は、この第Ⅲ層が大きく削平されている。また、調査区の西側部分は大規模な撹乱をうけていた。

塚本体は、確認調査時に１／４を半割した土層断面を作成後、塚本体を取り除いた。溝は、平面形を確認後、断面図を作成し発掘を行った。

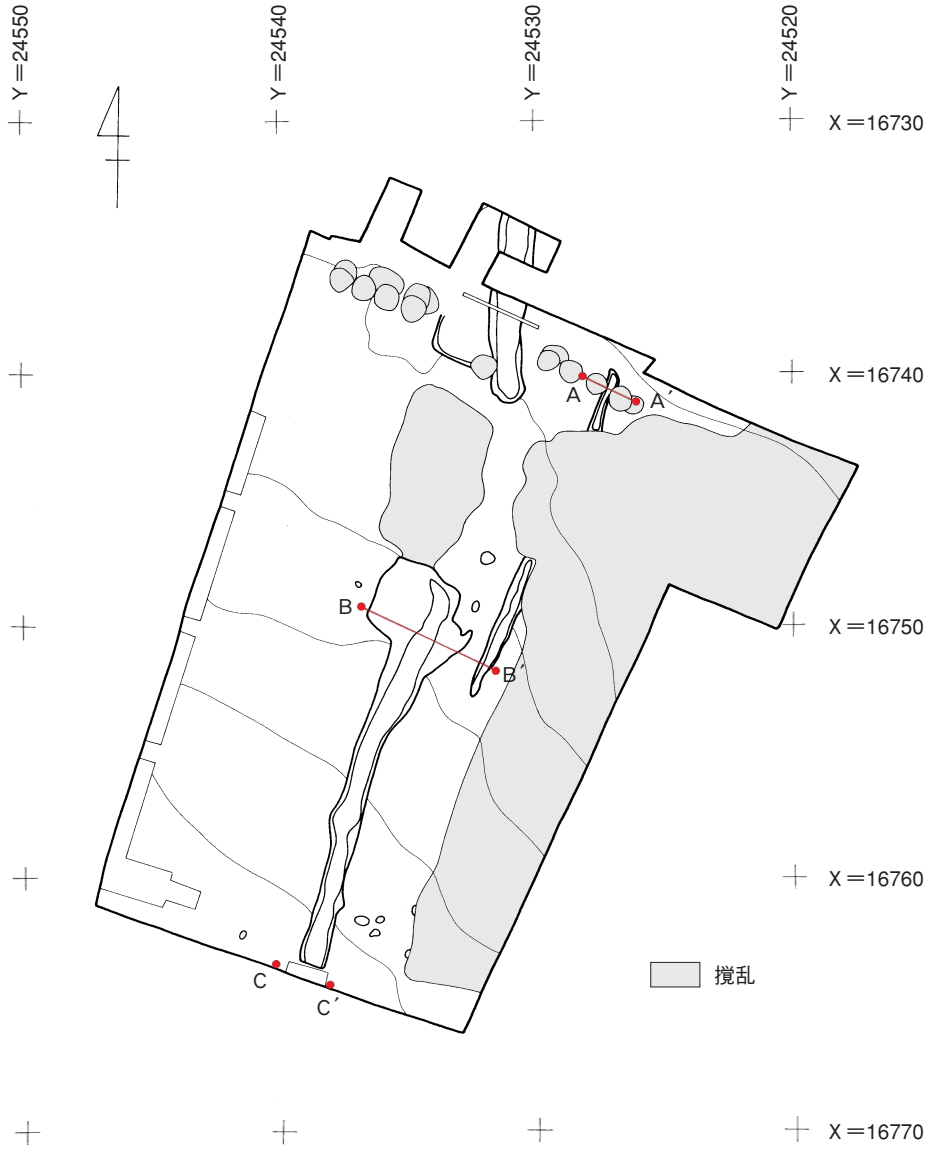
写真はモノクロとリバーサルの２種類で撮影した。写真機の種類は35㎜の一眼レフを使用した。撮影は、それぞれの遺構について２方向から２枚ずつ基本としている。

第Ⅱ章　調査の成果

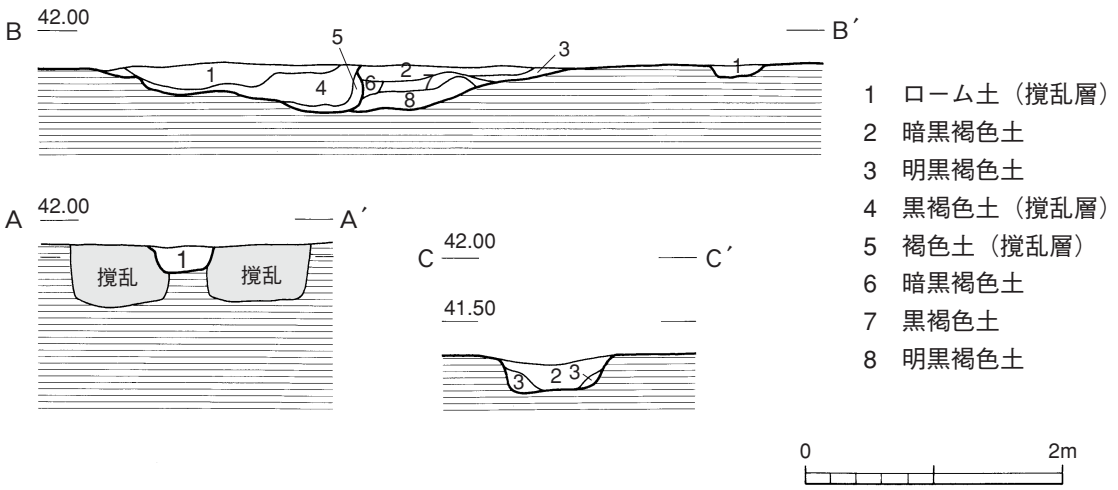
1　はじめに

今回の調査で確認できた遺構は、塚と溝３条である。この他にもピットも確認できたが、そのほとんどが、埋土の状況から近現代のものと判断した。調査区内は、宅地造成時の際に大規模な削平を受けており、また、西側部分は撹乱をうけていた。調査面積も狭いことと合わせて、遺跡の性格付けまでは至っていない。また、今回の調査目的である本来の塚の位置については確認できなかった。

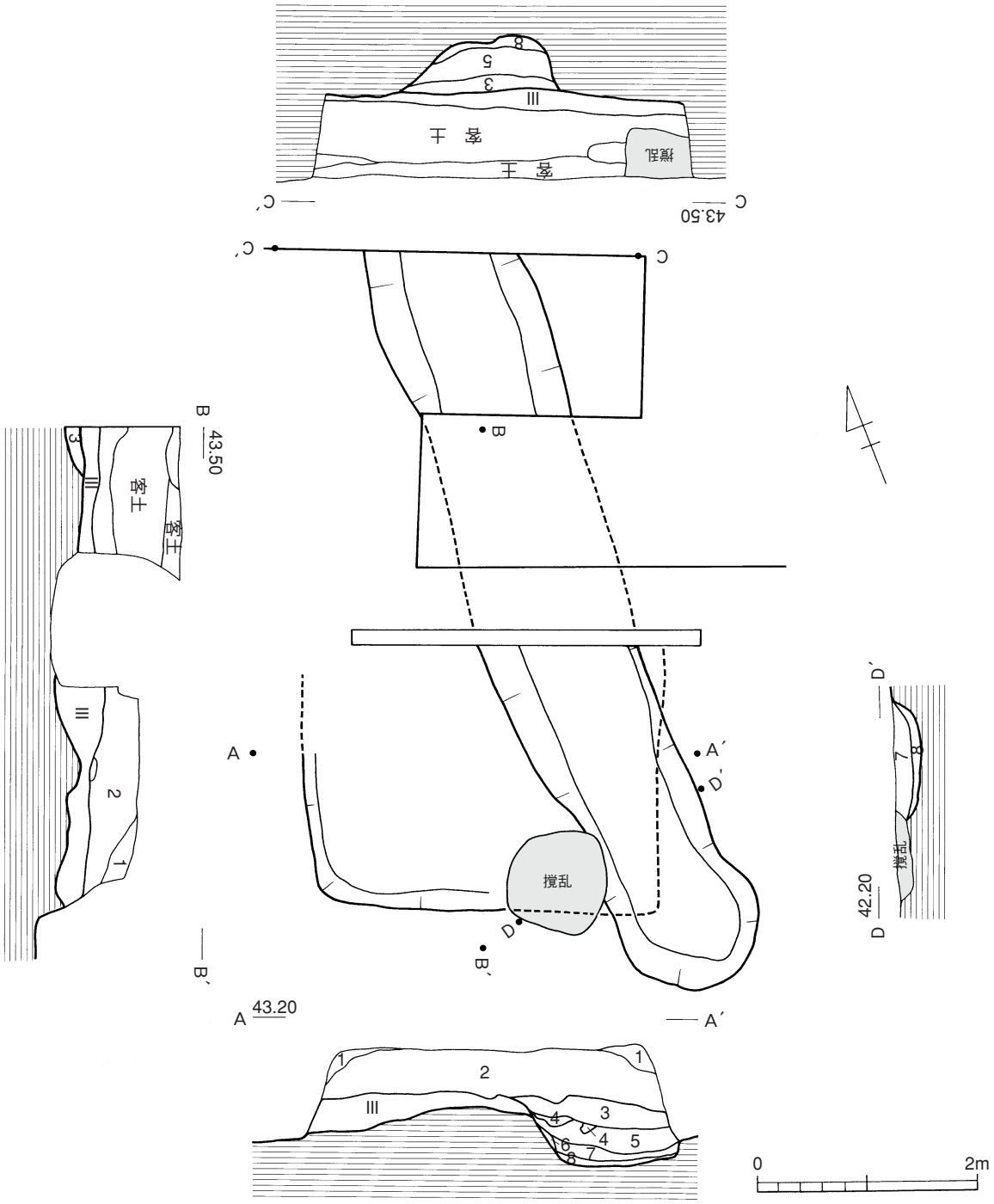
以下、基本土層を示しておく。



第１図　全体遺構配置図（１／300）

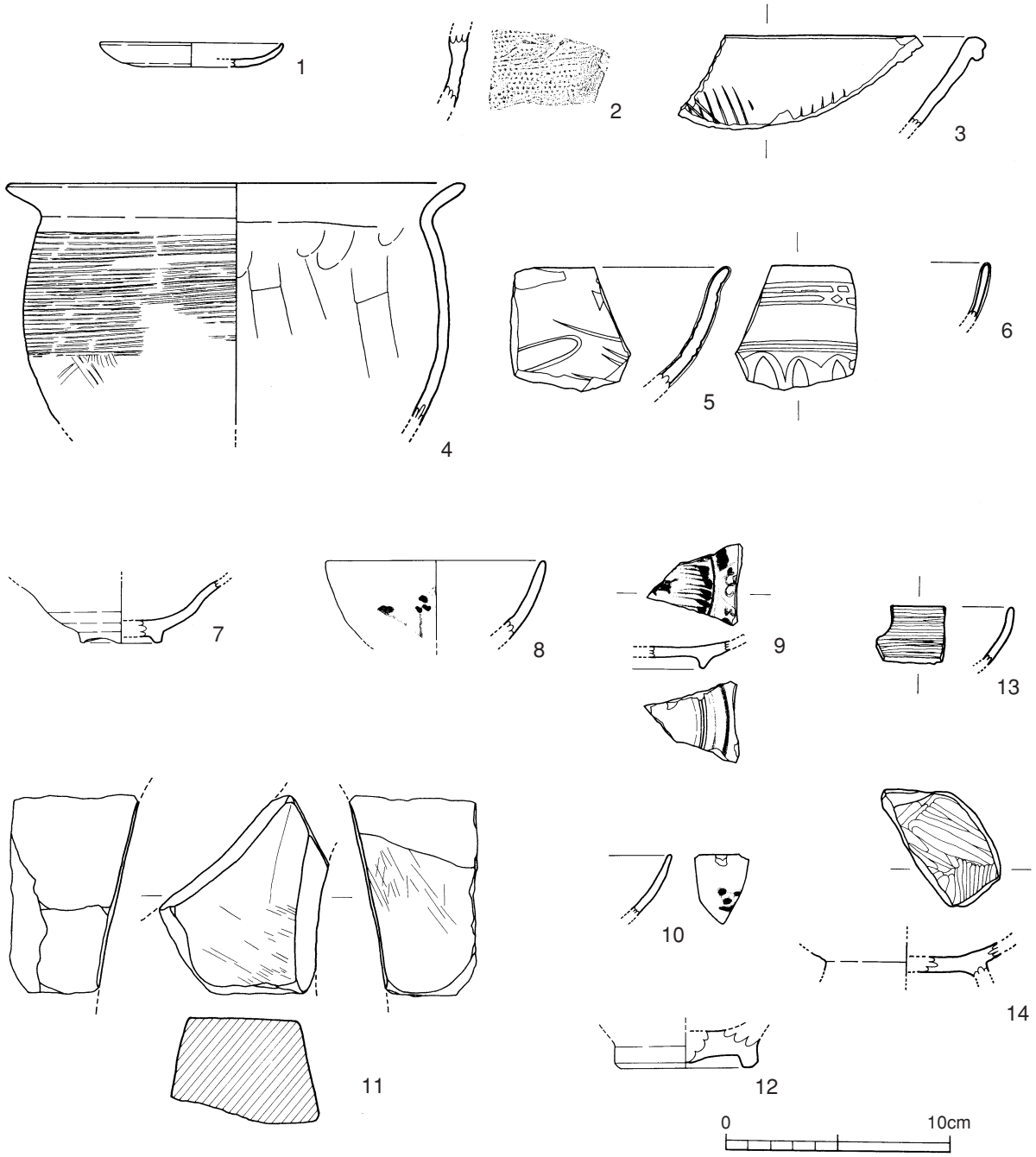


第２図　溝実測図



1　明茶褐色土　　5　暗黒褐色土
2　茶褐色土　　6　明茶褐色土
3　暗茶褐色土　　7　暗黒褐色土
4　黒色土　　8　明黒褐色土

第3図　塚・溝実測図



第４図　出土遺物実測図

【基本土層】

第Ⅰ層　表土（客土）

第Ⅱ層　暗黒褐色土

第Ⅲ層　黒褐色土

古代の遺物の包含層。調査区の北側は削平され消滅している。

第Ⅳ層　明茶褐色土

遺跡全体での遺構確認面になる。

第Ⅴ層　黒褐色土

ニガ土で、部分的にブロック状に硬化したニガ土を含む。

第Ⅵ層　明褐色土

ソフトローム層で、地山。

2　遺構とそれに伴う遺物

塚本体（第３図）

塚本体の現状は、コンクリート壁を境にして南側に基壇状に盛土されていた。

基本層序の第Ⅲ層上に行っている盛土は、大きく２層に分層できる。第４図の１から11に示す塚出土の遺物は盛土中の茶褐色土内からのものである。古代の土師器や中世の陶磁器、近世の肥前系染付と時代幅のあるものを包含しており、図化した以外にも縄文から近世までの遺物がみられた。新しいものでは近代のものも包含していることから塚本体は、近代になって移築されたものであると思われる。

確認調査時に出土している蔵骨器は、骨片や木炭片を伴っていることから、本来の塚に関係するものである可能性も否定できない。

１号溝（第３図）

塚本体の土を除去後に検出した溝である。幅80㎝、深さ約50㎝で南北に軸をとる。基本土層の第３層より掘り込まれている。北側は調査区外の拡張トレンチ部分では良好に残っており、調査区外へと続くことが確認できた。南側は、上層部が削平され浅くなり、消滅している。しかし、主要な埋土である６、８、９層は、２号溝の埋土と同一であり、軸もほぼ同じであることから推測すれば、同一遺構である可能性もある。

塚との直接の関係は認められない。

２号溝（第２図）

調査区中央部から南側に伸びる溝で、ほぼ南北に軸をとっている。南側は、調査区外へ伸びている。北側は削平を受け、消滅している。１号溝と同様、基本土層第Ⅲ層より掘りこまれる。

中央部分は大きく撹乱を受け、第１図の断面土層の第１、４、５層は反転されている。

埋土内から第４図12の青磁碗や第４図13・14の内黒の黒色土器等が出土している。このことから推測すると中世の溝と考えられる。

３号溝（第２図）

一部撹乱により分断されているが、南北に軸をとる溝である。近世のイモ穴を切っている。

遺構内埋土からの出土遺物はない。また、埋土は、調査区北側の近世イモ穴群の埋土と同じであることから、近世の耕作に伴う溝であると思われる。

第Ⅲ章　ま　と　め

塚本体の盛土内から出土した古代から近代までの遺物から判断して、塚本体が近代になって現位置に移築していることは確実である。

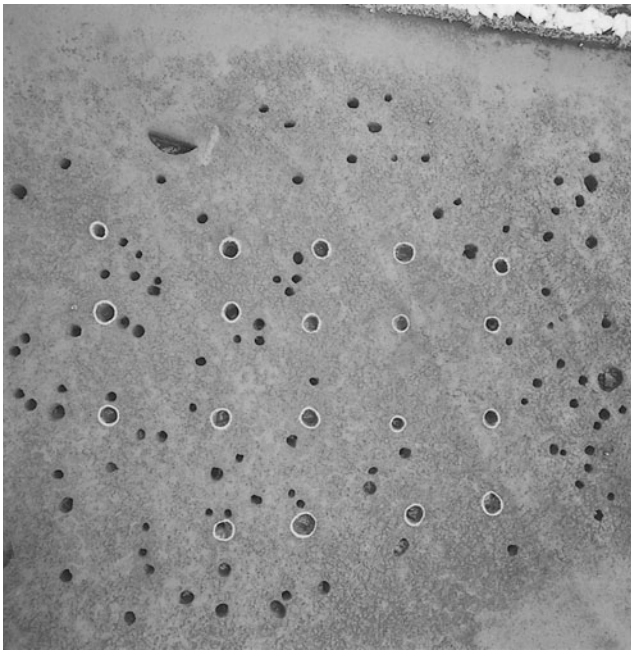
しかし、本来の塚の位置を特定するまでには至らなかった。地域の伝承では「南北朝期から西南戦争の頃」と時期幅が大きい塚の時期についても特定できるものを得ることはできなかった。

ただし、塚の時期については、蔵骨器が一つの手がかりになると思われる。これは、確認調査の際に木炭と骨片と共に集中して出土している。塚本来の意味合いから考えると、移動とともに本来の塚から持ち込まれた可能性も否定できない。この蔵骨器をもとに推測すれば、本来の塚の時期については、古代（平安時代）と考えられる。ここでは、一つの可能性として示しておく。

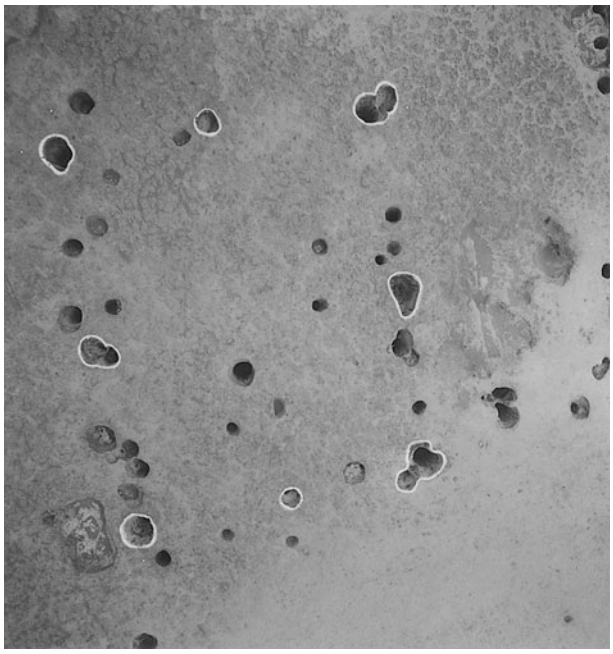
さらに、今回の調査で塚以外の遺構も確認できたことは、本調査区を含めた周辺地域に遺跡が存在していたことを物語っている。

図　　版

（3）遺跡全景



（4）1号掘立柱建物



（5）2号掘立柱建物

（６）１号堀全景（西より）

（７）１号堀断面

（８）１号堀（東より）

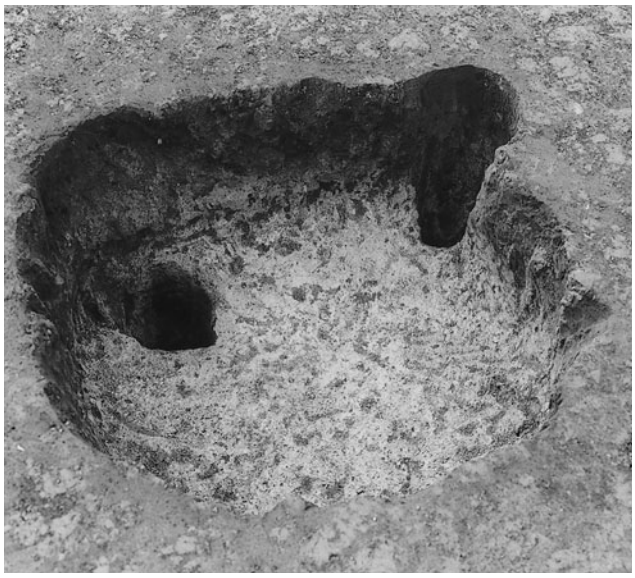
（９）階段状遺構

(10) 道路状遺構　第１面（東より）

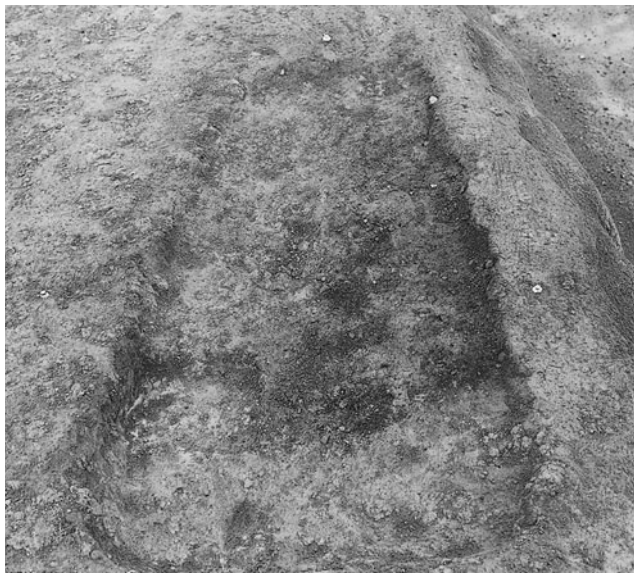
(11) 道路状遺構　第２・３面（東より）

（12） 2号溝（東より）

（13） 2号溝・6号土坑（西より）



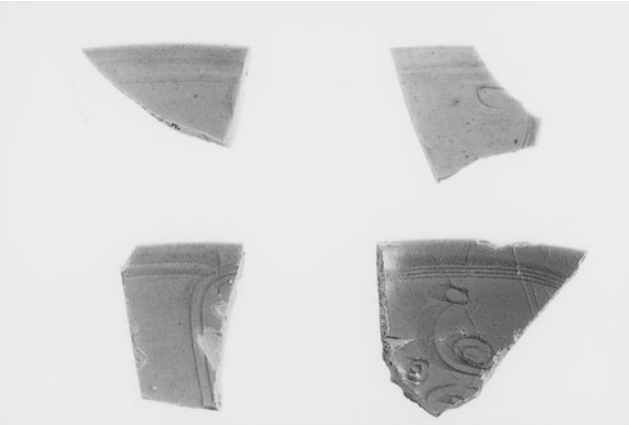
（14） 4号土坑



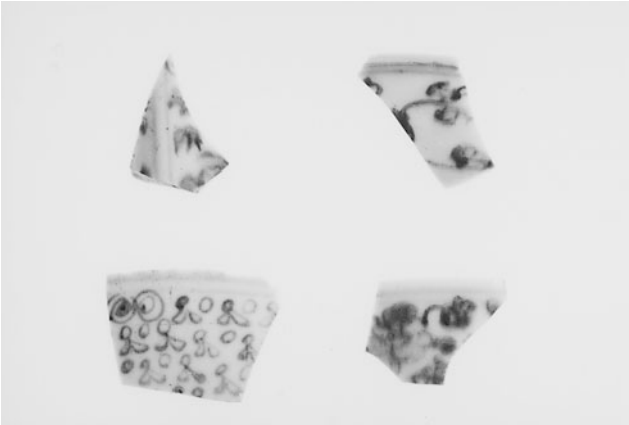
（15） 8号土坑

（16） 1号土壙墓

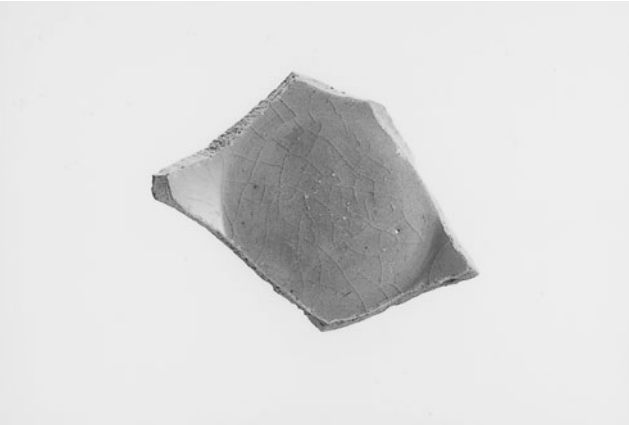
（17） 2号・3号土壙墓



（18）遺物①　19―4，1，2，3

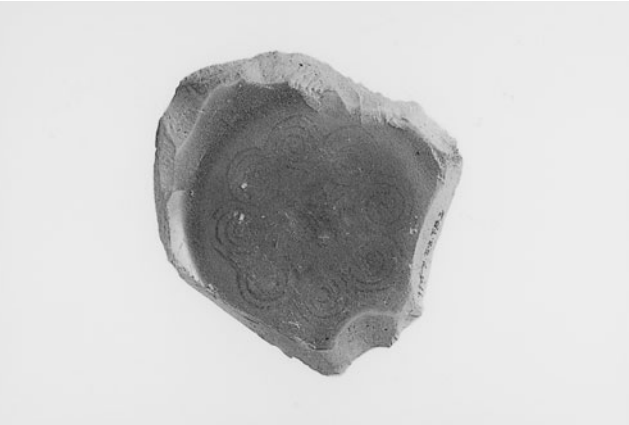


（19）遺物②　21―53，51，50，52



（20）遺物③　19―8

（21）遺物④　19―12



（22）遺物⑤　20―25

（23）遺物⑥　30―162，165

（24）遺物⑦　35―221，222

（25）遺物⑧　36―252

（26）遺物⑨　19―7

（27）遺物⑩　19―10

（28）遺物⑪　19―15

（29）遺物⑫　19―17

（30）遺物⑬　20―29

（31）遺物⑭　20―30

（32）遺物⑮　21－46

（33）遺物⑯　22－75

（34）遺物⑰　23－80

（35）遺物⑱　25－112

（36）遺物⑲　26－127，125

（37）遺物⑳　27－143

（38）遺物㉑　30－161

（39）遺物㉒　31－180

（40）遺物㉓　35－235

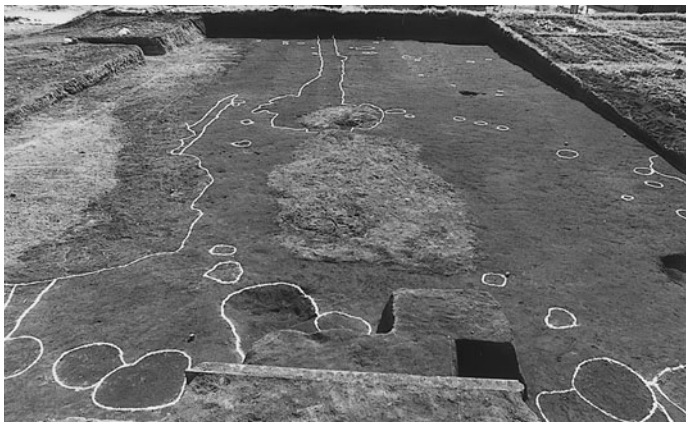
（41）遺物㉔　37－262

（42）遺物㉕　37－263

（43）遺物㉖　40－297，298

（44）伝てっぽう塚

全　景（北より）



塚本体（南より）

塚本体（北より）

２号溝（南より）

あ　と　が　き

現在は、北バイパスの工事が開始され、遺跡の跡地には高架橋が立ち並び、その風景も変わりました。

ここで、多くの作業員の方々と一喜一憂し、地域の多くの方々がこの遺跡を訪れた痕跡は、もう存在していません。しかし、調査に関われた人々や地域の人々の中で、ここに人々の生活の跡が確かに存在していたことは、受け継がれていくことと思います。

ここに、船入遺跡の報告書を刊行することができましたが、果たして十分な成果をあげることができたかどうか不安です。しかし、全てにおいて不慣れな私を支えてくださった多くの方々のご協力とご努力がありました。

ここに、作業に携わってくださった皆さんのお名前を記して感謝の意に代えます。（順不同、敬称略）

調査作業員

浅井　裕美	猪島　　渚	江口　京子	太田　豊實	緒方　　萬	緒方　節子
柏尾　重登	柏尾　博子	一　多喜雄	門脇　公美	栗原　美和	後藤　和子
齊藤　大典	坂田　眞理	篠原　洋子	白井　千秋	田尻富美子	昇　ゆかり
橋本　圭司	枇杷　智子	藤木　敏章	藤木　久子	増田　智行	松隈　則代
松山さつき	三浦　勝之	水上　敏貞	宮本　誠基	村内　軍記	村上　晴美
森　　健郎	安田　節爾	吉田美奈子			

整理作業員

井島　秀子	井上　裕美	今村　幸枝	小山　正子	坂本貴美子	堤　　佑季
宮崎　典子	森崎　潔子	山野　孝子	吉本　清子		

報告書抄録

ふ り が な	ふないり
書　　名	船入遺跡
副 書 名	一般国道３号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告書
シリーズ号	第217集
編著者名	角田　賢治
編集機関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862－8570　熊本県熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	2004年３月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
船入（ふないり）	熊本県（くまもとけん） 菊池郡（きくちぐん） 西合志町（にしごうしまち） 大字（おおあざ） 須屋字（すやあざ） 船入（ふないり）	43405	067	61.057	145.554	2001．9．17 ～ 2002．3．25	3,600㎡	一般国道３号熊本北バイパス改築事業
伝（でん）てっぽう塚（づか）	熊本県（くまもとけん） 熊本市（くまもとし） 清水町（しみずまち） 大字（おおあざ） 砥石（といし）	43405				1999．2．1 ～ 1999．3．8	570㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
船　入	居館跡	南北朝時代 室町時代	堀・掘立柱建物・道路状遺構・階段状遺構・溝・土坑・土壙墓	青磁器・白磁器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・鉄製品	
伝てっぽう塚	包蔵地		塚・溝	土師器・瓦質土器・青磁器・染付	

熊本県文化財調査報告書　第217集

船　入　遺　跡

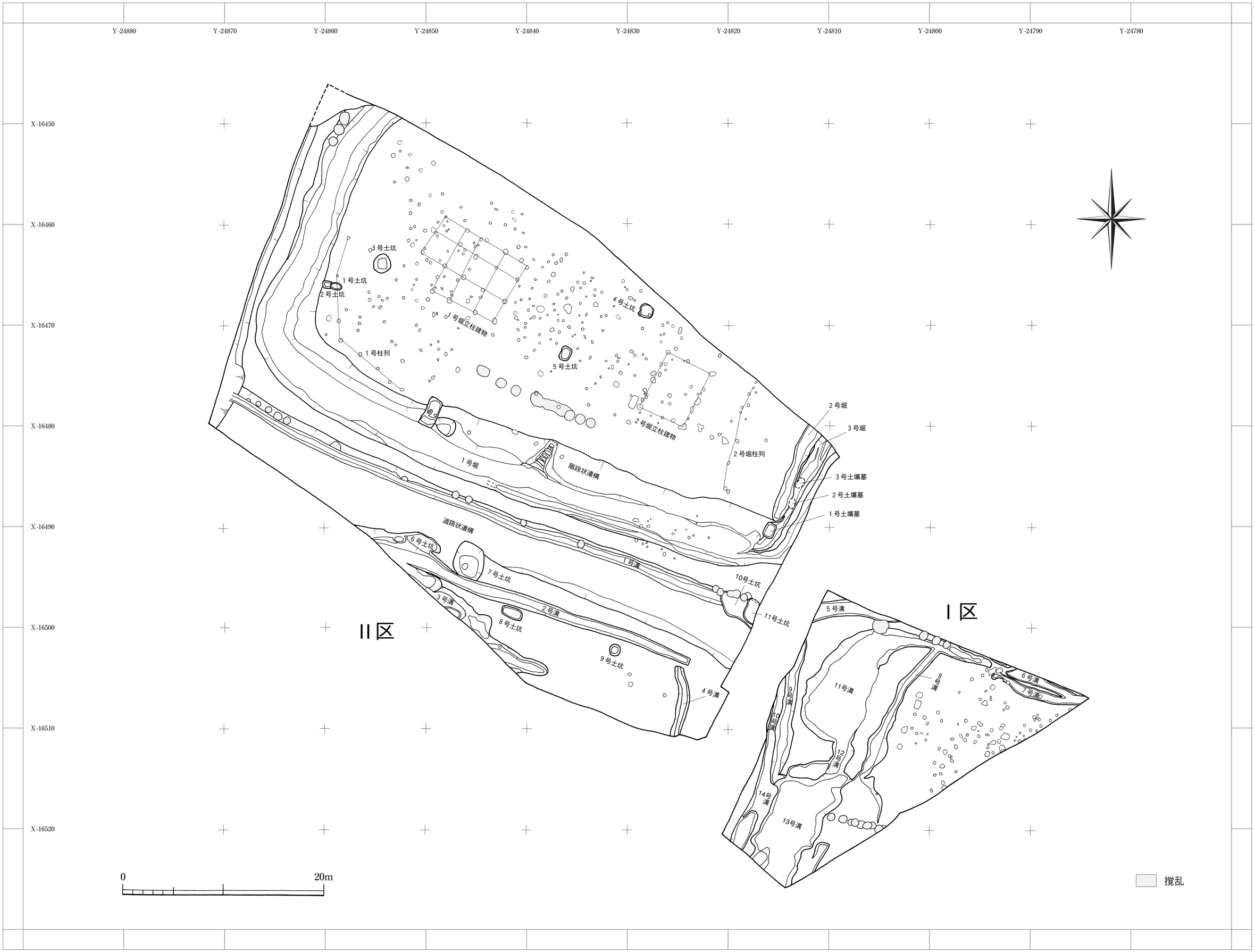
発行年月日　　平成16年３月31日

編　集
発　行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市水前寺６丁目18番１

印　刷　株式会社　啓 文 社
〒861-3102　上益城郡嘉島町下六嘉1765

15　教　教文
②　００３

船入遺跡全体遺構図（1／200）



この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 217 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 船入遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日